
メガドライブ冒険ゲームブック
ファンタシースターIII
時の継承者
山崎和緒
安藤　夏
双葉文庫　ゲームブックシリーズ

ファンタシースターⅢ

時の継承者

山崎和緒・安藤　夏

FUTABASHA GAME BOOK

双葉文庫

メガドライブ冒険ゲームブック

ファンタシースターIII/時の継承者

山崎和緒・安藤 夏／S・ハード

双葉社

PHANTASY STARIII/The City And The Stars
by Studio Hard Co., Ltd. and
Kazuo Yamazaki, Natsu Andō, Kotatsu Maeda

Illustrations by Kunio Aoki, Kei Eiji
Character and Basic Licenser

First Published by Futada-sha Books Co., Ltd.
3-28 Higashi-Gokencho, Shinjuku, Tokyo, Japan

ファンタシースターIII／時の継承者

CONTENTS

プロローグ

昔、人類は自在に空を駆け、地を動かす力を持っていたという。
人々はその力を使い、超文明に守られて、平和に、幸せに暮らしていたのだという。
しかし千年前、ライアというひとりの少女が出現し、平和は崩れさった。彼女はモンスターを創り出す不思議な力を持ち、その力を使って、世界を征服しようと企んだのだ。
次々と出現するモンスター軍団の前に、さすがの超文明もなすすべもなく、世界はライアの手に落ちるかに見えた。だが、その時、ひとりの青年がロボットたちを率いて、ライアに敢然と立ち向かったのだ。彼の名は、オラキオ・サ・リーク。彼は超文明の粋をつくして、最強のロボット軍団を形成した。
戦いは一進一退、なかなか決着はつかなかった。ついに、両軍とも最後の決戦を決意。オラキオは信頼するアンドロイドのミューン、ロボットのサイレンとともに、ライアは忠実な片腕のエシル家公子とともに、すべての戦力を投げ出す、全面戦争へと突入した。
壮絶な戦いの後、エシル公子は宇宙の彼方へ追放され、サイレン、ミューンも行方不明となった。そして、ライアとオラキオは、相打ちになったと伝えられている。リーダーを失った軍はそれぞれにちりぢりとなり、戦いは混乱の内に終了したのであった。
長い長い戦争は、文明を破壊し、人類をまっぷたつにわけてしまった。オラキオとともに

プロローグ

に戦った人々は『オラキオの民』と呼ばれ、ライアに従い戦った人々は『ライアの民』と呼ばれた。また、人類の生活は退化し、空を駆ける力も、地を動かす力も失い、より狭い世界で生きていくこととなった。

そして、千年――。超文明の記録も、戦いの記憶も、ともに伝説となった頃。

オラキオの民、リーク国の王子ケイン・サ・リークが、記憶を失ったひとりの美しい少女を海岸で助けた。それが、物語の始まりである――。

「ケイン様、マーリナ様、ご結婚おめでとうございます」

「おめでとうございます」

城の広間に、みんなが祝福のアーチを作っている。その中を玉座に向かって、マーリナとふたりでゆっくりと進んだ。そこには父王が座り、笑顔でぼくたちを迎えている。

今から、ぼくとマーリナは結婚の誓いをたてるのだ。

最初ぼくがマーリナとの結婚を言いだしたとき、父も母も大反対したものだった。理由は、彼女が名前の他は何も憶えておらず、素性が知れないこと、そしてぼくに生まれたときから決められているいいなずけがいたことだった。しかし、顔も見たこともないいいなずけなどナンセンスだ。ぼくは、海岸に倒れているマーリナを見つけたときから、彼女にひかれていた。ぼくの固い決心に、両親もやがては折れた。ふたりとも、今ではマーリ



ナの素晴らしさをわかってくれている。
ぼくたちは、玉座の前に並んで立った。マーリナを見ると、少しはにかみながら、でも心から嬉しそうに笑っている。それは、ぼくたちにとって、まさに至福の瞬間だった。
だがその時！　どこからか暗黒色の竜が飛来し、その鋭い爪でマーリナをガッシリとつかんだのだ!!
「きゃあああああっ！　ケイン様ぁ!!」
「ハハハハハッ！　マーリナ姫はライアの民がいただいた！」
すべては一瞬の出来事だった。ぼくが応戦する間もなく、黒竜は、その大きな翼を広げ、マーリナを連れ去ってしまったのだ。
「マーリナ！　マーリナ!!」
追いかけようにも、もう姿は見えなかった。くそ、こうなったら、ライアの一族と戦ってでも……！　しかし、軍隊を動かそうとしたぼくに、父王の怒鳴り声が降ってきた。
「愚か者!!　場所さえわからないライアの民の国にどうやって軍隊を送るか！　一国の王子が、たかが女ひとりに、なんというザマだ！　地下牢にでも入って、頭を冷やすがよい！　衛兵、王子を牢に連れ、閉じこめてしまえ!!」
「そんな……、父上！」ぼくの抗議は完全に無視された。衛兵たちはぼくの両わきをガッシリとつかみ、抵抗するぼくを、地下牢へと引きずっていった——。

⇩１へ

この本の遊び方

冒険に旅立つ前に、ルールを説明します。この本は、あなたのためにいろいろなルートを用意しています。各項目の終わりにある選択肢の指示に従って、進むべき道を決定していってください。

1　行動記録用紙の使い方

ゲーム進行中に必要なことは、すべて２８４ページのこの行動記録用紙に記入することになります。記入ミスのないようにしっかりチェックしましょう。

●バトルポイント表

ここでは、戦闘に使うポイントを決定します。Ａ～Ｆ欄の中に、５、10、15、20、25、30の６つの数字を入れてください。順番は続きでも、バラバラでもかまいませんが、１つの数字は１回しか使えませんので気をつけてください。

●ヒットポイントチェック表

パーティー全体の生命値を表します。最初はヒットポイント10でスタート。仲間が加わったり、宿屋に泊まると増え、負傷すると減ります。そのたび、この表に記入していってください。ゲーム中、ヒットポイントはＨＰと表されています。

●アルファベットチェック表

ゲーム中、『aをチェック』など、アルファベットをチェックするという指示がありま す。そのときは、アルファベットチェック表の当てはまる記号に印をつけてください。このチェックはゲームの進行に関係があるものばかりなので、忘れないようにしましょう。

2　バトルの方法

☆**バトル**　という指示があったら、戦闘開始です。例えば、『ラッピー×2＝10 ケイン＝HP＋D』と表記されていたら、バトルポイント表のDを見てください。その数値と、あなたのヒットポイントを足した数が、指定された相手の数値（この場合は10）より上か同点だった場合は、あなたの勝ち。『勝った』という選択肢へ進んでください。

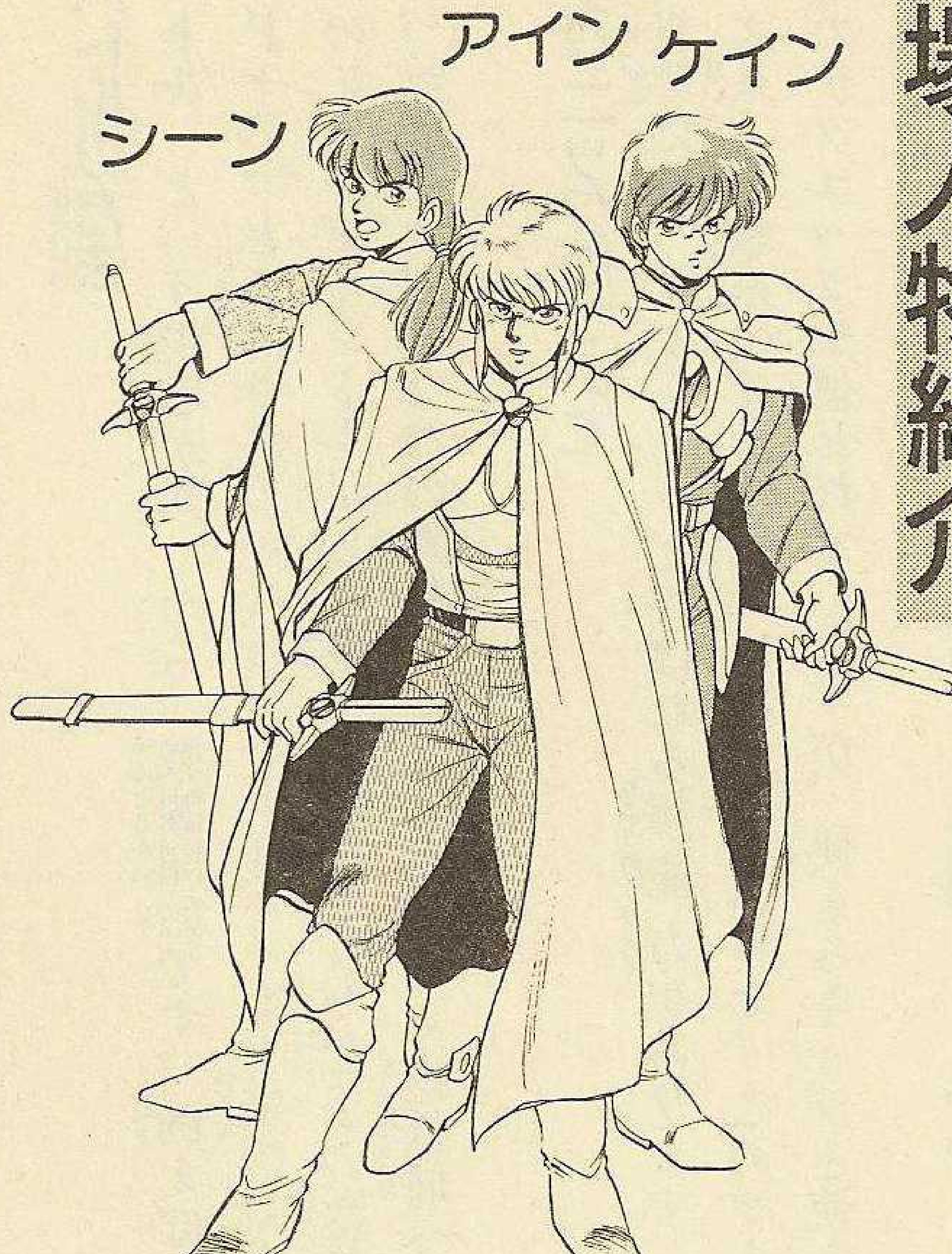
3　テクニックについて

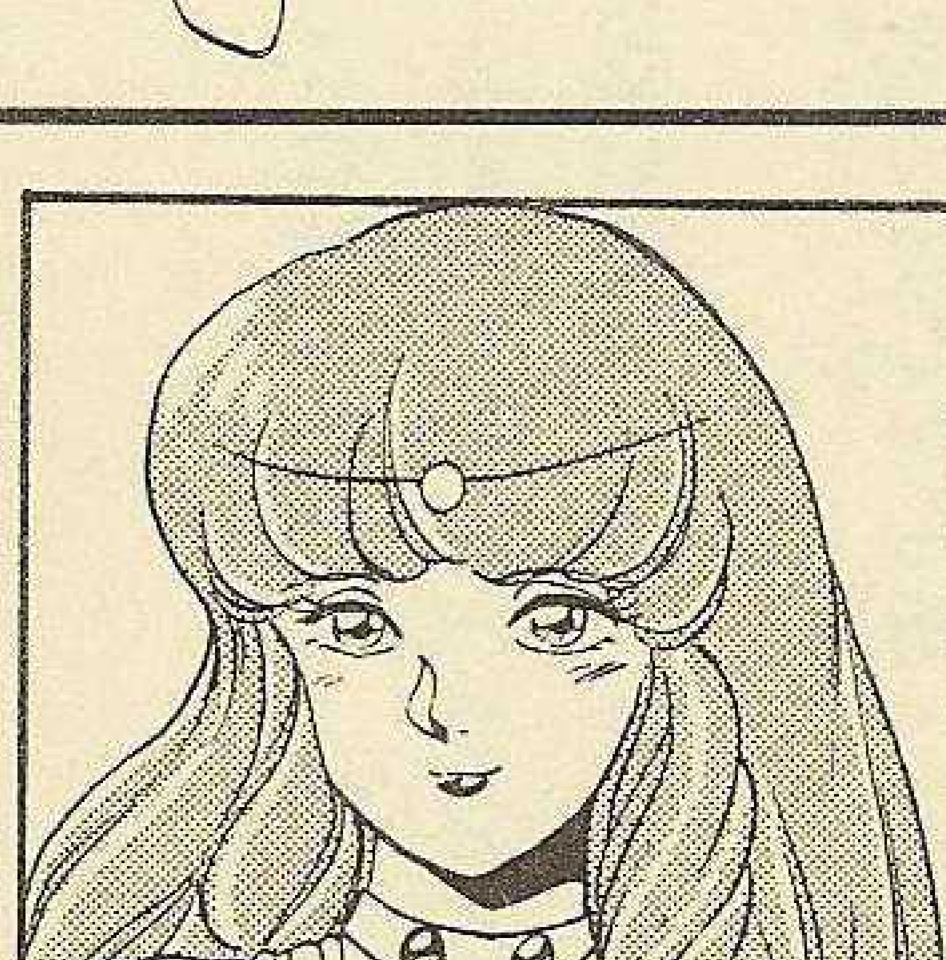
この世界には、テクニックと呼ばれる超能力があります。これは、時間系、回復系、バランス系、攻撃系の4つの系統にわかれています。このゲームではおもにバランス系と攻撃系のテクニックが使われていますが、使えるキャラと使えないキャラがいます。

これで準備は終了。いよいよ冒険への出発です。無事と、成功を心から祈っています。

登場人物紹介

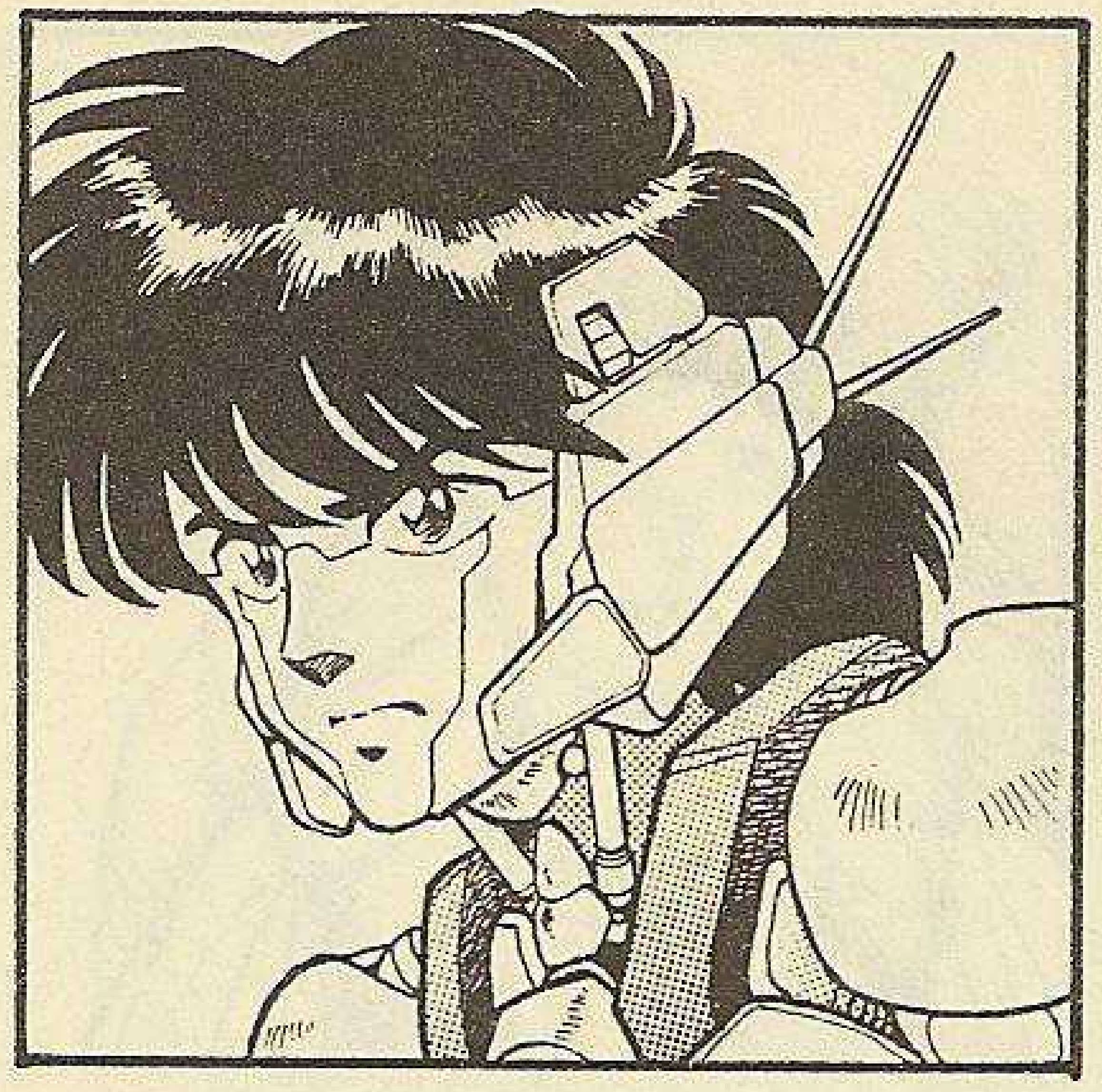
ケイン、アイン、シーン
本編の主人公たち。1代目のケインは、正義感が強い熱血漢。2代目のアインは、平和を愛する気持ちを強く持つ少年だ。3代目のシーンはもの静かだが誇り高い少年。





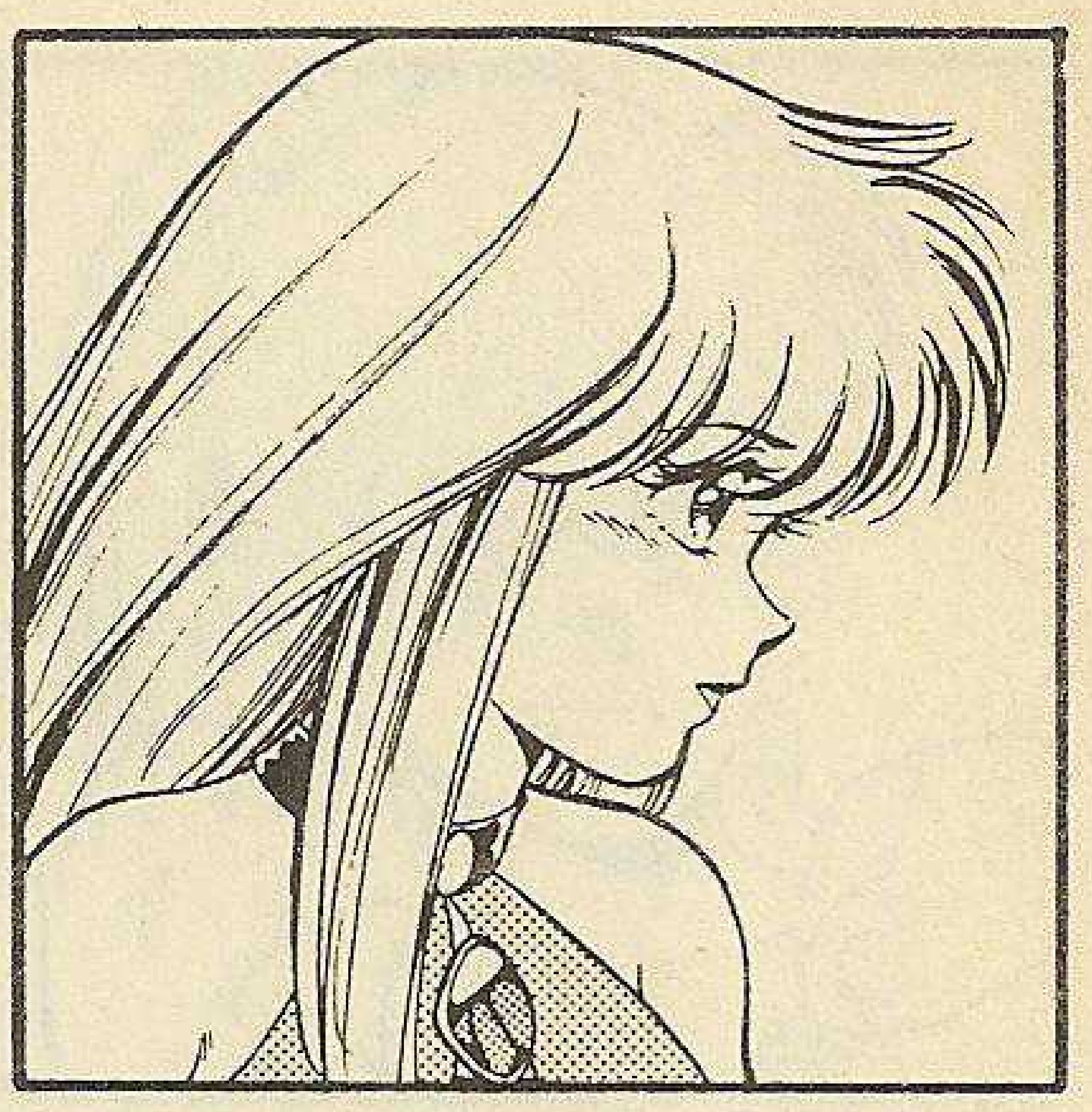
マーリナ
記憶を失って，ケインの国であるリーク国の海辺にたどりついた美しい少女。ケインに助けられたことが縁となって，彼と婚約するが……。

登場人物紹介



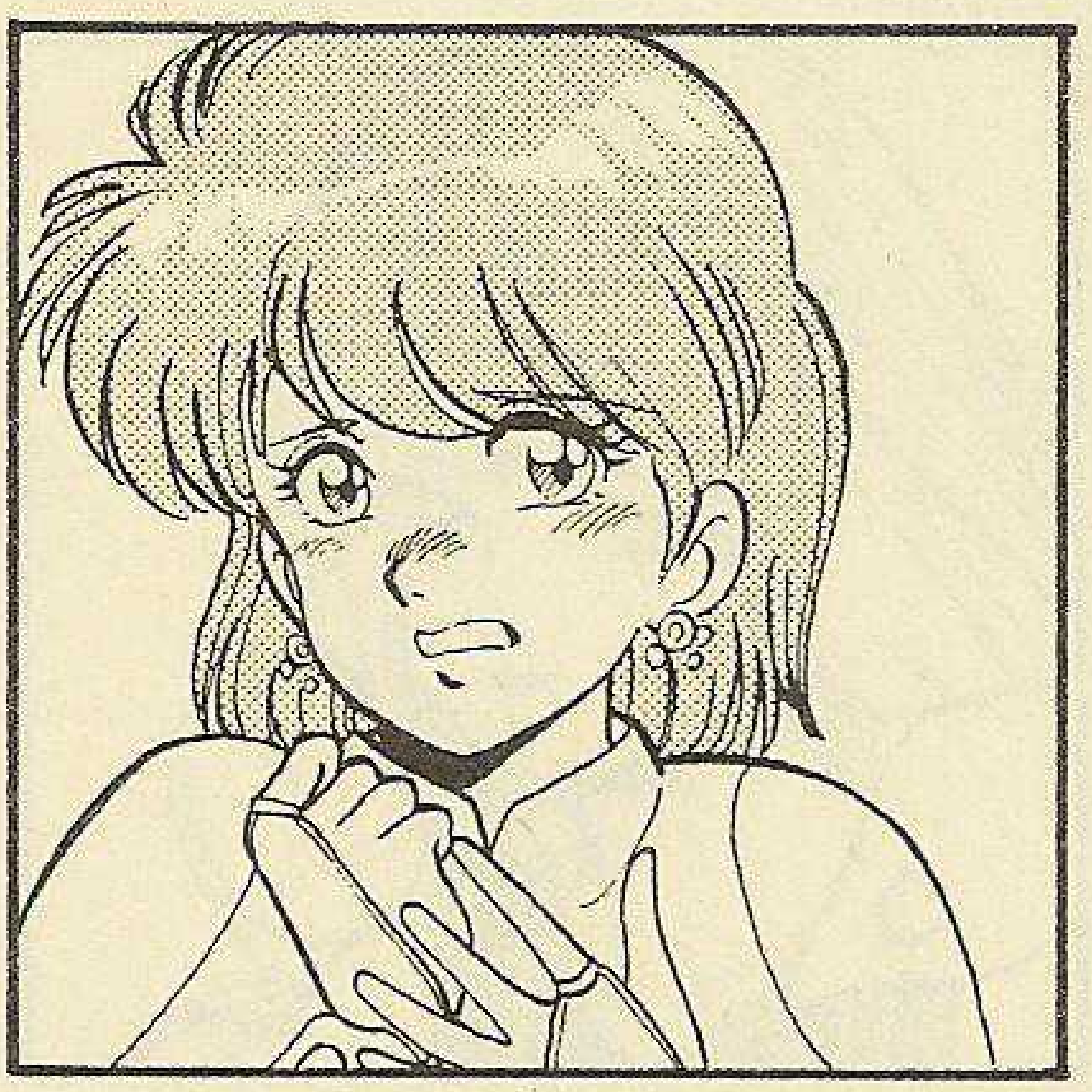
シーレン

彼(かれ)もまた過去(かこ)の超技術(ちょうぎじゅつ)によって作(つく)られたロボット。感情がないというが……。



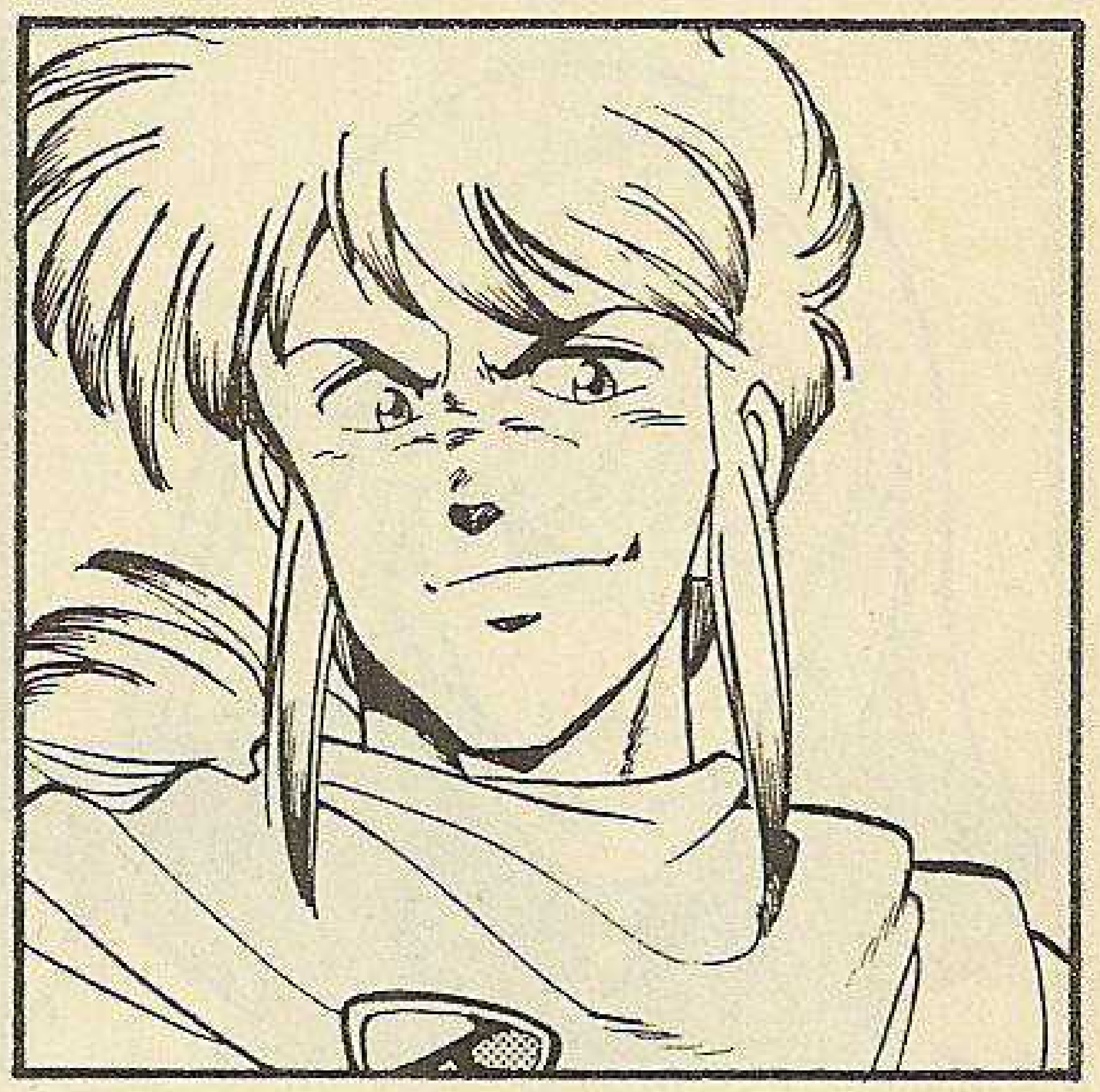
ミュー

失われた文明(ぶんめい)によって創(つく)られたアンドロイド。3代にわたって仲間(なかま)となる。



リナ

ケインの仲間となるけなげな少女。影(かげ)から彼を助ける彼女(かのじょ)の正体(しょうたい)は……。



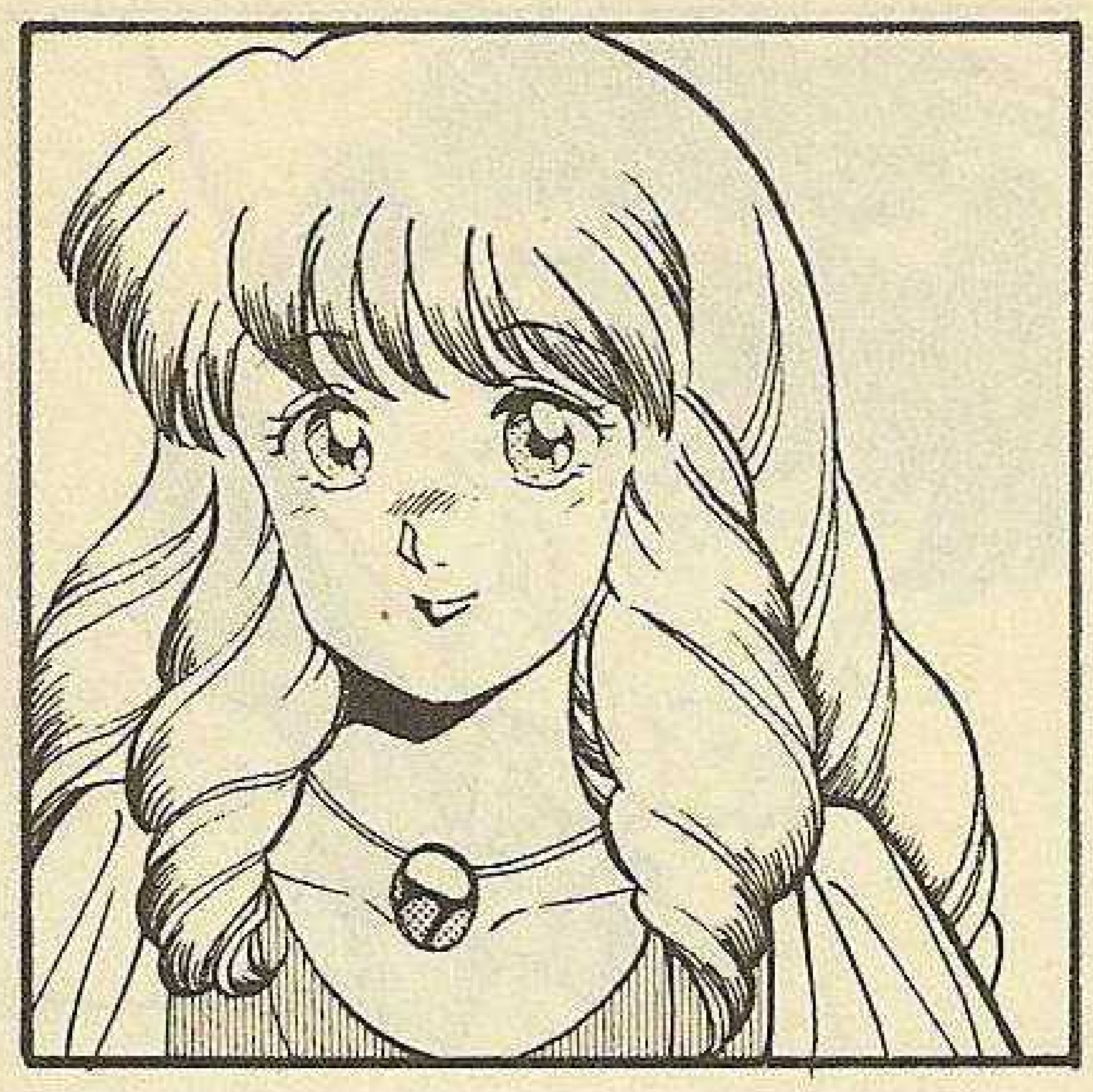
ライル

ケインの旅の行(い)く先々(さきざき)に出現(しゅつげん)する正体不明(しょうたいふめい)の男(おとこ)。やがて仲間になるが……。



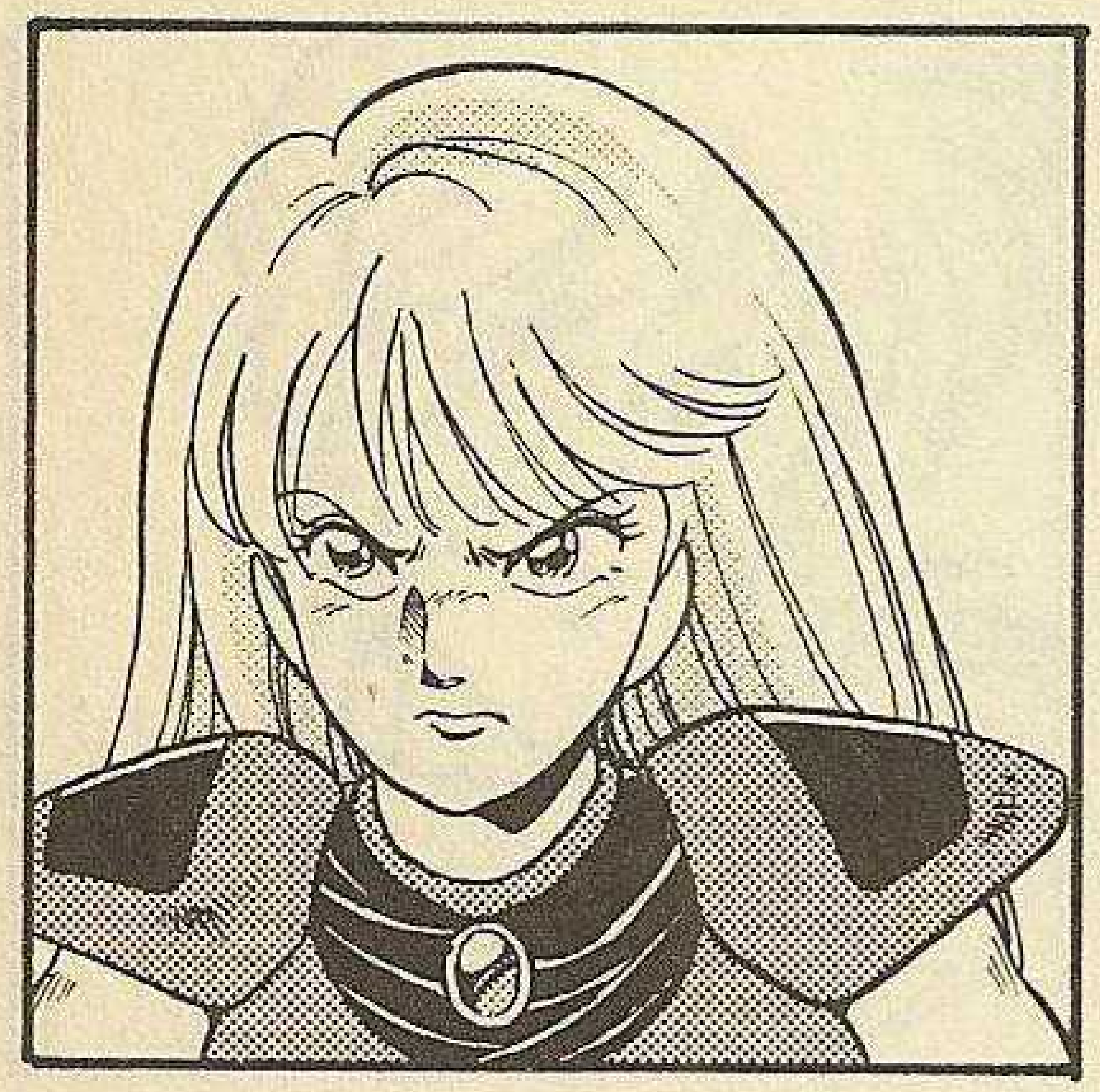
リン

リナの娘(むすめ)。やはり2代目のアインの仲間。母親とは正反対(せいはんたい)のキツイ性格(せいかく)だ。



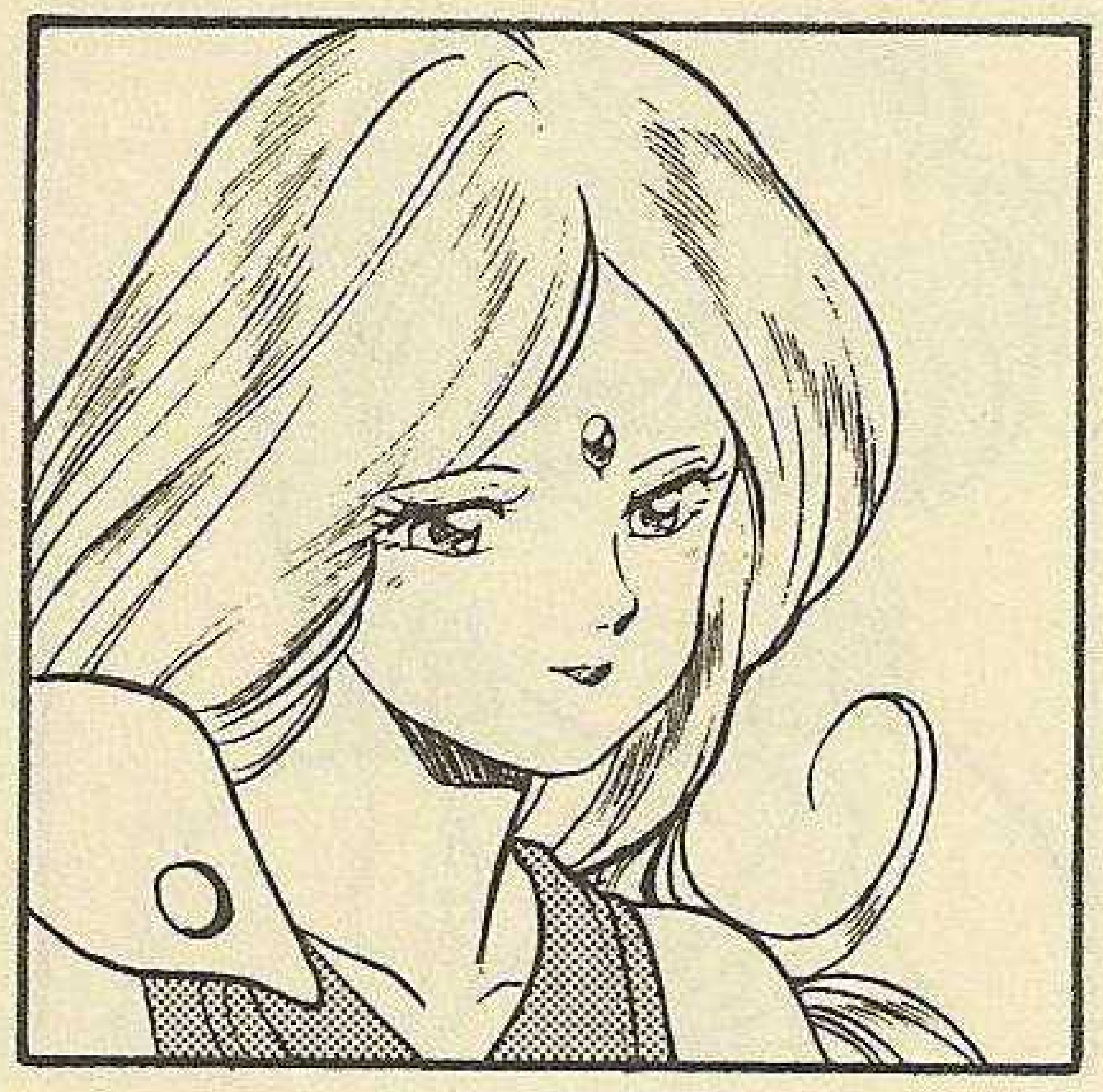
ラン

ライルの娘(むすめ)。2代目(だいめ)のアインの仲間(なかま)となる。きっすいのお嬢(じょう)サマである。



ルナ

3代目シーンの仲間。男まさりのプリンセスで，スライサーが得意(とくい)。



ライア

伝説(でんせつ)のライアの妹(いもうと)。冷凍(れいとう)睡眠(すいみん)によって時(とき)を超(こ)えた。3代目シーンの仲間(なかま)。

ファンタシースターIII

時の継承者

1

ガシャーン……。

ぼくのうしろで、地下牢の扉の閉まる音が響いた。ぼくは全身の力が抜け、隅にあったベッドに崩れるように座りこむ。あてもなく兵を出すなど、王子として、確かにぼくの行動は軽はずみだった。だが、マーリナ……！　いますぐ捜しに行きたい。

頭を抱え、うずくまっていたぼくは、ふと、人の気配に気がついた。目を上げると、牢の格子の向こうに、逆光を浴びて一人の少女のシルエットがあった。

⇩16へ

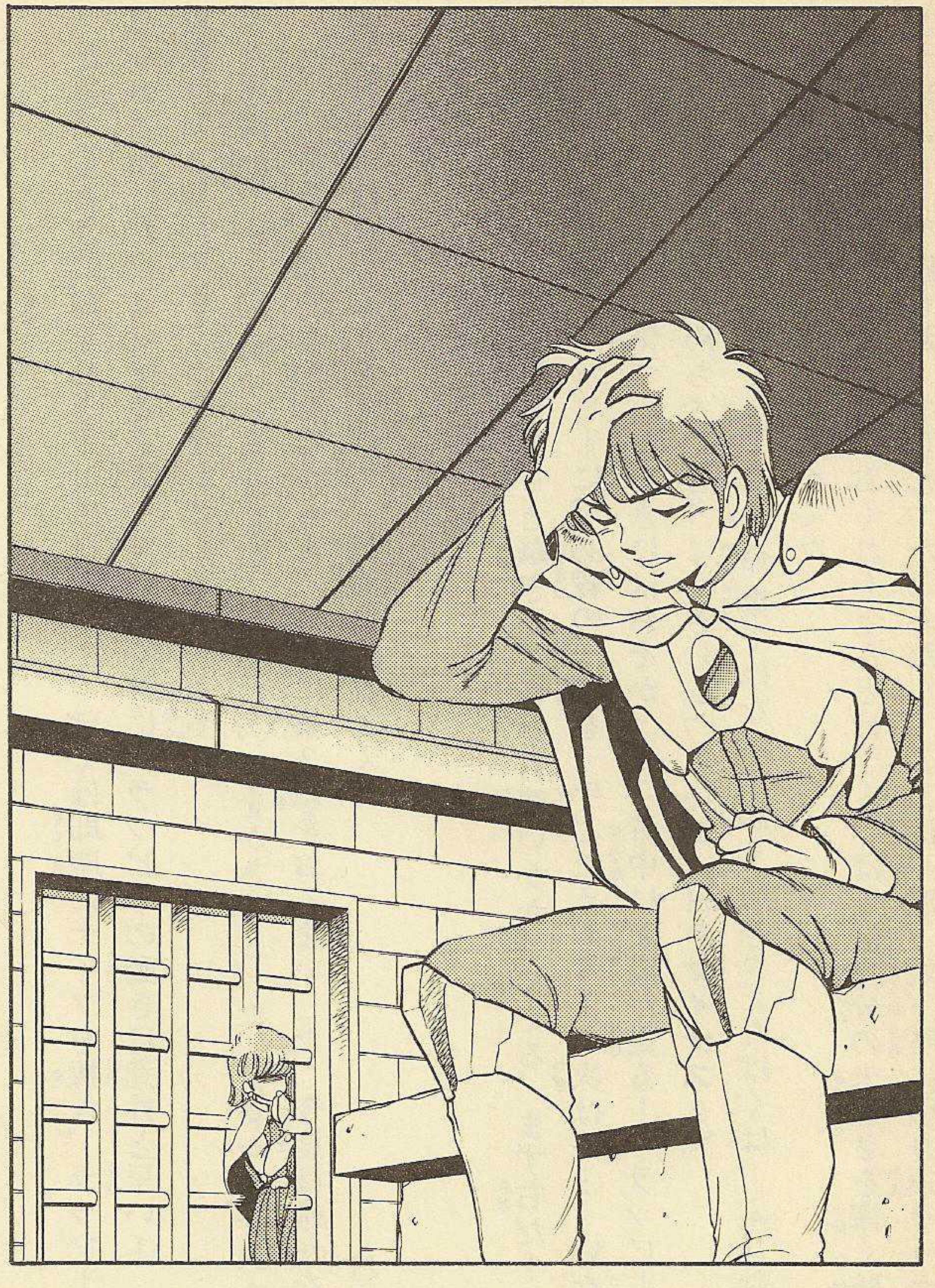
2

ぼくは傷をいやすため、ヤータの町にもどった。

幸い傷の方は数日で回復し、ぼくらは再び南の島へとむかうことができた。島に上陸し、一直線に洞窟へとむかって中に入る。しかしいくら捜せども、洞窟の中には、誰ひとりいない。『森のサファイア』を盗みだした者は、もうどこかへ行ってしまったのだ！　数日のロスがとりかえしのつかない結果を招いてしまった。

今からあの宝石の行方を追うのは不可能に近い……。

END



1●絶望に打ちのめされ，頭を抱えうずくまっていたぼくは，ふと人の気配に気がついた。

3

ヒヨコもどきにおくれをとってなるか！　ぼくは即座にナイフを抜き、ラッピーにおどりかかった。だがまるまると太っているくせに、ラッピーの動きは意外と早い！　ぼくの攻撃はいともたやすくかわされてしまう。不覚！

その瞬間、ヤツの鋭いくちばしが、左の二の腕をかきむしった（**HPマイナス1**）。

ぼくは激痛に顔をしかめながらも、ヤツに第2撃をおみまいした。今度は確かな手応えあり。ヤツは血しぶきをあげて、地面に倒れこんだ。

⇩22へ

4

2匹のラッピーは、ピヨピヨと騒ぎたてながら襲いかかってくる。まず右だ！　一瞬早く迫ってきた右のラッピーに、必殺の一撃を。手ごたえあり！　次は……、いない、しまったうしろか！　気づいたときにはおそかった。背中に激痛が走る！　ラッピーの鋭い爪が、ぼくの背中をめちゃくちゃにかきむしっていた（**HPマイナス2**）。

「いててて！」しかし決して致命傷ではない。怒りにふるえたぼくは、ふりむきざまに、ヤツの首にナイフを突きたてた。

くそう、ラッピーごときにおくれをとるとは……。ぼくは自分の未熟さを深く恥じた。どうしよう。手傷もおってしまったことだし、ここは一度、城下町に引き返そうか？

●ヤータの町へ進む……………⇩40へ　●城下町へ引き返す……………⇩58へ

5

西へとむかう。しばらく行くと道は北に折れている。その角を曲がると……。

バッタリと、ラシーラのモンスター2匹に出くわした！　こいつら、シーラとほとんど変わらぬ外見をしているが、吐く毒の量が圧倒的に多い。空気の流通の少ない洞窟内で出くわすとは、運がない！　早めに勝負を決せねば！

☆バトル　ラシーラ×2＝32　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……………⇩45へ　●負けた……………⇩120へ

6

ぼくはそれ以上前進することをやめ、しばらく様子をみることにした。

しかしこれが裏目に出た。ヤツは、立ち止まったぼくめがけて、いきなりとびかかってきたのだ。巨大ネズミのモンスター、シーラだ！

ふいをつかれたぼくだったが、その鋭い前歯の攻撃はかろうじてかわした。しかしその2次攻撃、ヤツの吐く毒まではさけることができず、少々ではあるが、肺に吸いこんでしまう。ち、力が抜けていく……（**HPマイナス1**）。こ、こんなところでくたばってた

まるか……。ぼくは気力をふりしぼって、ナイフをかまえた。

⇩38へ

7

ぼくたちは船に乗って、ヤータの町に帰ってきた。とりあえず宿屋に泊まり、体力の回復につとめる（HPプラス10）。

翌朝未明に出発。すぐ東の洞窟に乗りこむ。あのライルの一言が気になったからだ。

洞窟の入り口に立ったとたん、『森のサファイア』がまばゆいほどの光を発した。次の瞬間ぼくたちは洞窟の内部にいた。あたりはおびただしい機械群に囲まれた先史的な光景だ。

「こ、これは……」思わず驚きの声をあげる。

「今のわたしたちに理解できるものではありません。先を急ぎましょう」

落ち着いてるミュー。彼女自身、失われた文明の落とし子だからかな。

⇩59へ

8

とりあえず宿屋で休息をとる（HPプラス10）。さてこれからどうしよう？

●店に行く……⇩28へ　●女の子を探す……⇩18へ
●町を出る……⇩87へ

9

キラービートの毒液が雨のようにぼくらに降りそそいだ。毒は肌をジリジリ灼き、じわじわと体の内部へ浸透していく。ミューやシーレンの回路にも打撃をあたえているはずだ。意識がもうろうとしてくる。頭の中を満たしている羽音にまじってミューが言った。

「……アイン様……もう……、だめかも……しれませ……ん……」

キラービートの針がまっすぐぼくに迫ってくるのを、他人事のように待ちながら、ぼくはナルーガの勝利の遠吠えを聞いたような気がした……。

END

10

いや、まてよ……。たしか、北東の森の泉で、騒動がどうとかいったてたな。うむ、これを確かめない手はない……。ぼくは泉に足を向けた。

だがこの好奇心が災いした。泉に向かうぼくの目の前に、大ネズミのモンスター、シーラが現れたのだ。しかも2匹！　ぼくはナイフを抜いてみがまえた。

☆バトル　シーラ×2＝31　ケイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った ……………………⇩35へ

●負けた ……………………⇩24へ

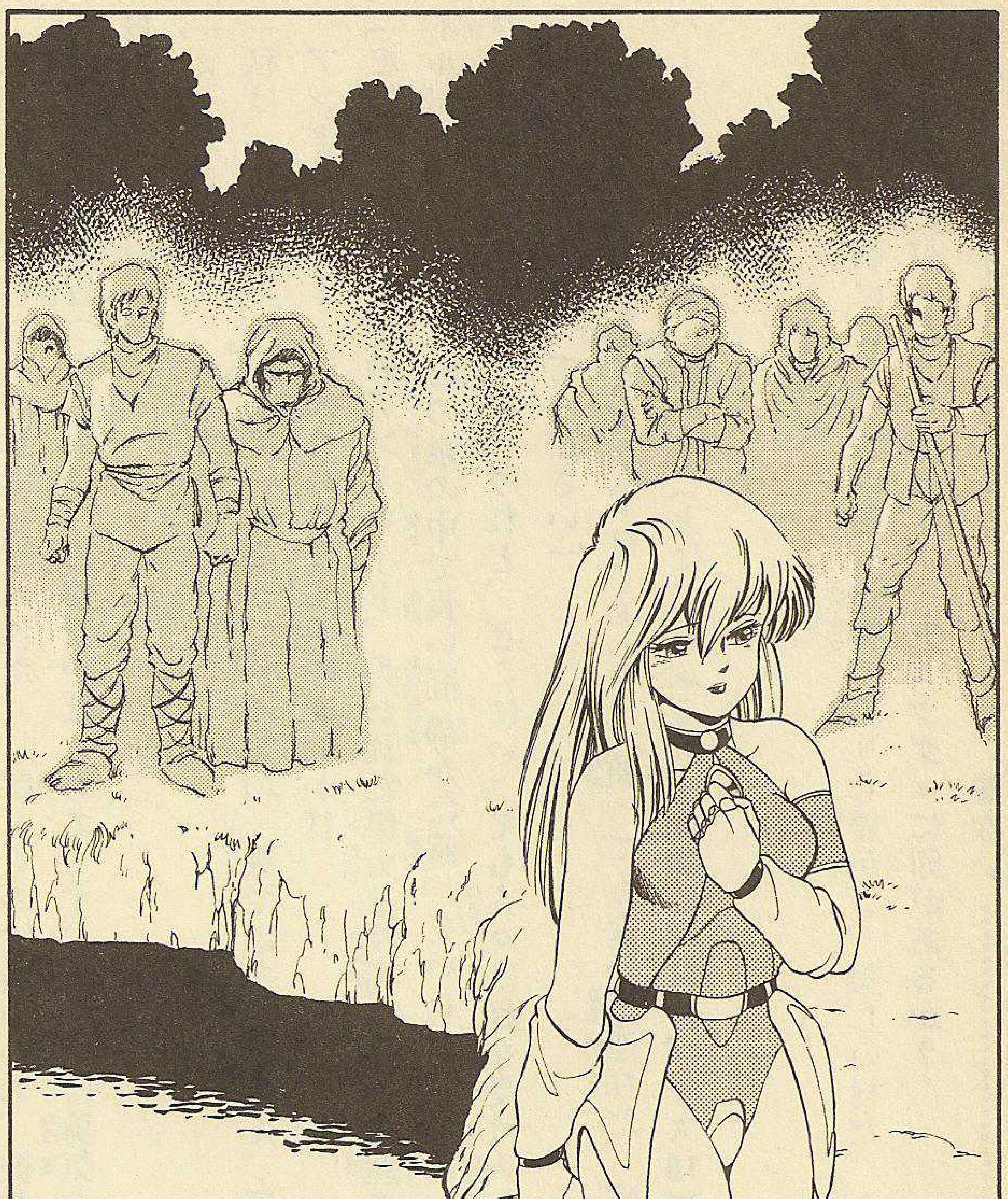
11

この砂漠の町の名はハサタカ。人間に忘れられた、ロボットたちだけの町だ。
とりあえず宿屋に泊まって体力を回復（HPプラス10）し、情報を集めることにした。
「気象こんとろーるたわーノコトデスネ。たわーハ、ココカラ南東ノトコロニアリマス。シカシ、しーれんたいぷノろぼっとガ、イナケレバ、こんとろーるデキマセン」
歩いているロボットをつかまえて、天候を支配する塔について尋ねてみたところ、こんな答えがかえってきた。
「そのシーレンタイプのロボットってのは、どこにいるのかな？」
「西ノ洞窟デ、ソレラシイ、ろぼっとヲ見タモノガ、オリマス」
なかなか親切なロボットだ。ぼくはお礼をいって、彼から離れた。

⇩99へ

12

泉のそばの少女。確かめてみる必要がありそうだ……。もしそれが、ライアの民であったとしたらなおさらだ。マーリナのことが何か聞きだせるかもしれない。
こう考えたぼくは、即座に泉へとむかった。
泉には確かに少女が立っていた。哀しげな目をして、遠くを見つめながら……。その目に魅せられたぼくは、知らず知らずのうちに、彼女に近づいていた……。



12●ライアの民と間違えられたアンドロイドのミューは人々の冷たい視線にずっと耐えてきたのだ。

彼女の目がはじめてぼくにむけられた。しばらくの沈黙ののち、彼女は口を開いた。
「恐れずに私に近づいたのは、あなたがはじめてです。あなたは勇気ある人。どうか私をお連れください」
「え、連れてって、いったって……」
「私は、みなさんが考えているようにライアの一族ではありません。アンドロイドです」
アンドロイド！　あの失われた文明の産物か!!
「私はミュータイプのアンドロイド。失われた偉大な技術によって産みだされました。エネルギーがきれて、この泉の中で長い間静かに眠っていたのですが、何者かによって、目覚めさせられたのです。けれど、どこにいっても人々は私を受け入れてくれません。どうか私を連れていってください」
強大な戦闘力を誇るアンドロイドなら、願ってもない道連れだ。ぼくは彼女を探索のパートナーとして、認めることにした**（ミュー仲間に。HPプラス10）**。

⇩91へ

13

ヒューリの村にたどりついた。作物の実りも豊かな、美しい村だ。ここならきっと清楚で美しい乙女がいるにちがいない。**チェックaに印があるか？**

●ある……⇩72へ
●ない……⇩47へ

14

敵にあとは見せられない！　ぼくらは戦う決意を固めた!!

☆バトル　モンスター軍団＝59　ケイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……⇩220へ　**●負けた……⇩101へ**

15

相手は3匹。でもこちらにもミューという味方がいる。

数分後……。戦いは終了していた。地面には血塗られたシーラが3匹横たわっている。

「大丈夫ですか。ケイン様……」

ぼくを心配したミューが駆けよってくる。じつは今の戦闘でちょとしたドジをふみ、太ももに傷を負ってしまったのだ。情けない……**（HPマイナス2）**。しかし傷の場所が場所だけに機敏な動きが封じられることになる。一度、ヤータの町に帰るべきだろうか？

●ヤータにもどる……⇩2へ　**●ヤータにもどらない……⇩83へ**

16

「ケイン様……」

驚いたことに、少女は、素早く牢の扉の鍵をはずし、ぼくを手招きした。

「ありがとう。きみは……？」
「リナです。さ、こちらへ。この地下道を通って行けば、リークの城下町に出られます」
少女リナの案内で抜け道を急ぐと、やがて地上への階段が見えてきた。
「この階段を上がれば、テクニックマスターの店に出ます。あとはおわかりになりますね」
「きみはいったい……」
「また、お会いすることもあるでしょう」
可憐な笑顔を残して、彼女は立ち去った。
ぼくは、城下町に出ると、片っ端から情報を集めてまわった。リナ——不思議な少女だ。もう城にはもどれないし、第一ぼくの心は決まっていた。マーリナを救いだす。たとえ王子の座を捨てても。
しかし、この町からはたいした情報は得られなかった。ただ……。
「城の宝の『森のサファイア』を盗んだ男が、南の島の洞窟に隠れたそうだ。とても強い男で、城の兵士たちは誰もかなわなかったという話だぜ」
酒場にいた男が、気になることを言った。
『森のサファイア』が？
『森のサファイア』とはリーク王家に伝わる宝石で、これを使えば、別の世界への道が開けるという伝説がある。もし、この世界にマーリナがいなければ、必要になってくるだろう。南の島か……。たしか、ヤータの町から船が出ているはずだ。

ヤータの町へ向かおうか。それとも、まず武器や防具を整えるべきだろうか。

●町を出る……⇩48へ　**●店へはいる**……⇩33へ

17

十字路に出た。さてどうしよう。

●北へ……⇩130へ　**●南へ**……⇩32へ

●東へ……⇩397へ　**●西へ**……⇩88へ

18

老人にウンと言わせるために、女の子を探すことにした。ところが、このあたりには、妙齢の女の子が一人もいない。いるのは、トウがたちすぎたおばさんか、ほんの赤ん坊の女の子ぐらいなのだ。町中を歩いていると、北東の森の泉で何か騒動がおこっていることが耳に入った。おもしろそうだ、いってみようかな。それとも……（チェックa）。

●泉にむかう……⇩87へ　**●もう一度船主に交渉してみる**……⇩67へ

●お店にいって装備をととのえる……⇩28へ

19

東へ進む。しかし、いきどまりだ。仕方がないもどるか……、とふりむいた瞬間……。

「クッ！」肩に鋭い痛みを感じた!! 敵のふいうちをくったのだ……（HPマイナス3）。

「ケイン様！」

ミューが片手にクローをはめて、助けに入る。相手はラシーラと、シーラだ。ラシーラはシーラと同系統のネズミ型モンスターで、シーラよりもひんぱんに毒を吐く。

ミューの鋭いクロー攻撃を受けて、タジタジとなるモンスターども。ぼくも肩の傷をかばいながら参戦する。傷の痛みを怒りに転化したぼくは、阿修羅のごとく戦い、2匹のモンスターをしりぞけた！

「ありがとう、ミュー」

ミューにお礼をいったのち、もとのT字路にもどる。さて、南と西どちらにむかうか。

●南へ……………⇩118へ　●西へ……………⇩63へ

20

「キイイイ！」ヤツの鋭い前歯が、喉もとを襲う！ ぼくはかろうじてそれをかわしたが、同時に吐きだされた毒までは避けることができなかった。

うう、力が抜けていく……（HPマイナス3）。

こちらの窮状を見抜いたシーラは、さらに攻撃をしかけようとした。だがその前に、ぼくは最後の気力をふりしぼって、ヤツの胸に渾身の一撃をお見舞いした。意外な反撃をくらい、とまどうシーラ！　それをしりめに、ぼくはさっさと逃げだした。ヤータにさえ逃げこめば、ヤツも追ってこれない。カッコ悪いけど、逃げるが勝ちってヤツなのさ。
こうしてぼくはなんとかシーラから逃げだし、港町ヤータに到着した。

⇩27へ

21

ぼくらは勇んでタワーの中に入った。そこは、連絡通路の洞窟同様、前史的な機械群で構成されていた。うむ間違いない。これこそが、気象コントロールタワー！
しかしタワーの中の通路は、いきなりふたまたにわかれている。右左どっちを選ぶ？

●右へ……⇩171へ
●左へ……⇩98へ

22

ところがラッピーは、1匹だけではなかった。さらに2匹が現れ、怒りに燃えた目でぼくに襲いかかってきたのだ。仲間をやられて逆上してるらしい。
こうなりゃ、とことんやるまでだ！　ナイフでみがまえて、ヤツらを待ち受けた。

☆バトル　ラッピー×2＝29　ケイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩4へ
●負けた……⇩34へ

23

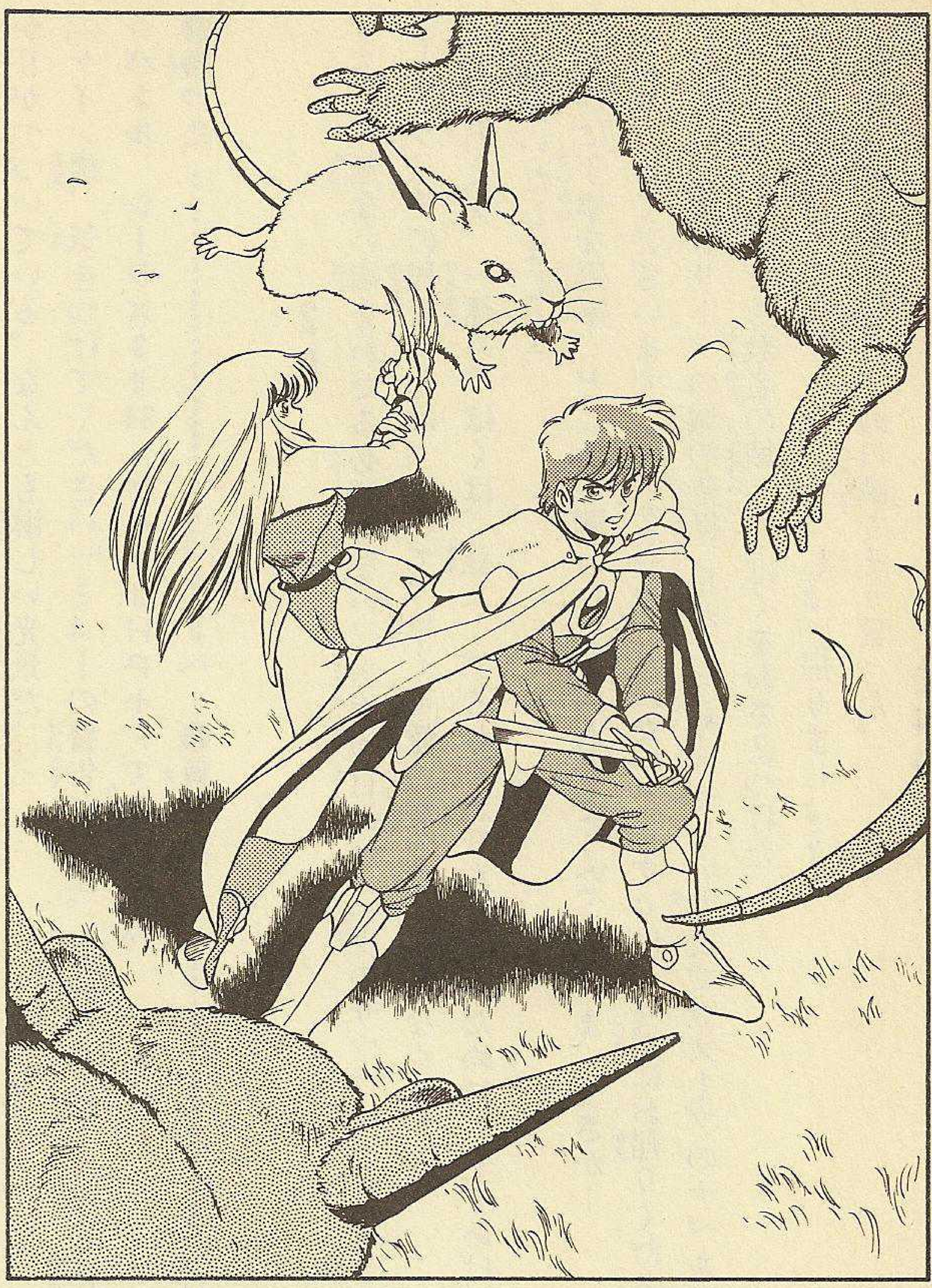
なんとかヤツらをふりきった。しかし、思いっきり駆けてきたのでさすがに息がきれる。ぜーぜーぜー（**HPマイナス1**）。
気になるのは、あの宝箱の中身だ。きっと『森のサファイア』に違いない。つまり、ヤツらをまとめて倒さないかぎり、サファイアは手に入らないってことか……。
しかたがない、ここは一度ヤータの町に引き返し、今まで受けた数々の傷の療養に努めることにしよう。そしてベスト・コンディションでリターン・マッチだ！
⇩2へ

24

1対2ではあきらかに不利だ。ぼくはたちまちのうちに攻めこまれて、左肩に傷をおってしまう。喉元をねらったシーラの鋭い歯をよけそこなった結果だ。くそー、負けてたまるか！（**HPマイナス3**）
⇩35へ

25

まずは周囲を探索することにする。島にはほとんど木が存在せず、ゴツゴツした岩山ば



25●「ケイン様，気をつけてください!!」ミューの警告とともに，岩陰からネズミの化物，シーラが現れた。

かりがつづいている。なんとも淋しい光景だ。
「ケイン様、気をつけてください」ミューの警告が飛ぶ。岩陰からシーラが3匹現れた。

☆バトル　シーラ×3＝34　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……15へ　●負けた……44へ

26

ここで危ない橋をわたる必要もない。当面の目的は、『森のサファイア』を手に入れること。ライアの民なんかほっといて、早く可愛い女の子見つけなくっちゃ。
とりあえず、一休み。ぼくは、豆スープのおかわりをもらうために、手をあげた。
「承知いたしました」
やけに丁寧な返事。どこかで聞いたことのあるような……。ま、まさか！
「わたくしでございます。これをおあがりになったらすぐに、お城にお帰りくださいませ」
そこには我がリークの城の侍従長が、うやうやしい態度で豆スープのナベを持って立っていた。たちまち数名の城兵がぼくをおさえつけた。
「父上がお怒りです。さあ、いっしょに帰りましょう」
侍従長はうむを言わさぬ口調でそう言った。

END

27

港町ヤータにたどりついた。交通の要路だけあり、多くの人々でにぎわっている。港には船が一艘。持ち主を見つけて、南の島へ船を出してもらえるように交渉する。
「ああダメダメ。わしゃ、女の子の頼み以外は聞かないんじゃよ」
船主の老人は訳のわからないことを言って、ぼくの頼みを聞こうとしない。しかたない女の子でも捜しにいくか……。

⇩8へ

28

やっぱりナイフ1本じゃ、こころもとない。ぼくは皮の盾を売って、もう1本ナイフを手にいれた。2本のナイフをすぐ取りだせるようにベルトに装備し、さて……。

●女の子を捜す ……………⇩18へ

●もう一度おじいさんのところへ ⇩67へ

29

塔の中に入ってみる。先史文明の金属でできた内部を進んでいくと、行く手をふさぐかのように、モンスターが現れた！ モルモスが2匹に、猛毒を吐く大ガエル・ナノフロッグが2匹、おまけにケイブウォルフまでいる。
まず2匹のモルモスが、フォイエのテクニックをふるった。飛びだす火炎！ かろうじ

てよけたところへ、ナノフログの毒が充満する。く、苦しい……。
「ケイン様、退却しましょう!」
毒に耐久性のあるミューが、ぼくの体をささえて、退却にかかる。
だが体が重い……。ケイブウォルフが、グラブトのテクニックを使って、重力波のプレッシャーをかけてきているのだ。ミューがそれに対抗して、アンバランスのテクニックを使った! ケイブウォルフが、遠くにふっとぶ!!
「今です!」
ぼくはミューにささえられて、かろうじて塔から脱出することができた。しかし受けたダメージは大きい(HPマイナス10)。ひとまずあの砂漠の町に退却だ。

⇩11へ

30

ぼくはヒューリの村にむかうことにした。途中、ばったりと、ヒヨコ・モンスター、ラッピーに出くわす。けれど一度戦っている相手。手の内はすっかりお見通しだ。一撃のもとにうち倒し、意気揚々と道を急いだ。

⇩13へ

31

ようやく、ぼくらは通路を抜けて東の世界へ出た。まずは手近なレンソルの国へ行って

みよう。

⇩104へ

32

薄暗い通路を進んで行くと、やがて十字路にたどり着いた。北と、東と、西。南はこの迷宮の出口だ。さて、どっちへ行こう。

●北へ……………⇩17へ　●東へ……………⇩217へ
●西へ……………………………………⇩367へ

33

長い旅になるかも知れない。装備はできるだけ整えていたほうがいいだろう。といっても、あまりお金を持ってないけど。ぼくは店に入って、できるだけ買いこんだ。これで準備は万端だ。さあ、町を出ることにしよう。

⇩48へ

34

2匹のラッピーは、ピヨピヨと泣き声をあげながら、迫ってくる。まずは右だ！　ぼくはすばやい一撃を、右からきたラッピーにあびせた。あれれ、簡単にかわされた……。まずい！　そう思ったときには遅かった。ラッピーど

もは、その凶悪な爪とクチバシを使って、2匹がかりで、ぼくの背中をめちゃくちゃにかきむしった（HPマイナス3）。

「あだだだ！」ぼくはあまりの痛さにおのれを忘れ、ナイフを無我夢中でふりまわした。その剣幕におそれをなしたのか、2匹のラッピーは、ぼくにとどめをさすのをあきらめ、倒れている仲間を残して、いずこへか去っていった。

くそう、ずいぶんダメージを受けてしまった。しかたない一度リークの城下町にもどって体力の回復を待とう……。

⇩58へ

35

シーラの動きはちょこまかと素早い。その動きに幻惑されては、勝ち目はない。ヤツらの毒ガスを吸いこまないように息をつめたぼくは、その動きを冷静に見つめた。

まず、右のシーラが動いた。しかし踏みこみがやや浅い。フェイントだ。となると、本命は左、しかも背後を狙ってくる！

結果は見事、読みどおり。ぼくはふりむきざまに、シーラにナイフを突きたてた。続いて、もう1匹にも！　勝負は一瞬のうちに決した。だが紙一重の勝負だったともいえる。まかりまちがえば、地面に横たわっていたのは、ぼくの方だっただろう。そう考えると冷汗がどっと出る（HPマイナス1）。

⇩81へ

36

チープコックのバータのテクニックが炸裂した。鋭い水流がぼくを襲う！

ぼくはそれを素早くかわし、剣を抜き放った。

「ミュー、チャムはまかせたぞ！」

剣をかまえて、チープコックの第2撃にそなえる。ヤツの動きは速い。また、その鋭いクチバシは、一撃でぼくの喉笛を引きさくだけの威力がある。

しかしぼくも剣をとってはリーク一とまでいわれた男だ。ムザムザやられはしない。やつのクチバシを剣でいなしつつ、反撃の機会を待った（**HPマイナス1**）。

ヤツの連続攻撃が一瞬とだえた。今だ！　ぼくは剣を下からはねあげ、チープコックの細首を両断した。すでにミューも、チャムを倒している。

戦いののち、ぼくらは調査を再開した。けれど何も見つからない。仕方なく外に出た。

⇩139へ

37

ヤータの町についたぼくたちは、さっそくあのじいさんの家におもむいた。今度はミューが頼むのだから、老人もイヤとは言うまい。ところが……。

「絶対にイヤ！」じじい——老人は、またもや首をたてにふらない。

「そんな……。アンドロイドだろうと、ミューは女の子だぞ。女の子のいうことなら聞くんじゃなかったのか」しかし老人は、ぼくの抗議などどこふく風。
「わしは、男から頼みごとをされるのが何よりもきらいなんじゃ。それをくどくどと2度も3度もおしかけよって。今さら、女の子を連れてきよっても、おまえの頼みだけは絶対にきかあああああん!!」
このじいさんの他に、船を出せる者はいない。ということは……。

END

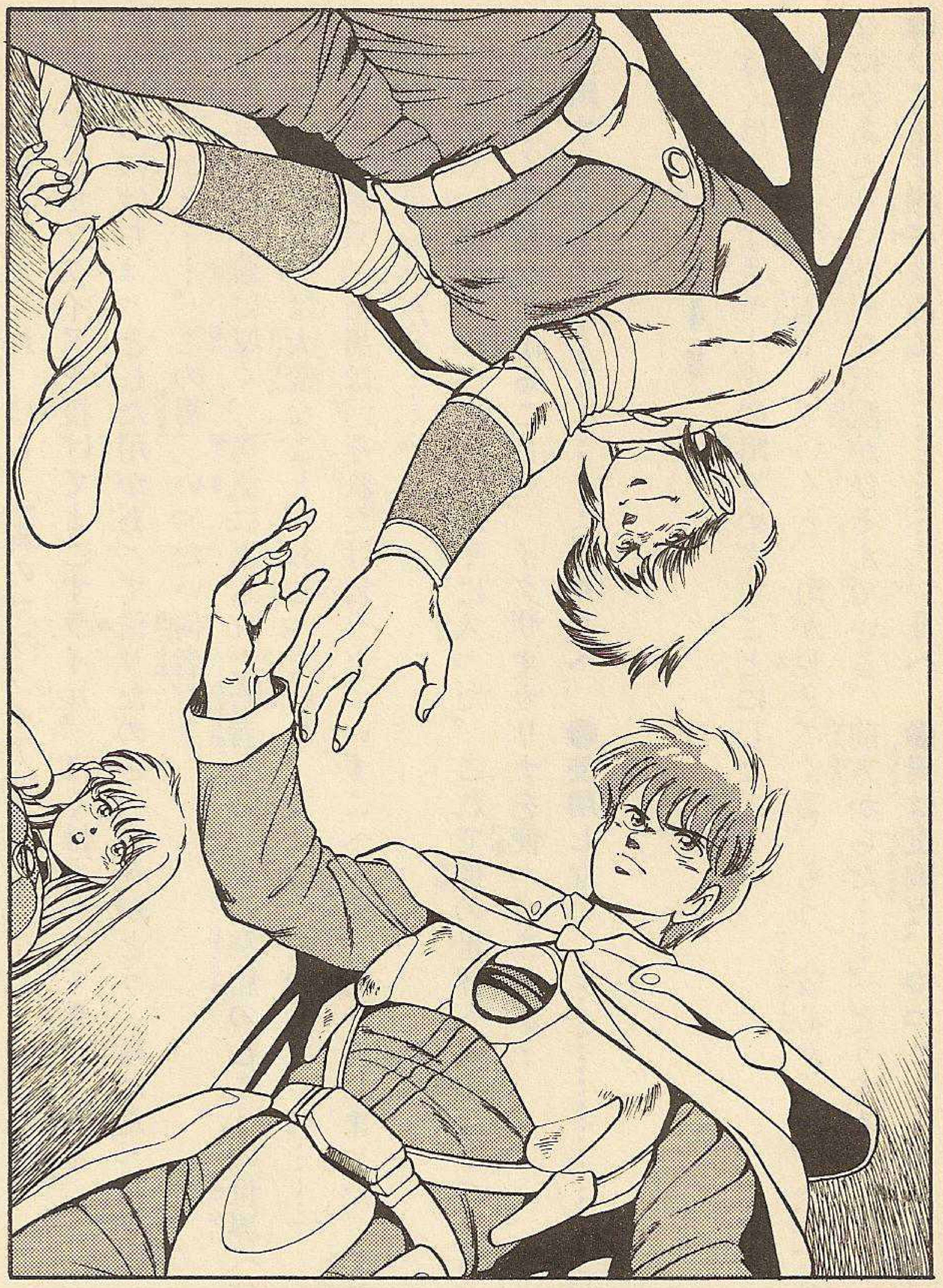
38

毒さえ吸いこまなければ、手強い相手じゃない。ぼくはとっさに息を止めて、ヤツの攻撃にそなえた。
「キイイイイ!」ヤツの鋭い前歯が、ぼくの喉もとを狙う! 即座に避けたぼくは、息を止めたまま、ナイフをあやつり、大ネズミを退散させた。
邪魔ものは去った。さあ港町ヤータにむかうとしよう。

⇩27へ

39

「おっと、俺はきみとやりあうつもりはまったくないんだぜ。そんなぶっそうなものは、



39●ライルと名乗った男は，あっさりぼくに『森のサファイア』を渡した。つかみどころのない奇妙な男だ。

とっとしまってくれ。ほら、『森のサファイア』は返すぜ！」
いきなりサファイアを投げてよこすライル。ぼくはあわてて受けとめた。
「そいつにはちょっとした用があって借りたのさ。ありがとう。役にたったぜ」
ヌケヌケと……。この男、いったい何者だ？
「もしきみが、義に厚く、勇気にあふれた若者なら、東の洞窟のむこうの世界へ行ってもらいたい。そこでは大変なことがおこっている。力になってやってくれ……」
ライルと名乗った男は、それだけ言うと、いずこへか姿を消してしまった。笑顔がやけに魅力的な男だったが……。
とにかく『森のサファイア』は手に入った。これで他の世界へも出入りできる。あとは一刻も早く洞窟から出ることだ。イグザオカリナを使ってみるか？

●使用する ……………… ⇩80へ

●使用しない ……………… ⇩97へ

40

ぼくはそのままヤータの町をめざすことにした。
街道をまっすぐ南下していくと、町が見えてくる。もう一安心か……。いや、待て！なにかあたりに邪悪な気配がひそんでいる。前方からだ……。どうする？

●ひとまず様子をみる ……………… ⇩6へ

●男は度胸だ、つっこんじゃえ！ ⇩53へ

41

ハサタカの南の湧き水に着いた。

シーレンがサブマリンパーツを装備。と……なんと彼は、アクアシーレン――潜水艇に変身したのだ！　よーし、これで『ライアの宝』を捜しに、水の底にも潜れるぞ。

「地下水道があります。それに沿って潜ってみましょう」

シーレンは、ぼくたちを乗せて地下水道を進んでいく。

前方がほんのり明るくなってきた。ためしに浮上してみると、驚いたことに、ぼくたちは別の世界へと出てしまった。砂漠の地下に、こんな世界があったとは。

シーレンが変身をとき、ぼくたちは上陸した。そこには、神殿らしきものが、ぽつんと建っている。なかにはいると、４人の老人が、台座のまわりを囲んでいた。

⇩292へ

42

ぼくとミューは洞窟を探しだし、中に入った。洞窟の内部は溶岩のような真っ赤な色をしている。中は北へむかって一本道。もはやまっすぐ進むしかない。

⇩95へ

あらら、外に出てしまった。これじゃ、何にもならない。引き返そう。

43

⇩95へ

44

相手は3匹だけど、今回はこちらもミューという味方がいる！

しかし、この「味方がいる」という安心感が、どこか油断を呼んだようだ。戦闘開始早々早、ぼくは太ももに手ひどい傷をおい、ヤツらの毒ガスをたっぷりと吸ってしまう（**HPマイナス5**）。絶体絶命の危機だったが、ミューに救けられて、なんとかシーラどもをしりぞけた。しかし、傷はけっこう深い。一度ヤータの町に帰ることにするか？

●ヤータにもどる ……………⇩2へ

●ヤータにもどらない ……………⇩83へ

45

シュッ！ナイフのきっさきが、ラシーラの左目をかすめる。吹きだす真っ赤な血！しめた、これでヤツの左側はすべて死角となる。ぼくは左へ左へと回りこみ、タイミングを見計らって、ヤツの頸動脈をかっ切った。膨大な量の血が吹きだし、洞窟内をなまぐさく染め上げる。

「おみごと」

ミューが駆けよってくる。彼女は、ぼくよりも早くラシーラを倒していたのだ。その戦闘力はまさに超一級の剣士なみだ。

そんなミューを心強く思いながら、ぼくは再び洞窟を北に進んだ。

⇩86へ

46

南への道は、しばらく行くと東に折れ、さらに行くと北へ曲がっていた。ところが、その角を曲がったとたん、空気をゆるがす低い羽音が聞こえてきた！　キラービートだ!!

☆バトル　キラービート×2、ナルーガ×3＝78　アイン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩320へ　●負けた……⇩9へ

47

村に入ってすぐ、宿屋で休んでいると（**HPプラス10**）、ちょっとした噂ばなしが聞こえてきた。ヤータの町北東の森の泉に、まばたきしない少女が現れるという話だ。その少女は、一度現れると、じっと身動きもせず、哀しげな眼をして遠くをいつまでも見つめているという。彼女はライアの民であるという噂もあり、誰もが遠まきにして恐れているらしい。ぼくは、この宿自慢の料理、豆スープに舌つづみをうちながら、一つの問題について考え続けていた。泉に行くべきか、行かざるべきか……。

●泉へ行く……………⇩12へ

●泉へは行かない……………⇩26へ

48

ぐずぐずしてたら、また地下牢にもどされかねない。ぼくはとにかく港町ヤータの町にいってみることにした。ヤータから船で旅立つのだ。
城下町を出て、街道をひたすら南に下る。途中、どんなモンスターが襲ってくるかわからない。とにかく気をひきしめていくことだ。
ン！ さっそく現れた。まるまると太った巨大なヒヨコもどき、ラッピーだ。

☆バトル　ラッピー＝23　ケイン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……………⇩60へ　●負けた……………⇩3へ

49

ヤツらの動きはのろい。あのベチャベチャしたヨダレにからめとられない限り、とるにたらぬ存在だ。ぼくとミューは、機敏に動きまわることによって、ヤツらの体液攻撃を封じ、その背中のカラを割って、いとも簡単にヤツらの始末をつけた。　⇩73へ

50

ぼくらは建物の残骸の調査をはじめた。くずれた柱などをどかしていると、背後で荒い息遣いが……。ふりかえると、マッド・バードのチープコックが、今まさに襲いかからんとしている。その背後には、狂犬カタツムリのチャムまでいる！

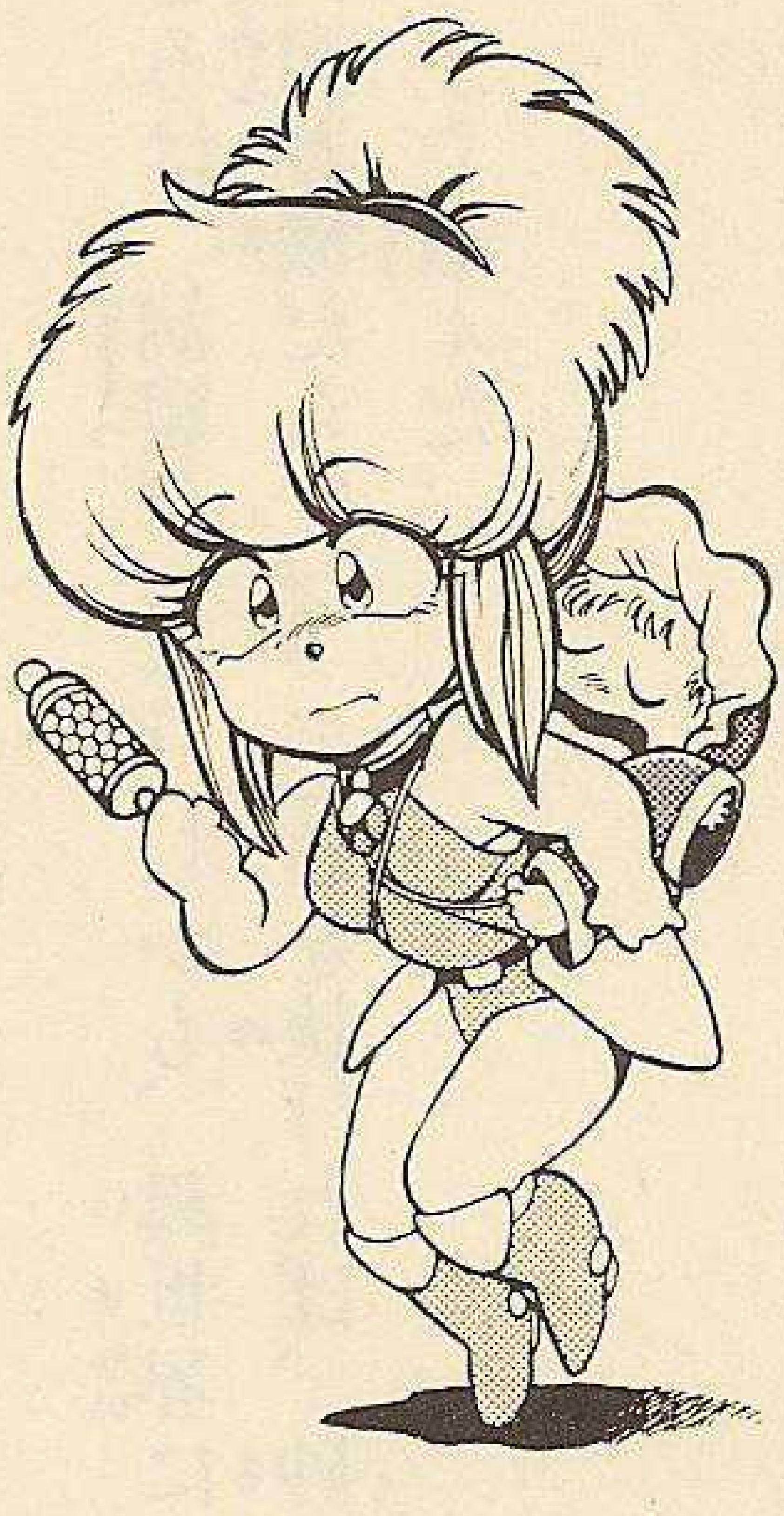
☆バトル　チープコック、チャム＝40　ケイン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……⇩36へ　**●負けた**……⇩125へ

51

西の洞窟を出て、グランディレクタにもどった。宿屋に泊まって、体力回復（HPプラス10）。**チェックkあるか？**

●ある……⇩64へ　**●ない**……⇩333へ



52

雪のつもっていないところは、洞窟だった。しかも、異世界につながる洞窟だ！
中にはいると、あたり一面器機だらけだ。ここを抜ければ、砂漠の世界へ行けるのだろう。ぼくらは洞窟内をまっすぐ進んだ。

⇩149へ

53

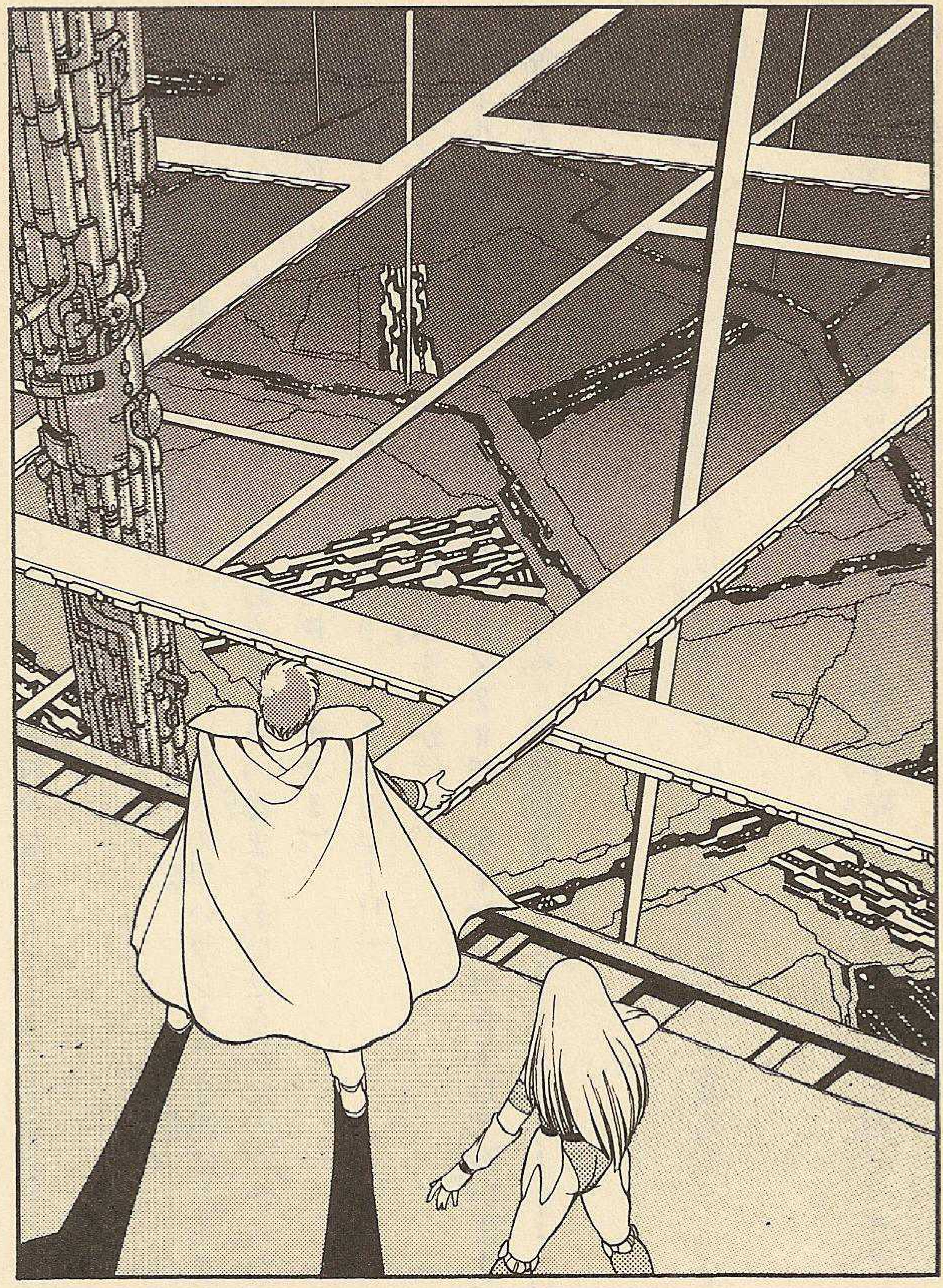
ぼくは勇をふるってナイフをかまえ、邪悪なる気配の源につっこんでいった。その勢いにのまれてか、そいつは突然姿をあらわにした。大ネズミのモンスター、シーラだ。
ヤツの武器は、鋭い前歯と口から吐く毒のはず。油断はならない。

☆バトル　シーラ＝26　ケイン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……………⇩38へ　**●負けた**……………⇩20へ

54

かれこれ2日も歩きつづけているが、塔など影も形も見えない。寒いところから、急に暑いところへきたためか、ぼくはすっかりバテていた（**HPマイナス1**）。
「ケイン様、町があります」
ミューが西のはてにある町を見つけた。目的の塔とは違うようだが、行ってみるか？



52●世界と世界をつなぐ洞窟は，ぼくにはまったく理解できない機械類で埋めつくされている。いったいこれは……。

●行く……⇩11へ　●行かない……⇩90へ

55

だがそれは甘い考えだったようだ。ぼくらは動きの早いラシーラ2匹にたちまち追いつかれ、行く手をふさがれてしまう。おまけにその毒まであびせられたのだからたまらない。
あああ、体の力が抜けていく……（HPマイナス5）。
「もう逃げようがない。いちかばちか！　いくぞミュー!!」
ぼくとミューはモンスターたちに攻撃をしかけた。

☆バトル　モルモス、シーラ、ラシーラ×2＝43　ケイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩114へ　●負けた……⇩76へ

56

北へ進んでいくと、道は途中から東へ折れている。さらに歩みを進める。**⇩169へ**

57

薄暗い通路の中をしばらく歩くとまたもやT字路。進路は北と南と西だ。さてどちらへ行こうかな。

●北へ……⇩107へ
●南へ……⇩43へ
●西へ……⇩5へ

58

体力回復のため、ぼくはリークの城下町にもどってきた。どこかで休んで傷をいやし、それからヤータへとでかけるとしよう、などと思っていると、突然、「ケイン様！」との声が……。まずい城兵どもだ！　まだぼくのことを探していたらしい。あいつらにつかまったら、マーリナ探しができなくなってしまう。ぼくはあとも見ずに駆けだし、そのままリークを飛びだした。めざすはヤータの港町。あいたたた。それにつけても傷の痛さよ……（HPマイナス1）。

⇩27へ

59

機械の洞窟を抜けると、そこは雪国だった。さ、寒い……。とにかく人のいる町を探そう。ぼくたちは、雪の中を、町をもとめて歩きはじめた。

⇩103へ

60

ヒヨコもどきなんかにおくれをとってなるか！　ぼくはナイフを抜き放ち、目にも止ま

らぬ早業で、ヤツの頸動脈をかき切った。楽勝、楽勝。

⇩22へ

61

「ここがシューソランの城下町なのか……」

城下町の様子は、オラキオの町並みとほとんど変わるところがなかった。歩いている人々も同様であり、実に平穏な町である。ぼくは、ライアを信奉する人々の都というのは、もっと陰気で邪悪な雰囲気につつまれた町だと思っていたのだ。完全にイメージ違いだ。

さっさくここで、マーリナに関する情報を集めるとする。しかし人々は、アンドロイドを連れたぼくを、オラキオの民と認めて、誰も近寄ってこようとしない。遠まきにして、憎しみと恐れのまじった視線をあびせかけるのみだ。いったい、どうすれば……？

●城へ行く……⇩157へ

●町をもうしばらく歩く……⇩170へ

62

いつまでも、泉のほとりで休んでいても仕方がない。ぼくはとりあえずヒューリの村にいってみることにした。

⇩13へ

63

ぼくらは西へ歩みを進めた。すばらく進むと、やや広まった空間に出た。そしてその一番奥のあたり、やや小高くなったところには、宝箱が……。
宝箱に近づき、ふたに手をかけようとした瞬間、そうはさせじと、モンスターどもが出現した！　いるわ、いるわ、モルモス１匹、ラシーラ２匹、シーラ１匹という、そうそうたる顔ぶれ。特にモルモスは、怪力を誇るチャッピー系の肉食モンスターで、炎のテクニック・フォイエを使うやっかいなヤツ。頭が悪いのがせめてもの救いなんだが……。
さてどうする。こいつらと一戦交えるか……、それとも……。

●戦う ……………… ⇩89へ　**●逃げる** ……………… ⇩75へ

64

このサブマリンパーツがあれば、ハサタカの南の湧き水が調べられるんだ。ぼくたちは、喜び勇んで砂漠の世界に向かった。

⇩41へ

65

宝箱の中に『森のサファイア』は入っていなかった。ではいったいどこに……。その時。
「やっとここまでやってきたようだな、ケインくん」

突然、洞窟内に男の声が響いた。だ、誰だ！
「俺の名はライル・ラ・ミラー！　リーク王家の家宝、『森のサファイア』を盗んだのはこの俺さ！」
そう言いながら、男は姿を現した。高い上背、精悍な顔つき。そのすきのない足どりは、この男が並々ならぬ武道の使い手であることを示していた。
ぼくは思わずナイフに手をかけた。

⇩39へ

66

「ここから先はおれにまかせろ。こういった城のつくりは熟知しているんだ」
ライルが先導をかって出る。ぼくは、彼がかつてリークの城から家宝のサファイアを盗みだしたことを思いだした。彼に任せておけば、まちがいない。
彼はたくみに城内に侵入して、とある部屋に入りこんだ。そこには、大きな宝箱があり、開けてみるとイグザオカリナが入っていた。
「まてよ、何かひっかかる」
ライルはそういうと、宝箱の底をゴソゴソとまさぐった。その途端、宝箱の底がスライドし、地下室へ通ずる道が出現した。

⇩187へ

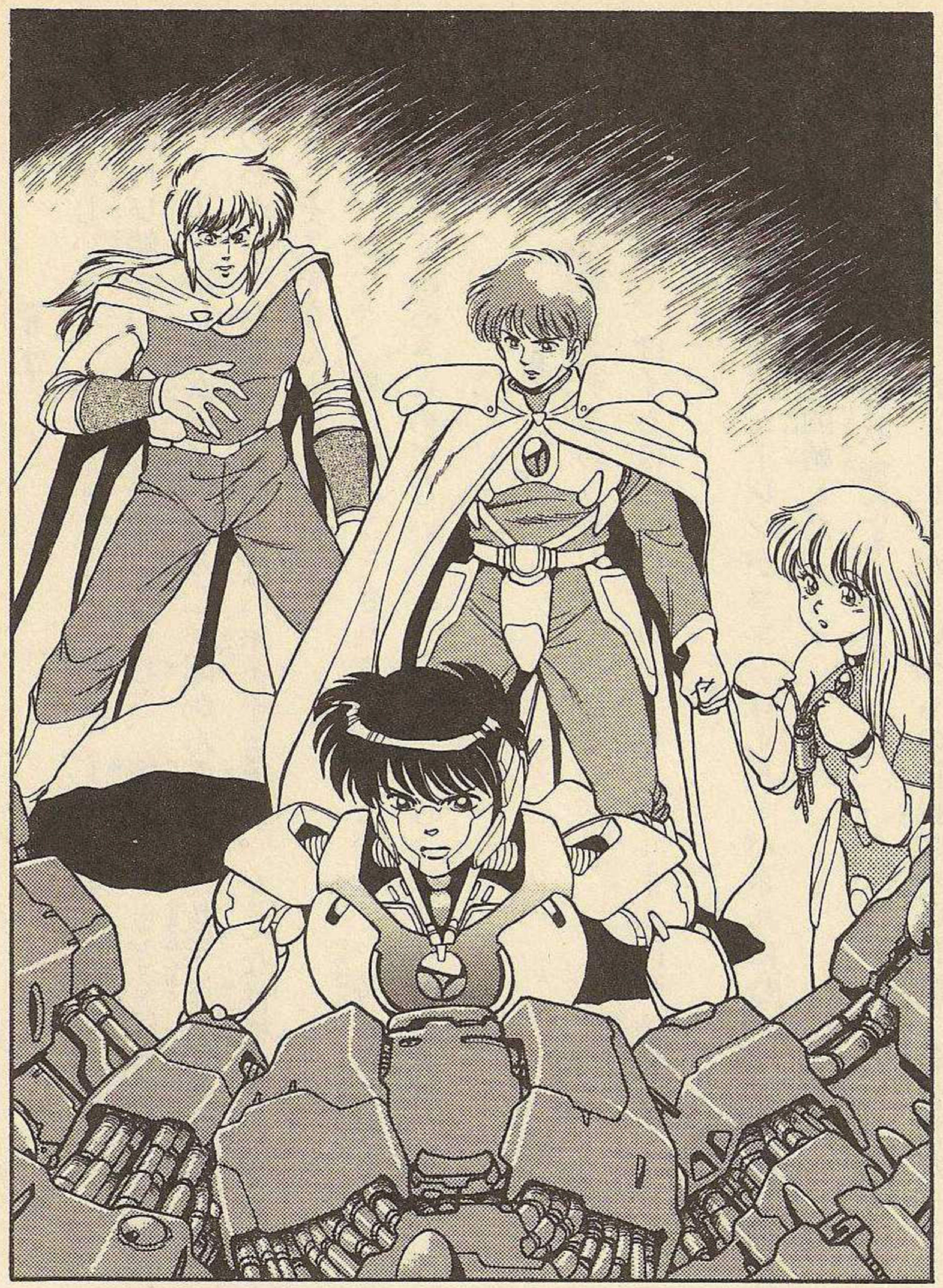
67

「ねえ、おじいさん、頼みます。ぼくにはどうしても船が必要なんです」
ぼくは再び船主のじいさんの家におもむき、床に額がとどくほど頭を下げて頼んでいた。
「だめじゃ！　わしは女の子の頼みしか聞かん人生を70数年送ってきたのじゃ」
わけのわからない迫力でめいっぱい拒否する老人。どんな性格してんだか……。
「そこを、そこをなんとか！」
「だめじゃ、わしゃ、男に頼みごとされるのが、この世で一番きらいなんじゃあああ！」
ダメだ。ぼくはあきらめてじいさんの家を後にした**（チェックb）**。

⇩87へ

68

「さあここが気象システムのコントロールルームだ」
ライルの案内で、ぼくらはついに、コントロールルームに到着した。
「たのむぞシーレン」
ぼくらの要請を受け、シーレンがコントロール・パネルにむかう。複雑な操作ののち、パネルのライトが点滅を開始した。
「気象システムは正常な状態にもどりました」
こちらにむきなおったシーレンが、いつもの抑揚のない口調で報告した。



68●シーレンが慎重にコントロール・パネルを操作するのを，
ぼくたちは息をのんで見守った。

「やったぞ！」ぼくらは手に手をとって喜びあった。
「ありがとうケイン。オレの世界を代表して礼をいう」
ライルがあらたまった口調でいう。
「そうだ、おれの国に招待しよう。ライスルから船で海を東に渡っていくんだ」
海のむこうの国……。そこへ行けば、東の海に連れさられたというマーリナの消息がつかめるかもしれない。まさに渡りに船。よし、ライルの国に行こう！

⇩238へ

69

すぐさま洞窟に直行すべきだろうか。それとも一度あたりを探索すべきだろうか。

●洞窟に直行する……………⇩42へ
●あたりを探索する……………⇩25へ

70

「ミュー、今は彫刻なんかどうだっていいよ。早くランを助けるんだ」
ぼくたちは、元きた道を引き返した。

⇩172へ

71

東への道をまっすぐに行く。道は北へと道なりに曲がっていく。そうこうするうちに

T字路が……。移動できる方向は東と西と南。さあどうする？

●南へ……………………⇩118へ　●東へ……………………⇩19へ

●西へ……………………………………………………⇩63へ

72

村についたものの、どうにも体が疲れ気味であることに気づく。今日のところは、宿屋にひっこむとしよう（**HPプラス10**）。宿屋の食堂で、主人自慢の豆スープに舌つづみをうっていると、ちょっとした噂ばなしが聞こえてきた。ヤータの町北東の森の泉に、まばたきしない少女が現れるという話だ。その少女は、一度現れると、じっと身動きもせず、哀しげな眼をして遠くをいつまでも見つめているという。彼女はライアの民であるという噂もあり、誰もが遠まきにして恐れているらしい。

なるほど、泉にはちゃんと女の子がいたってことか……。しかしそれがライアの民だとしたら、大問題だな。さてさてどうしたものか……。

●泉へ行く……………⇩12へ　●泉へは行かない……………⇩26へ

73

雪の中を歩き続けて、やっと漁師町ライスルにたどりつく。この寒さはこの町でも異常

なことらしく、町の人たちもみな心配そうである。
そんな中、マーリナに関することらしい情報を耳に入れることができた。なんでも、ライアの民にさらわれてきた少女が、海のむこうに運ばれていったという話だ。
「マーリナのことに違いない！」
ぼくは、すぐさま海のむこうにむかうための船を探した。ところがだ……。海が氷ってしまって、船など出せる情況ではなかった。ああ、いつも船では苦労させられる。ならばこの寒さをなんとかするまで。噂によれば、砂漠の世界にある塔に行けば、雪を止めることができるという。砂漠の世界へ抜ける道は、ライア軍の砦跡にあるとのこと。
さっそく砦跡にむかうとしよう。いや待てよ。その前に装備を整えた方がいいかな。

●武器屋に行く……⇩109へ
●砦跡へ……⇩151へ

74

ライルの容体が気にかかる。グズグズしてはいられない。ぼくたちは、町を出ることにした。……といっても、この世界に関しては、何の手がかりもない。仕方なく、とりあえず北に向かって歩いていると突如敵が出現した!!

☆バトル　ビット×2、ラポラ×3＝72、アイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩94へ
●負けた……⇩198へ

75

今回は相手が多すぎる。とりあえずは戦略的後退だ！　ぼくらはその場を逃げだした。

●ＨＰ13以上……⇩23へ　●ＨＰ12以下……⇩55へ

76

ぼくとミューは、阿修羅のごとき勢いで、ヤツらに挑みかかった。まず最初の標的は、動きの早いラシーラだ！　ほぼ同時に2匹のラシーラを打ち倒す。ねらいどおりだ！　お次は、ばかでかいモルモスに2人がかりで攻撃……のはずだった……。

しかしモルモスは、こちらが体勢を整えないうちに、フォイエのテクニックをもちいたのだ！　炸裂する火炎球!!　ふいをつかれたぼくには、さけようもない。

「ぐあああ！」

火炎球はぼくの背中を直撃した！　一瞬のうちに燃え上がるマント!!（ＨＰマイナス8）「ケイン様！」ミューのクローがぼくのマントを切り裂く。おかげで、火だるまになることだけはまぬがれた。

「逃げましょう！　ひとまず」

ミューが叫ぶ。もちろん異存はない。ぼくたちはあともみずに駆けだした。

ラシーラがいない今、逃げるきることはたやすかった。しかしぼくの受けたダメージは

大きい。ひとまずヤータにもどって、傷をいやさねばなるまい……。

⇩2へ

77

なんとなくいやな予感がする。やっぱりさっき見えた町に行ってみよう。

⇩11へ

78

ヤータの町についたぼくたちは、さっそくあのじいさんの家におもむいた。
ミューから頼まれたじいさんは、ニコニコ笑って、ふたつ返事で引き受ける。
「よしよし、船は出してやろう。だが向かいの洞窟には、強そうな男が宝石を守っている。お前さんたちだけで勝てるかな？」
こうしてぼくとミューは、じいさんの操る船にのりこみ、海へ出た。
島をめざす途中、海の底に沈んだ城が見えたのが印象的だった。
「この城の物語は唄となって伝わっておる。『砦の民、邪神の力を欲し、その名を闇より呼びよせたり。オラキオこれを怒りて黒き剣をなげ、砦とともに邪神の名を水底に封ず』じゃったかな……。」
船を操りながら、じいさんが、なかなかウンチクのあるところを披露する。
そしてとうとう島にたどりついた。

⇩69へ

79

今度はT字路だ。

●南へ……………………⇩88へ　●東へ……………………⇩130へ

●西へ……………………………………………⇩204へ

80

イグザオカリナを吹きならした。しばらくするとあたりの光景がぼやけはじめ、気がついたときには、ぼくとミューは、洞窟の前に立っていた。なんという不思議な力だ。

さあ、船の待つ北岸に急ぐとしよう。　⇩7へ

81

泉にたどりついた。けれど騒ぎがおこっているというわけではなかった。いい歳したおっさんたちが、わいのわいのと井戸端会議をしてるだけ。女の子がどうとか、まばたきがどうとかいってるけど、かんじんの女の子がいなくちゃね。さてこれからどうしよう？

●しばらくここにいる……⇩93へ　●ヒューリの村へ足をのばす……⇩62へ

82

ルーンとは、戦いになるかも知れない。十分に休養を取っておいた方がいいだろう。
それに、武器ももっと強力なものに代えておきたい。
ぼくは、武器屋によってラコニアナイフを2本買い、今までのものを売り払った。そして、宿屋に泊まって、体力を回復する（**HPプラス10**）。

⇩96へ

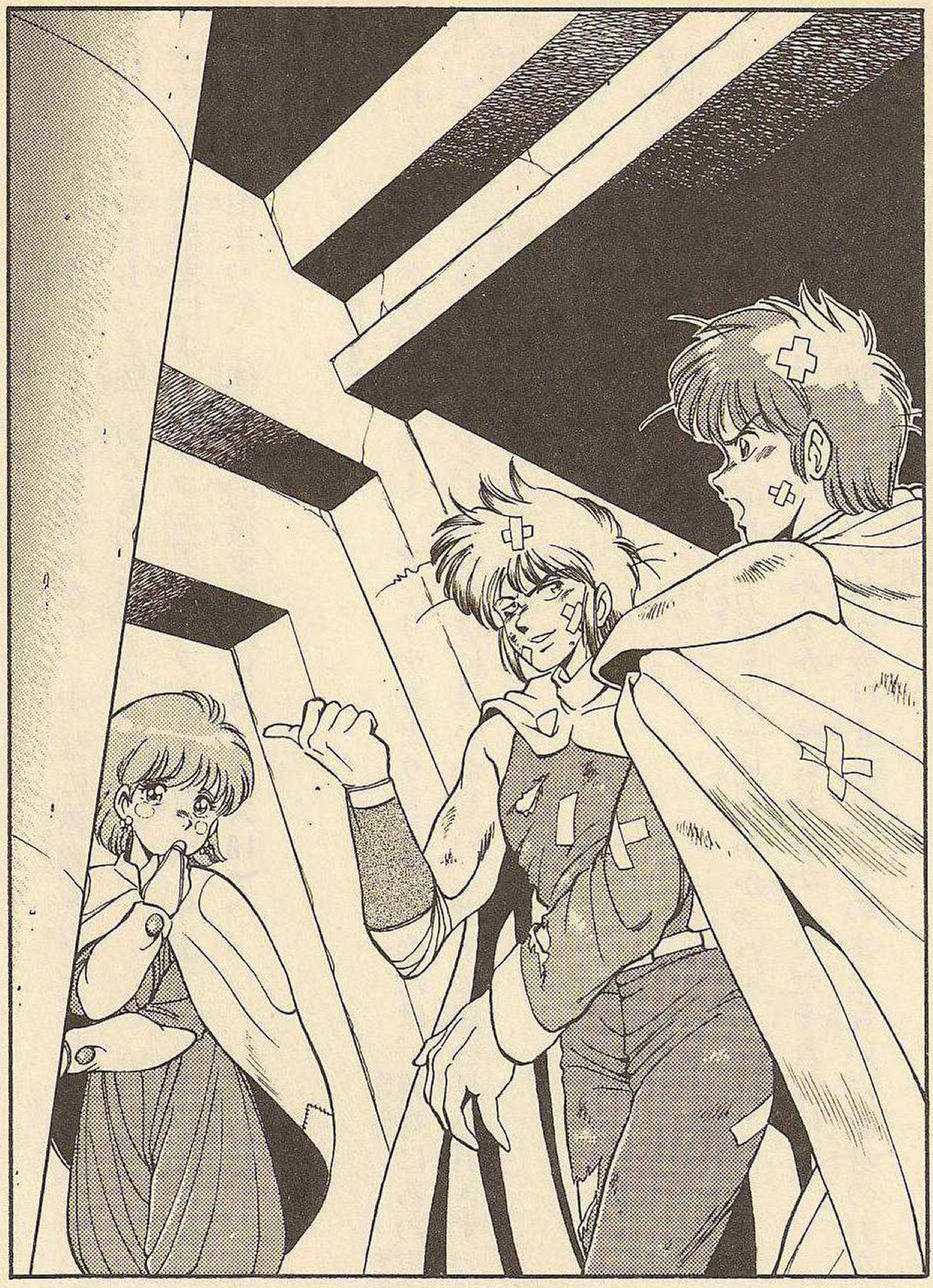
83

これくらいのケガがなんだ！　マーリナをとりもどすためには、絶対にあの宝石が必要だ。こんなところで、手間どってるわけにはいかない。ぼくは痛む足を引きずって、洞窟の中に入り、北にむかってまっすぐ進んだ。

⇩95へ

84

生半可な攻撃ではライルに通じない。
ぼくを剣を上段にかまえ、渾身の力をこめて切りかかった！
もはや、防御のことは頭にない。やるか、やられるか、ただそれだけだ。
ガキッ！　必殺の一撃をライルの杖が受け止めた。そのまま互いに満身の力をこめて押しあう。その膠着した状態が数分間続いた。



84●ライルが連れてきた少女を見てビックリ。なんとリークの地下牢からぼくを助けてくれた彼女じゃないか。

84

「ケイン、剣を引け。君の真価は見届けた」
突然、ライルが闘いを中止した。
「思ったとおりだ。君には確かにこの先に進む資格がある」
ライルはそう言うと、一人の女の子を呼び寄せた。いったい、何が何だか……。
「おれはこの国の王子なんだ。それはまあいい。ところで君は彼女に見覚えはないか？」
見覚えがないどころか……。その女の子は、ぼくを地下の牢獄から救いだしてくれたリナだった。
「ケイン様、マーリナさんは、この城の裏門から、向かいの島へ連れ去られてしまいました。島に渡るには、私の持つ月の石が必要と聞き、あとを追ってまいりましたが、途中、モンスターに襲われ、動けなくなってしまったところを、こちらのライル様に助けていただいたのです」リナは、月の石をぼくに見せながら言った。
「リナ、君は何者なんだ？」
「聞かないでください。それよりも、早くこの月の石を使ってサテライトシステムを作動させてください。そしてマーリナさんを助けだしましょう」
こうして、リナもぼくたちの一行に加わることになった**（リナ仲間に。HPプラス10）**。

チェックeはあるか？

●ある……⇩347へ　●ない……⇩189へ

85

まず狙うはモルモス！　ぼくの剣、ミューのクローがきらめき、2匹のモルモスを血に染めた。強いヤツから葬る、これは鉄則だ！　そして返す剣でラシーラを！　勝負はあっけなく決した。しかし疲れた。今のでどれだけの水分が蒸発したやら（**HPマイナス1**）。ところが近辺のモンスターはこの4匹のみではなかった。さらに、ディムール、ドルチャムといった新手が現れたのだ！　こうなりゃ、とことんやるぜ！

☆バトル　ディムール、ドルチャム＝44　ケイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩**129へ**　**●負けた**……⇩**105へ**

86

先を進んでいくと、T字路がある……。行き先は、東と西と南。どれを選ぶ？

●南へ……⇩**126へ**　**●東へ**……⇩**107へ**

●西へ……⇩**137へ**

87

ぼくはヤータの町の外まで出た。南東にはヒューリ村があるけど、そこまで女の子を探しに行ってみるかな？

チェックaに印があるか？

●ある……⇩10へ　**●ない**……⇩30へ

88

通路を歩いて行くと、T字路に突き当たった。今度はどこへ行こうか。

●北へ……⇩79へ　**●東へ**……⇩17へ

●西へ……⇩145へ

89

宝箱の中身を得るためには、どうしてもこいつらを倒さねばならない。やってやる！

ぼくはヤツらとの戦闘を決意し、ナイフを抜いて身がまえた。

☆バトル　モルモス、シーラ、ラシーラ×2＝43　ケイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩114へ　**●負けた**……⇩76へ

90

探しているのはあくまで、天候を支配する塔だ。無茶を承知で町を無視した。

しかし灼熱の太陽の中、もはや体力は限界に近づきつつあった（**HPマイナス3**）。

だがついには砂漠のかなたに塔を発見する。すぐにのりこむか？（チェックd）

●のりこむ……⇩29へ　●のりこまない……⇩77へ

91

アンドロイドはミューと名乗った。

ミューは少女の外見をもった美しいアンドロイドだ。あの変わり者の船主の老人も彼女の頼みなら聞くかもしれない。よし、ヤータの町へ急ごう！　**チェックbはあるか？**

●ある……⇩37へ　●ない……⇩78へ

92

ぼくらはまずロボットの町ハサタカにむかった。宿屋に泊まって休息をとる（**HPプラス10**）。例によって、町を歩いているロボットをつかまて、情報を得る。

「さてらいとしすてむハ、月ノ石、月ノ涙ノフタツノ石ヲ、ぱねるニハメコマネバナリマセン。最初ニ月ノ石、次ニ月ノ涙。コノ順番ハカエテハナリマセン」

ロボットが親切に教えてくれる（**チェックf**）。

⇩210へ

93

もうちょっとここにいて、シーラとの戦いの疲れをいやすとしよう。のんびりと泉のほとりに腰かけた。そのときそばのしげみから、突然モンスターが飛びだしてきた。いきなりの攻撃にあわてふためいたぼくは、ドボンと泉の中に落っこちてしまった。水の中ですかさずナイフを抜き、スキをついてモンスターを倒したものの、こちらはすっかりぬれねずみ。トホホホホ……（HPマイナス1）。

⇩62へ

94

頑丈なロボットは、装甲に覆われていない関節を狙うのが一番だ。ビットの肩のつけねに向かって剣を振りおろす！　ガキッ！　確かな手ごたえとともに、ヤツの腕が地に落ちる。しかし、ヤツは腕一本なくなったことなど何とも思っていないかのように、オイルをしたたらせながらぼくに襲いかかってくる。くそ、なんてヤツだ。

「アイン様、危ない！」

突然、足に激痛（HPマイナス4）。見ると、さっき叩き切ったヤツの腕が、ぼくの足にからみついている。独立して動けるとは！　切るだけじゃダメだ！

シーレンがグラブトのテクニックを使う。ヤツらの体が、重力波に粉砕された。それと同時にぼくの足を捕えていた腕も力を失った。今度こそ大丈夫だな。

やっぱり適当に歩いていても、ランが見つかるわけはない。レンソルの城下町にもどって、情報収集だ。

⇩124へ

95

しばらく進むと左に道が分かれている。進路が北と西の2つになったわけだ。あるいは南にもどるという手もある。どうしよう?

●北へ……⇩107へ　●南へ……⇩43へ
●西へ……⇩5へ

96

ぼくたちは、ロケット打ち上げ場に入っていった。そこは、巨大なホールのようになっており、壁一面をさまざまな機械が覆っている。壁に埋めこまれた赤や青のランプがチカチカとまたたき、ホールの中心に置いてある小型ロケットに光をなげかけていた。

いよいよルーンと会うんだ……。シーレンがロケットを操縦し、ぼくたちは『紫の月』へと向かう。『紫の月』は、驚くほどぼくの故郷に似ている世界だった。おなじ役割を持つサテライトなのだから、当然のことかも知れないが……ロケットの着陸場所から、王宮に足を踏み入れた瞬間、『青の月』にもどってきたような錯覚に捕われる。

「ライアの民よ、よくきた」
声のした方を見ると、部屋の奥の王座に、ひとりの男が座っていた。横には、スラリとした美しい少女が立っている。その他に、部屋に人影はなかった。
「私はエシル家の公子、ルーン。ルーン・ケイ・エシル……」
！　こいつが、こいつがルーンか!!

●**躍りかかる** ……………⇩**156へ**

●**まず話をする** ……………⇩**438へ**

97

オカリナはまだまだ先にとっておき、自分の足で出口にむかうことにした。
しかしそのため困難にも遭遇した。途中のあちこちで、モルモス、ラシーラというモンスターに遭遇したのだ。致命傷こそ受けなかったものの、体中はもう傷だらけ（HPマイナス6）。まあ命が助かっただけでもメッケもんだったかな……。 ⇩**7へ**

98

左の通路を選んで、まっすぐに進む。すると、行く手をはばむモンスターどもが出現！
竜の亜人種ドラゴニアン、目玉の化物グランが2匹！　強敵だ!!

☆**バトル　ドラゴニアン、グラン×2＝52　ケイン＝HP＋Cで戦います。**

●勝った……⇩134へ　●負けた……⇩160へ

99

ぼくらはシーレンを求めて、再び砂漠の旅人となった。めざすは西の洞窟だ。しかし砂漠の旅はつらい。ギラつく太陽の下、いくらも歩かないうちに、体はヘトヘトになる。どこか涼しいところでひと休み……。

「ケイン様！」暑さでボーっとしていたぼくをミューが突き飛ばした。同時に足元の砂がぐぐっと盛り上がり、砂煙とともに、ラシーラが2匹飛びだしてきた！　どこから現れたのか、モルモスまで2匹いる。

☆バトル　モルモス×2、ラシーラ×2＝46　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩85へ　●負けた……⇩153へ

100

ぼくは王室に乗りこんだ。そこでは一人の男が待ち受けていた。

「私は、このシールの国王だ」国王……。するとマーリナの父親か！

「オラキオの民が、私の娘につきまとうとは、身のほど知らずめ！」

そういうなり、国王は杖を構えた。そのあとを6匹のバタフライが固める。



100●王室に乗りこんだぼくを待ち受けていたのは，シール国の王――マーリナの父親だった！

やるしかない！　国王とバタフライ、まずどちらから攻撃する？

●国王……………⇩183へ　●バタフライ……………⇩155へ

101

2匹のケイブウォルフは、グラブトのテクニックを炸裂させた。

「シーレン、グラブトのテクニックを！」すぐさま、シーレンはグラブトを放った！

2つのグラブトがぶつかりあった！　強力な重力波同士のぶつかりあいは、共鳴現象をまき起こす！　たちまち地下道全体に重力異常が生じ、天井が崩れはじめた!!

「しまった、地下道が崩壊する！」ぼくは致命的なミスをおかしたのだ！　慌てて脱出をはかるが、間に合わない。崩れ落ちた無数の土砂がぼくたちを生き埋めにした。

END

102

かれこれ2日も歩きつづけているが、見渡す限り、砂砂砂砂砂……。寒いところから、急に暑いところへきたためか、ぼくはすっかりバテていた（HPマイナス1）。

「ケイン様、人影が見えます！」突然、ミューが砂漠の中に人影を認めた。あわてて近づいてみると、それはミューそっくりの女の子。アンドロイドだ！

だがこのアンドロイドは壊れていた。
「オラキオ様……。わたしのオラキオ様はどこ？」
何を尋ねても、これをくりかえすのみ。仕方なく、ぼくらは彼女から離れた。
それから歩くこと、3時間。突然南の方に町が見えた（チェックc）。

⇩11へ

103

歩いていると、雪の中から突然3匹のモンスターが出現した！　カタツムリ犬のチャムだ。性悪イヌのように吠えたて、カタツムリのように閉じこもる。一番キライなタイプのヤツだ。ようし！　徹底的にやってやる。

☆バトル　チャム×3＝41　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った　……⇩49へ　**●負けた**　……⇩141へ

104

レンソルの城下町に入ったぼくたちは、まず宿屋で体力を回復した（HPプラス10）。
さて、次は情報収集だ。それとも、旅の先を急いだほうがいいだろうか。

●情報を集める　……⇩124へ　**●先を急ぐ**　……⇩74へ

105

しかし、筋肉ムキムキのゴーレム、ディムールは強かった！　炎のテクニック、フォイエ、真空をあやつるザンなどを縦横無尽に繰りだし、ぼくらを圧倒する。こりゃ、まともにやっても勝ち目はない。体力が残ってるうちにさっさと逃げだそう。ぼくとミューは力の限り走り続け、なんとかヤツらをふりきった（**HPマイナス3**）。

⇩142へ

106

ぼくはまずハサタカの町にもどることにした。あいつぐ戦いに体はすっかり疲れきっている。ともかく休息が必要だ。だが敵は休むヒマなど与えてくれない。メガフログ、ケイブウォルフ、ドルチャムにチャムが2匹、砂漠を急ぐぼくらの前にたちはだかった。

☆バトル　モンスター軍団＝52　ケイン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……………⇩138へ　**●負けた**……………⇩123へ

107

さらにまっすぐ進む。またT字路だ。道は東、西、南に分かれている。どうする？

●南へ……………⇩57へ　**●東へ**……………⇩71へ

●西へ……………………………………⇩86へ

108

戦いはぼくらの勝利に終わった。それにしても目を見張ったのが、ライルの戦いぶりだ。そのあやつる杖は予測もつかない変化を見せ、華麗に敵を撃ち倒す。モルモスごときなど、足元にも寄せつけない。これほどの戦士、未だかつて見たことがない。

⇩68へ

109

ぼくたちは砦に到着した。ラッキーなことに、ここまでの道のりで1度もモンスターに出くわさなかった。めずらしいこともあるもんだ。さて、調査にとりかかるとするか。

●まず建物のまわりから調べる ⇩139へ
●建物の中から調べる……………⇩50へ

110

中では地下道が続いていた。こうなりゃ出たとこ勝負だ。ぼくらはひたすら進んだ。「気をつけろ、モンスターだ！」先頭を歩いていたライルが警告の声を発する。「ラルモス、ラシーラ、モルモスが2匹ずつ。都合、6匹。ぬかるなよ」ライルが暗闇の中、即座に敵の陣容を看破する。すごい！　彼には見えるのか……。

☆バトル　モンスター軍団＝61　ケイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……………⇩133へ　●負けた……………⇩177へ

111

一刻も早くマーリナの消息を知りたい。ぼくはシューソラン王国にむかった。
「王さまの申し出を断ってよかったのでしょうか……」
心配げに、ミューが言う。確かに急いで飛びだしすぎたかも……。もし、王がぼくに重要な用があたっとしたら……。今ならまだ引き返せるが……。

●王に会いに行く……⇩121へ　●シューソラン王国へむかう……⇩61へ

112

『忘れられた町』ハサタカ。ここは、シーレンの仲間たちがいるロボットの町だ。
とりあえず、宿屋に泊まって体力を回復（**HPプラス10**）し、情報を集めることにした。
「らいあノ民ト思ワレル難民ナラ、西ノ洞窟ノ方へ逃ゲテイッタ」
道を歩いていたロボットに、ライアの民とサテライトのことを尋ねたら、しばらく考えこんだあと、ゆっくりと答えてくれた。
「ソノナカニ20年前、我々カラ『双子ノるびー』ヲ盗ミ、北西ノ洞窟カラりーくへ抜ケテイッタ男ガイタ。東ノ、ふろとらーんナラ、さてらいとへイク方法ガアル。シカシ『力ノとぱーず』ガナケレバ、オソラクさてらいとへハイケマイ。『力ノとぱーず』ハ、さてらノ国ニ代々伝ワルト聞ク。カツテ、コノ町ニモキタりなノ故郷ダ。シカシ、今ハ、りなノ

娘ガソレヲ持チ、リークノ城ニイルトウワサニ聞イタ。アア、ソレカラ砂漠ニハ壊レタロボットガサマヨッテイル。害ハナイガ相手ニシナイ方ガイイダロウ」

さすがロボットの電子頭脳、すごい記録容量だ。いっぺんに情報をまくしたてられ、ぼくの頭は混乱状態におちいった。ええと……サテライトにいく方法は、東の世界にあるフロトラーンでわかるんだな。でも『力のトパーズ』がなければ、サテライトには行けない、と。『力のトパーズ』は、リークの城にあるリナの娘さんが持っていて……。父たちは、どうやらこの世界の西の洞窟にいるらしい。それから、砂漠に壊れたロボットがさまよっているって？

これだけのことがわかれば、十分だ。ぼくは、丁寧に礼を言って、彼から離れた。こんな、いいロボットだって作れるのに……なぜ、オラキオの民は戦うんだろう。

さて、ぼくはこれから、

●アンドロイドを捜す……⇩237へ　●西の洞窟へ……⇩351へ

●リークへ……⇩319へ

113

残るは国王のみ！　「シーレン、手を出すな！　ぼく一人でやる!!」

☆バトル　シール国王＝60　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……………………⇩193へ
●負けた……………………⇩216へ

114

「ミュー、シーラとラシーラを頼む！　ぼくはモルモスをやる!!」
モルモス以外は、ザコだ。ヤツをやれば、あとはなんとでもなる！
ぼくはナイフを両手でにぎり、体ごとモルモスにぶつかっていった。
ゴリッ！　確かな手応えあり。ナイフをヤツの腹に突きたてたのだ。そのまま抜かずにナイフを一回転させる。グアアアアアア！　洞窟内に響きわたる苦悶のおたけび。すかさずナイフを引き抜き、今度はヤツの心臓に突きたてる。
やったか！　だがヤツの生命力は並みではなかった。心臓にナイフを突きたてたまま、ぼくの首をその堅固な両腕でつかみ、そしてしめあげたのだ！（ＨＰマイナス４）。
「だ、だめだ……」意識が遠くなる。しかしヤツももはや限界だった。ぼくの体をつりあげたまま、後にドウと倒れ伏す。
モルモスさえ倒せば、あとは大したことない。ぼくとミューは力を合わせ、残りのザコを片付けて、宝箱をものにした。しかし箱の中には、『森のサファイア』ではなく、イグザオカリナが入っていた。これを吹きさえすれば、どんな迷宮からも脱出できるという、すぐれた宝物だ。

⇩65へ

115

なんとか西の洞窟にたどりついた。さっそく中に入る。中は分岐するでもない一本道で、迷う恐れもない。気楽に進んでいくと、バッタリ、モンスターのチャムとラシーラに出くわした。出会い頭に、ラシーラにちょっとひっかかれたが、まずはなんなく撃退（HPマイナス2）。さらに前進する。すると人影が……。

⇩168へ

116

「ケ、ケイン王！　マーリナ様！　アイン王子!!　申し上げます！　どこからともなく、殺人機械、ロボットの大軍団が現れました！」

ぼくたち——父王ケイン、母マーリナ、ミュー、シーレン、それにぼく——が王の部屋でくつろいでいると、突然、兵士が駆けこんできた。

「ロボットどもは、オラキオの旗を揚げ、我らの国に攻めこんでおります」

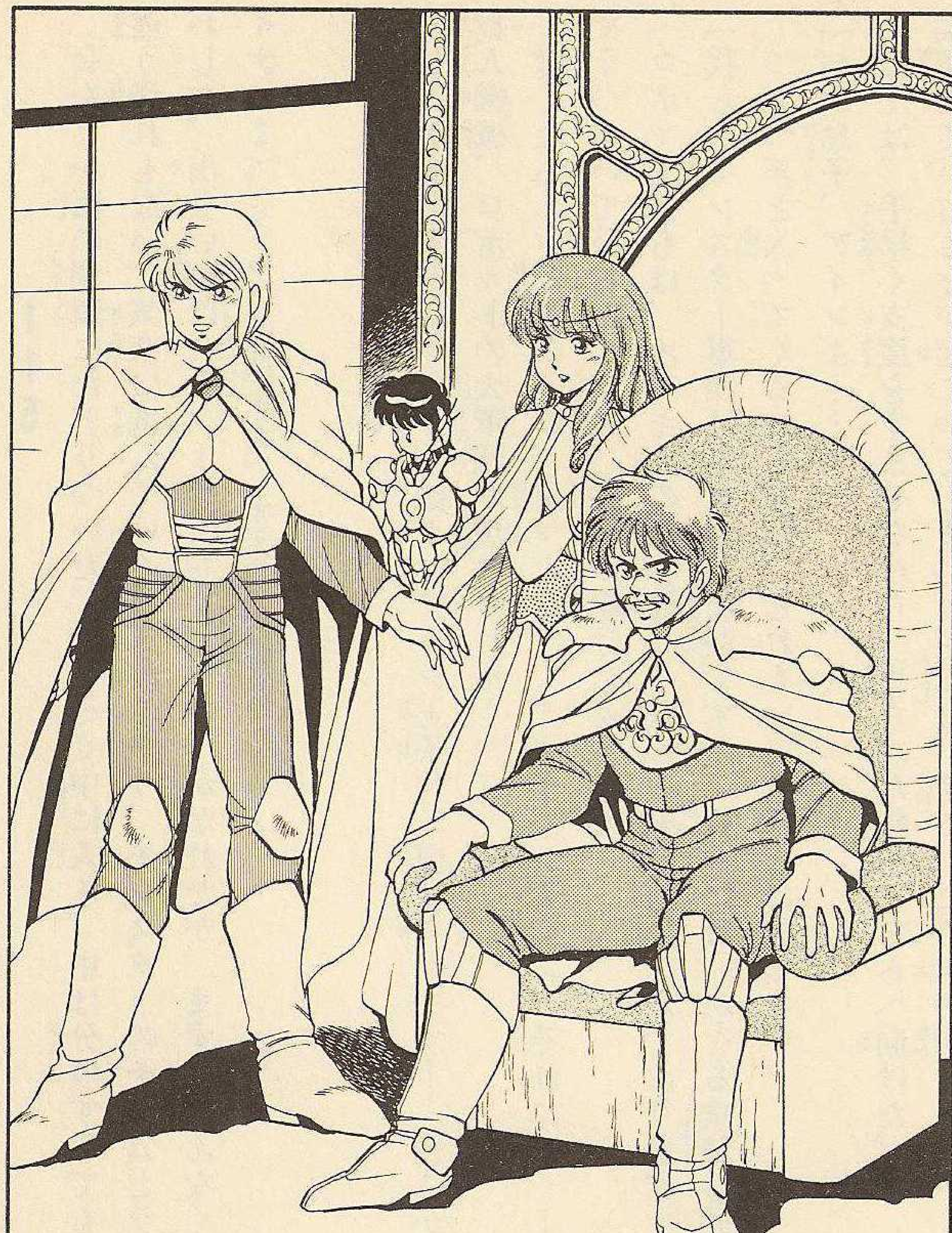
「我らのモンスター軍団はほとんど全滅です！　奴らにはいかなる攻撃も通じません！」

つぎつぎと入ってくる知らせは、どれもいいものとは言えない。

「わが息子、アインよ……」

父王は、手早く支度をすませながら、青ざめた顔をこちらへ向けた。

「恐れていたことが起こってしまった。私は、旅で、この世の中には、いくつもの世界が



116●ぼくたちが王の部屋でくつろいでいると，兵士が息せききって駆けこんできた！　ロボット軍団が攻めてきたのだ!!

あることを知った。そして、いつか別の世界のものが攻めてくるのではと心配していた。アインよ！　私はこの国を守る！　おまえは、ミュー、シーレンとともに、国を出よ！　そして『永遠の平和の世界』サテライトを探すのだ」
「いやです、ぼくも戦います！」母が、ぼくの手を取った。
「この国はおそらくもう……。だからこそ、サテライトを探すのです。世界が争いに満ちたとき、神に選ばれたものだけが住むことを許されるという伝説の国を。そして、平和な世界を。わかって、アイン」
「……わかりました」ぼくは、涙を必死でこらえつつ、ついにうなずいた。
「一刻も早く、サテライトを探してまいります。ですから、父上、母上も……」
「ああ。それまでは、この国を守り抜いてみせよう。さあ、いけアイン！」⇩159へ

117

ぼくたちは、空中都市クランクレアを出た。**チェック○はあるか？**

●ある……………………⇩462へ　●ない……………………⇩323へ

118

南に足をむける。ん……、L字路だ。しかしこれはさっきのL字路じゃないか。この

ままいったらまたフリダシにもどっちゃう。引き返そうっと。

⇩71へ

119

戦いはぼくらの勝利に終わった。初めて戦うモルモスに多少手間どったが、なんとか退けることができた。ただ、腕にわずかばかりの傷を負いはしたが……(HPマイナス4)。

それにしても、目を見張ったのが、ライルの戦いぶりだ。そのあやつる杖は予測もつかない変化を見せ、華麗に敵を撃ち倒す。モルモスごときなど、足元にも寄せつけない。

いったいどれだけ強いのか、ぼくの力量では見当すらつかない。

⇩68へ

120

早く倒さねば！　そんなあせりが、ぼくのナイフさばきを鈍いものにしたようだ。ラシーラは、ぼくの攻撃を軽々とかわし、毒をあびせかけたのだ！(HPマイナス4)

だめだ！　単調な攻撃ではヤツには通用しない。フェイントをからめて幻惑させねば……。ぼくは、気力をふりしぼって、再びヤツに挑んだ。

⇩45へ

121

ぼくは王に接見した。しかしこれは大きな間違いだった。アゴエ王は、ぼくの父から連

絡を受けていたらしく、ぼくらを捕まえて、リークへ送り返そうとしたのだ。
ここまで来て冗談じゃない！　ぼくらは取り囲んだ兵士どもをけちらして、逃げだした。そうはさせじと、追いかけてくる兵士たち！　なるべく傷つけないようにして、戦ったため、ぼくらは大苦戦。やっと逃げのびたときには、疲労困憊、体中傷だらけというありさまだった（HPマイナス10）。えらい目にあった。寄り道しないで、とっととシューソランへ行くことにしよう。

⇩61へ

122

今のぼくらには、この程度のモンスターなら、敵ではない。ヤツらをまたたく間にしりぞけ、探索の旅を続けた。そしてとうとうタワーを見つけだしたのだ。

⇩21へ

123

戦いはなんとかぼくらの勝利に終わった。しかしこの戦いで受けたぼくのダメージは大きく、ミューにささえてもらってやっと立っているというありさまだった。何よりもメガフログの毒をおもいっきり吸いこんでしまったのがいたかった（HPマイナス12）。
それにしてもシーレンの戦闘力はすさまじい。彼がいなければ、ぼくなど今ごろ虫の息だったにちがいない。

⇩195へ

124

「その人かどうかは知らないけど、美しい女性が、レンソルのお城に運びこまれるのを見たぜ。上品で、気品があって、ありゃきっとどこかのお姫さんだね」

ランだ！　町の人に話を聞いてまわって4人目。思いがけず重要な情報を聞くことができた。きっとランに違いない。はやる心を抑え、その人に礼を言い立ち去る。

ラン、もう少しだよ。今助けてあげる……！　しかし、城門はかたく閉ざされていて入ろうにも入れない。かといって、ほかに出入り口も見つからないし……。仕方ない、ぼくは体当たりで城門を破ることにした（ＨＰマイナス３）。

⇩240へ

125

チープコックのバータのテクニックが炸裂した。鋭い水流がぼくを襲う！　よけきれなかった。水流が胸を直撃し、ぼくは背中から壁にたたきつけられてしまう。一瞬意識が遠くなった（ＨＰマイナス７）。

「ケイン様あぶない！」

ミューが助けに入らねば、ぼくの喉笛は、ヤツの鋭いクチバシで引き裂かれていたことだろう。ミューはぼくをかばいながらクローをふるい、かろうじてチープコックとチャムを押しもどした。

「くそう、これしき！」
ぼくは最後の力をふりしぼって立ち上がり、剣を抜いて、その戦いに加わった。
数分間の奮戦ののち、ぼくたちは勝利をおさめた。しかしぼくの受けたダメージははなはだしい。剣を杖に、ふらつく足をささえて、建物の外へ出た。

⇩139へ

126

南にむかった。しばらく進むと、道は東にむかって折れ曲がる。
とにかく進むしかないだろう。

⇩57へ

127

いけるぞ！　自信を持ったぼくは、かさにかかって攻め立てた。
「攻撃に専念すぎて、防御がおろそかだぞ！　それに攻め方にクセがありすぎる」
ライルはそういうと、杖を下からはねあげた！　さけきれず、ぼくの腕から剣がとぶ！
「拾え、ケイン！」余裕を見せるライル。ぼくは屈辱にくちびるをかみしめ、剣を拾った。
「きみのくせは、もう見切った。いつでも倒せる！」
そういうなり、ライルは再びぼくの剣をはねとばす。
「その程度の男に、マーリナはわたすわけにはいかんな……」

ライルはそういいはなつと、呆然としているぼくを尻目に、城の奥へ消えていった。

END

128

最初に降りてきた階段のそばの十字路へ出た。階段は南にあり、進むとしたら北、東、西の3方向だ。

●北へ……⇩**169へ**　**●東へ**……⇩**272へ**
●西へ……⇩**253へ**

129

しかし筋肉ゴーレム、ディムールは強敵だ。炎のテクニック、フォイエ、真空をうみだすザンのテクニックを、縦横無尽に使いこなす。ぼくの足には、すでにザンのテクによる傷が数箇所。このままではいずれ……**（HPマイナス2）**。

「わたしにまかせてください！」ぼくをかばうように、ミューが前に出た。その瞬間、ディムールは、砂漠のはるか彼方にふっとばされた。アンバランスのテクニックだ。すごい！

「ケイン様、ドルチャムを！」

いわれるまでもない。ぼくは剣をふるって、ドルチャムの背中の殻をたたき割り、やつ

を撃ち負かした。

⇩142へ

130

石畳にブーツの音が響く。なおも進むと、十字路に出た。

●北へ……⇩212へ
●南へ……⇩17へ
●東へ……⇩277へ
●西へ……⇩79へ

131

「シーレン、ディムールをやれ！ ぼくとミューは、シーラをやる！」
すばやく役割を分担。ぼくは剣を抜いて、またたく間にシーラを両断した。
フォイエ！ シーレンとディムール、両者の放った炎がぶつかりあう。熱波がシーレンを包んだ。やられたか？（HPマイナス5）。
しかし、一瞬の後には、炎はディムールに向かっていた！ シーレンが勝ったのだ！
さらに探索の旅を続ける。そしてついに、タワーを見つけだした。

⇩21へ

132

洞窟の中の、広間のように広くなった場所に、みんなの姿を見つけた。



132●東の世界にさらわれた，ライルの娘，ラン。重傷のライルのためにも，絶対に救いだしてみせるぞ！

「おお、アイン！」
「父上、母上。よかった、ご無事で……」
ぼくの言葉は、途中で途切れた。2人に支えられるようにして、こちらを振り向いたライル……。彼の右目は傷を受けていた。
「ふふ……、竜の騎士と呼ばれたおれが、このザマだ。アイン、頼む。東の世界へさらわれたランを、おれの娘を救ってくれ。おれでは東の世界への鍵を手に入れるだけで精いっぱいだった……」ライルは、右目のほかにも深い傷を負っているらしい。そこで大きくあえぎ、苦しそうに息をつくと、ふところから透明な輝きを放つ宝石を取りだした。
「この……『竜の涙』と呼ばれる宝石がその鍵だ。頼むアイン、ランを……」
ぼくは宝石を受け取り、しっかりとライルの手を握る。
「わかりました。必ず、ランを救いだしてみせます」

⇩221へ

133

暗やみの中、ミューのアンバランス、シーレンのザンのテクニックが炸裂した。つづいて、ぼくの剣と、ライルの杖がきらめき、モンスターを圧倒する。
数分後……。ぼくらはすべてのモンスターを下し、地下道を先に急いでいた。しばらく進むと、道は登り坂となった。出口だ！

外に出ると、そこはシューソランの城内の秘密の小部屋であった。

⇩66へ

134

目玉は2匹ともミューにまかせ、ぼくとシーレンは、共同してドラゴニアンにあたった。ヤツはそれほどの強敵だった。幻妖な動きで、シーレンのテクニックすらことごとくかわしてしまう（**HPマイナス3**）。

「シーレン、ショットガンを使え！」

ズダダダダ！　ショットガンの連射が、やっとドラゴニアンの動きを止めた。

「今だ！」棒立ちになったドラゴニアンに、わが剣がきらめく。一瞬の間をおいて、ヤツの首がぐらりと落ちた。くせもののドラゴニアンさえ倒せばこっちのもの。ぼくたちは力を合わせて、グランを平らげ、通路を先に進んだ。

⇩199へ

135

リークの世界に着いたとたん、ナイフを持った上半身だけの幽霊、クライオン2体と、マダムバタフライ6匹に襲われてしまった（**HPマイナス12**）。ほうほうの態でリン女王を訪ねる。しかし女王は何も知らず、可能な限り世界をまわっても、何の手がかりも得られなかった。別の世界へ行こう。

⇩197へ

136

船はアゴエの国についた。このアゴエの国は、現在、北のライアの民の国、シューソラン王国と戦争をしているという。そのせいか、どこか国全体がピリピリしたムードにつつまれている。さっそくアゴエの国の城下町に入り、情報を集める。

「シューソランの城下町に忍びこんだときに、あんたのいうとおりの怪物が、噴水から出てくるのを見たぜ」

兵士のひとりが教えてくれる。

「そういえば、見たこともない可愛い女の子が、ヤツらの城に連れこまれたとも聞くな」

！　女の子……。マーリナに間違いない!!　ぼくはシューソラン行きを決意した。

「ところで、あんた、西の国のリークから来た人だろ。王様があんたと会いたがってるんだ。いっしょに来てくれないか」

王がぼくに……。なんだろう？　会いにいくべきだろうか？

●王に会いに行く……………⇩121へ

●シューソラン王国へむかう…⇩111へ

137

西へ進むと、道は南に折れ曲がっている。角をまがると……、あれれいきどまり。しかたない。引き返すことにしよう。

⇩86へ

138

戦いはぼくらの勝利に終わった。ぼくは左腕と右脇腹に傷を負っていたが、気力は充実していた。5匹のモンスターを相手にしたのだ、これしきの傷ですんだのは、よしとせねばなるまい（**HPマイナス5**）。それにしてもシーレンの戦闘力はすさまじい。まったく心強い味方を得たものだ。

⇩**195へ**

139

砦のまわりを探ってみる。と……妙なことに気がついた。一箇所だけ、雪がつもっていないところがあるのだ。どうする行ってみるか？

●行く ……………⇩52へ

●その前に建物の中を調べる ……⇩50へ

140

ぼくらは、シューソラン王国の北の岬に到達していた。2つの月が接近したことによって、シューソランの北の海には、再び引き潮が起こるようになっていた。海が引いて、浅瀬となっている。さっそく浅瀬を歩いて渡って、シールの王国に侵入する。だがそこで待ち受けていたのは、モンスターの大軍団だった。

☆バトル　モンスター軍団＝70　ケイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……………⇩252へ　●負けた……………⇩194へ

141

ヤツらの動きはのろい。ふいうちでもされる以外、負けようがない。ぼくはすっかり相手をなめきっていた。ところが、ヤツらには奥の手があったのだ。そのネチャネチャしたヨダレを敵にとばして、動きをにぶらせるという……。
たかがカタツムリ犬と、たかをくくっていたぼくは、この攻撃をもろにうけてしまったのだ。身動きのとれなくなったぼくめがけて、チャムが殺到する。幸いにもミューが助けだしてくれてことなきをえたが、この体液、一度つくとなかなか臭いが落ちない。
というわけで、ぼくは今だにチャムくさい状態である（HPマイナス3）。⇩73へ

142

そんなぼくらの前にまたもモンスターが出現！　しかし、今度はラッピー1匹。楽勝の相手だ。などとたかをくくっていたのがまずかった。ヤツは生意気にもグラブトのテクニックをつかったのだ。ムギュー、重力波に押しつぶされる（HPマイナス2）。
「くそう……、こいつ……グラブトが……つか……えるのか……」
とはいえ、しょせんラッピー程度のグラブト。うちやぶれないほどではない。調子にの

ったラッピーが近づいてくるや、渾身の力をふりしぼって、剣をぬきはなち、一気に切り捨てた！

⇩115へ

143

洞窟へ入るとすぐに、通路が右と左に分かれている。どちらへ進もう。

●右へ……………⇩262へ　●左へ……………⇩154へ

144

早朝、ハサタカの町をあとにした。めざすは、気象コントロールタワー。何でも、ハサタカの町から東南の位置にあるらしい。その情報を信じて、ぼくらは再び砂漠の旅人となった。だがまる一日歩いても、タワーを見つけることはできなかった（HPマイナス5）。

「もう、一歩も進めないぞ！」

ぼくは思わず、砂の上にへたりこんだ。その瞬間である。ぼくの頭上を紅蓮の炎が通過したのだ!! フォイエ、炎のテクニックだ！

現れた敵は、大ネズミのシーラが2匹に、ゴーレムのディムールが1匹だった！

☆バトル　シーラ×2、ディムール＝39　ケイン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……………⇩122へ　●負けた……………⇩131へ

145

くそ、行き止まりじゃないか。引き返しかけたとたん、前方から火の球が！　マントで防いだが、手に軽い火傷を負った（**ＨＰマイナス３**）。敵がフォイエを使ったらしい。だが肝心のそいつは逃げてしまったようで、前方には何の気配もない。

⇩88へ

146

モンスターどもの第２次攻撃をしりぞけたぼくたちは、とうとう城内に侵入した。しかし、そこにもモンスターが待ち受けていた！

☆バトル　モンスター軍団＝68　ケイン＝ＨＰ＋Ｂで戦います。

●勝ち……⇩275へ

●負け……⇩248へ

147

ライルは杖を変化自在にあやつり、ぼくを一方的に攻め立てた！

強い！　その打撃は鋭く、かろうじて急所をはずすだけが精一杯だ。腕、腰、足と、つぎつぎと打ちすえられていく（**ＨＰマイナス12**）。このままではやられる……。

●ミュー、シーレンに助けを求める……⇩289へ

●こうなりゃとことん闘う……⇩84へ

148

こうして、ぼくは、長い旅の果てに、やっとマーリナを取りもどすことができた。ぼくには、彼女とふたたび別れることなど考えられなかった。だから……。

ぼくは2度と故郷にもどらなかった。リーク国の王位継承権を捨て、マーリナとの愛を選んだ。オラキオの民であるために彼女と結婚できないなら、ぼくはオラキオの民であることをやめる。そう、今ではぼくはライアの民、シール国の王ケイン・ル・シークなのだ。

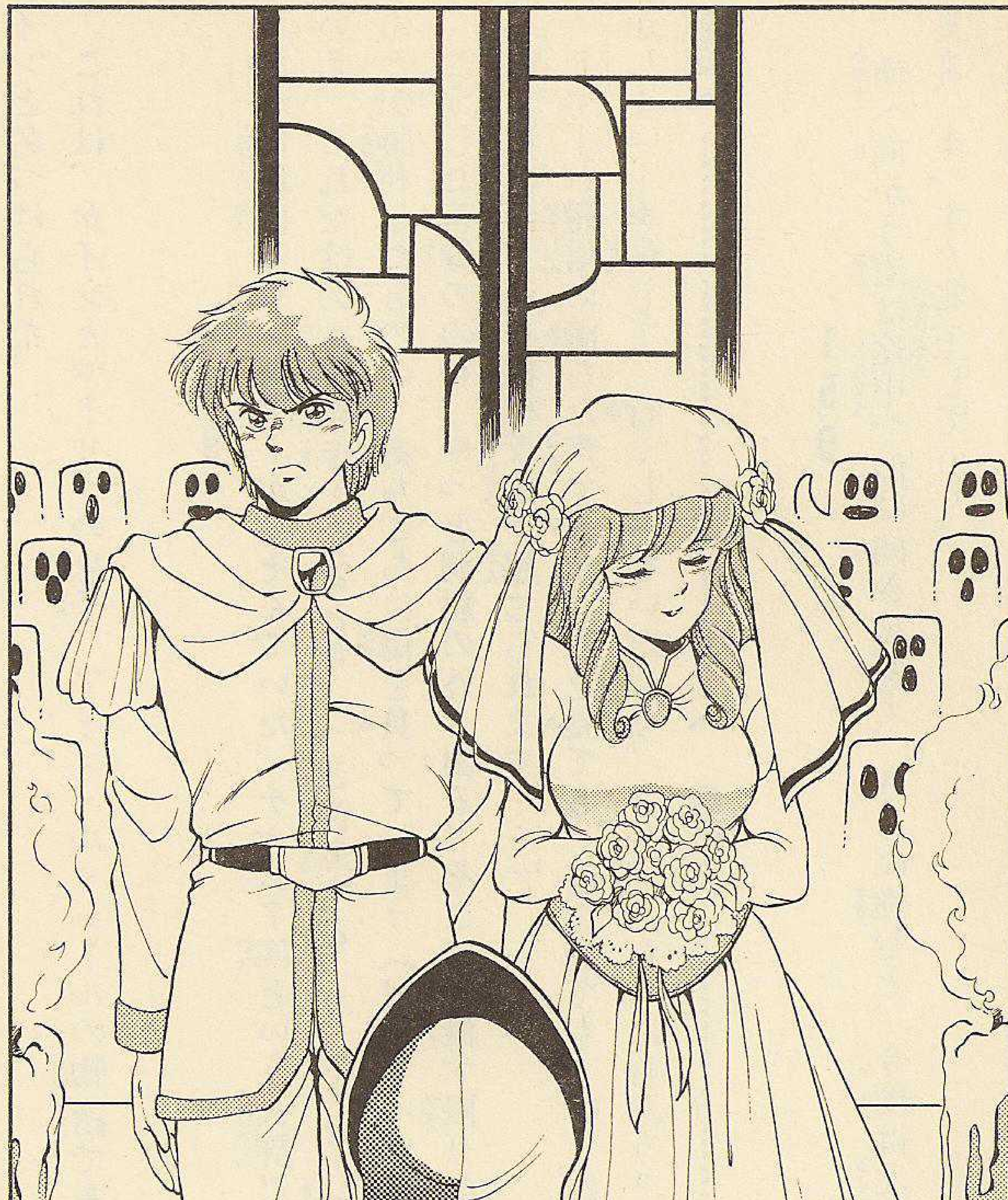
ぼくが故郷を捨てて、シール国で新たな生活を始めてからも、ミュー、シーレンは変わらず側にいてくれた。親友にして、義理とはいえイトコになったライルは、隣のシューソラン国の王になった。そしてリナは……。彼女のことを思うと、胸が痛い。あのとき、マーリナを取りもどした喜びから、ふと我に返ると、リナの姿は王室から消えていた。不思議に思っているぼくに、シール国王は言ったのだ。

「あの娘の真実の姿は、おまえの隣の国、サテラの姫。おまえの婚約者として育てられた少女なのだ」と……。

この一言で、すべての謎がとけた。リナ……。ぼくは彼女を裏切ったことになるのだろう。けれども、ぼくは……。

――幸せで、平和な年月が流れた。やがてケインとマーリナの間に、王子が誕生。ア

148



148●ぼくは故郷と王位継承権を捨て，マーリナとの愛を選んだ。今日からぼくは，ライアの民なのだ……！

インと名づけられた。
これは、ケインとマーリナの息子、アイン・ル・シールの物語である！　⇩116へ

149

だが洞窟内にモンスターがひそんでいた。チャム7匹という大群だ。動きがのろいとはいえ、これだけの数が相手となるとちょっと苦労する。ミューとの共同戦線により、なんとか勝利したものの、あちこちに傷を負ってしまう（HPマイナス4）。
こうした苦労ののち、やっと洞窟の外へ出る。そこは見渡す限りの砂漠の世界。
「西と南にかすかな機械反応が感じられます……」
ミューが確信に満ちた声で言う。西を見ても、南を見ても、ぼくには何も見えない。しかしミューを信じて、行くしかないだろう。さて、どちらにむかう？

●西へ……………⇩102へ　●南へ……………⇩54へ

150

南へ向かう道は途中で西に向きを変え、さらに進むと、今度は北へ折れている。そのまま、まっすぐ北上していく。　⇩202へ

151

砂漠の世界は、強いモンスターがたくさん出ると言う。ぼくは、ナイフを売って、兵士の剣を買うことにした。ナイフよりもずっと強力だ。ほかにも必要なものを買い、装備を整えたぼくは、砦跡に向かった。

⇩109へ

152

シーレンのショットガンが火を吹いた。ラポラの1匹が砕け散り、ウラルの片腕が作動不能になった。すかさず繰りだしたぼくの剣は硬い装甲を貫いてウラルに止めを刺し、ミユーのフォイエがラポラを1匹を燃え上がらせた。1匹だけ残ったラポラが恐れをなして逃げていく後ろ姿を見送り、ぼくらは角を南へ曲がって進んだ。

⇩253へ

153

強いヤツから葬る！　これは鉄則だ。ぼくはモルモスに突進した。それを見てとったモルモスはフォイエのテクニックを炸裂させた！　紅蓮の炎がふきだす。しかしぼくはこれをかろうじてかわした。その勢いで、ヤツの胸に剣を突き立てる。そして、返す剣で、ラシーラを！　みごとラシーラの首が飛ぶ！

勝った……。安心したとたん、肩に痛みを感じる。モルモスの放った炎が肩口をかすめ

ていたのだ。ガクリと片ひざをつく（HPマイナス3）。
「大丈夫ですか、ケイン様！」
自分の敵を倒し終わったミューが心配して、駆けよってくる。
「ああ、心配ない。かすり傷だ。それより、もうすぐ洞窟だ。そしたら仲間のアンドロイドに会えるぞ」ぼくは痛みをこらえ、にっこり笑ってみせた。

⇩115へ

154

左の通路へ入ったとたん、突然照明が消えた。まっ暗闇の中、重い金属の足音が聞こえる。音が四方の壁に反射して、どの方向から来るのかわからない。
「ミュー！　フォイエだ！」
ミューが上へフォイエを放った。輝かしい炎があたりの闇をふきとばした。
「うわっ!!」**チェック-iはあるか？**

●ある……⇩164へ　●ない……⇩211へ

155

蝶のモンスター、バタフライは、癒しのテクニック、スターフォースを使うことができる。まずこいつらから倒さなければ、国王には勝てない。

「シーレン、グラブトのテクニックだ！」シーレンのグラブトが炸裂すると、バタフライは重力波に押しつぶされ苦悶の叫び声をあげた。今だ！　ぼくは剣をふりかざして襲いかかった。壮絶な戦いののち、バタフライを全滅させた!!（**HPマイナス9**）　⇩113へ

156

ぼくたちは、いっせいにルーンに向かって躍りかかった！　しかし王座にいる男は、避けようともせずに、静かな表情を浮かべている。戦う意志がないのか？

その胸を突き刺そうとした瞬間！　ぼくたちは、斜め横から放たれた鋭い水流に切り裂かれていた（**HPマイナス8**）。

「乱暴なことをして申し訳なかった。だが、どうか父の話を聞いてほしい」

王座の横に立っていた少女が落ち着いた声を出す。この少女が、バータを使ってぼくたちを止めたらしい。　⇩438へ

157

城門はピタリと閉ざされていた。これでは中に入れない。体当たりでもすれば、開くかもしれないが……。

●体当たりする……⇩231へ　**●あきらめて城下町を探る**……⇩207へ

158

ミューとシーレンは、すでに前へとびだしている。2人の間を抜けて、ラポラがぼくに向かって突進する。とっさに突きだした剣がそいつを串刺しに！

だが、ウラルの1体がミューを捕え、腕をもぎ取ろうとしている！　しまった！　剣がラポラに刺さったまま抜けない！　剣を捨てると、小枝を拾い、ウラルにとびつく。ヤツのワキの関節からその枝をさしこみ、ぐいとひねる。と、ヤツは、灰色の煙をあげて動かなくなった。残りのモンスターはシーレンが片づけた。

ミューは腕を痛めたらしい（HPマイナス8）。どうする。引き返すか？

●もどる……**⇩281へ**　**●進む**……**⇩176へ**

159

ミュー、シーレンとともにシール城を脱出したぼくは、サテライトの手がかりを求め、シューソラン王国へと向かった。だが、王国に入ったぼくたちの見たものは、一面の焼け野原となった廃墟だった。シューソラン王国はロボット軍団に滅ぼされてしまったのだ……。呆然としているぼくの耳に、ミューの叫び声が届く。

「アイン様、空を！　シール国の方角に煙が」なんだって！　ぼくは、急いで故郷に引き返した。だが、時すでに遅く、シール国もまた、敵の手にかけられていた。父上、母上

……！　ぼくは、廃墟の中を、生存者を求めて歩き回る。
「誰か。誰かいないのか！」
「アイン様……」
焼け跡の中から、ひとりの兵士が現れた。ひどく傷ついているようだが。

⇩214へ

160

ドラゴニアンの動きは、肉眼ではとらえがたい。一瞬のうちに、ぼくはヤツの放った手裏剣を3本も体に受けてしまう（HPマイナス7）。
「ケイン様！」グランを倒したミューと、シーレンが駆けつける。助かった！　さすがのドラゴニアンも、この2人にかかっては敵ではない。グラブトとアンバランスのテクニックを同時に受け、ヤツの体は瞬く間に四散した！

⇩199へ

161

「ああ、あそこです。20年前と同じ場所だわ」ミューが指さした方向には、女性型のアンドロイドがうつろな瞳でさまよっていた（チェックh）。
「オラキオ様……。わたしのオラキオ様はどこ？」
「20年前と同じだわ。ああやって、ずっと1人でさまよっていたのかしら。かわいそうに」

ミューの瞳に、うっすらと涙が浮かんだ。

⇩184へ

162

突然、少女はナイフを持って襲いかかってきた！　**（HPマイナス7）**

「な、何をする!?」

切りさかれた腕を押さえ、ぼくも剣を抜いた。いったいこの少女は……。

「ほざけ！　この裏切り者！」少女は、油断なく身構えながら口を開いた。

⇩229へ

163

ぎらぎらと照りつける太陽が、足元に濃い影を作る。すさまじい暑さだ。

「アイン様！」暑さでボーッとしていたぼくを、シーレンが突き飛ばした。同時に足元の砂が、ぐぐっと持ち上がる。砂煙の中から、中型ロボットのランキードが現れた！

☆バトル　ランキード＝68　アイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩188へ　**●負けた**……⇩201へ

164

シーレンがぼくたちにカノンの砲口を向けて立っていた！　その指が引き金を引く!!



164●シーレンのカノンが火を吹いた！　ぼくたちに襲いかかろうとしていたランキードは，バラバラになって吹っ飛んだ。

「伏せろ!!」ぼくが叫ぶと同時に、砲弾が頭上をかすめ、髪がチリチリ音をたてて焦げた。
ふり返ると、今、まさにぼくらに襲いかかろうとしたランキードが、胴体を吹き飛ばされ、くずれ折れるところだった。あぶないところだった。先を急ごう。

⇩31へ

165

ぼくたち3人の反応は早かった。油断さえしてなければ、こんなヤツら、ぼくたちの敵ではないのだ。火炎、剣のひらめき、そして機械たちの断末魔の叫び。数分後には、ぼくたちは敵の残がいをあとに残し、また道をもどっていった。

⇩172へ

166

砂地に足をとられ、思うように動けない。おまけに、ヤツらの合金製の体は堅く、こちらの攻撃をことごとくはねのける。敵の手から火球！　こいつらテクニックも使うのか！
（HPマイナス7）。
それでも、シーレンのグラブトのテクニックとミューのアンバランスで、なんとか敵を撃破した。しかし、こちらの被害も大きい。

⇩299へ

167

すぐにリークの城へと向かう。しかし、その途中で、敵の集団と出会ってしまった！

☆バトル　メタルテイル、スターアイ＝90　シーン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩215へ

●負けた……⇩336へ

168

シーレンだ！　ぼくらは急いで彼のそばに駆けつけた。

シーレンは精悍なボディを誇る、男性型のアンドロイドだった。彼はぼくを認めるなり、静かにに近づいてきた。

「オラキオの一族の方ですね……」ぼくは黙ってうなずいた。

「私はシーレンタイプ386システム。私はオラキオの一族に仕えるようにプログラムされています。ご命令に従います」

シーレンはミューと違って、感情をいっさいもたないタイプのアンドロイドだった。しかし戦闘力は、その分ミューよりも格段に上のようである。

ともかく心強い味方ができたことには変わらない（**シーレン仲間に。HPプラス10**）。

「さあ、シーレン、ミュー、地上をめざして出発だ！」

⇩106へ

169

ヒンヤリした通路を進んでいくと、T字路に出た。

●南へ……………⇩128へ　●西へ……………⇩209へ
●東へ……………⇩172へ

170

もうしばらく町の中を歩いてみる。
「痛い！」何かが、頭に当たった。石だ……。
石は、子供の一人がぼくに投げたものだった。なるほど、ここではぼくこそが邪悪なる悪魔の民なのだ（HPマイナス1）。

●もうしばらく町を歩く……⇩207へ　●城へ行く……………⇩157へ

171

ぼくらは通路を進んだ。ん……？　薄闇の中に、男が立っている。いったい誰だ？
「久しぶりだなケインくん。サファイア泥棒のライルだよ……」
まさしくライル。でもどうしてここに……。
「氷に閉ざされたおれの世界を救うために、旅をしてきたんだが、やっと見つけたこの

気象システムは、おれには動かせずに困っていたんだ」

とても困っているとは思えぬ陽気な口調でライルは言った。

「どうやら君は、シーレンタイプのアンドロイドを見つけたようだな。頼む、そいつで氷に閉ざされたおれの世界を救ってくれ。かわりにおれは、君と君の子孫のために命をかけて戦うことを誓おう！」

狂った気象をもどすのは、ぼくの目的でもある。喜んで力を貸すことにした。

こうしてライルもぼくらの一行に加わった（**ライル仲間に。HPプラス10**）。

⇩**218へ**

172

通路を進んでいくと、T字路に出た。

●**北へ**……⇩**285へ**

●**東へ**……⇩**239へ**

●**西へ**……⇩**169へ**

173

傷ついたぼくの肩に、さらにヤツの牙が！（**HPマイナス6**）

だめだ。かなわない！ 逃げよう。

⇩**213へ**

174

ぼくらはさらに奮戦し、モンスターどもをしりぞけた。ラチープコックにバータをくらったものの、ぼくはまだまだ元気だ！（ＨＰマイナス５）

⇩146へ

175

目的の『力のトパーズ』はリークにあるんだ。寄り道はしないで、まっすぐ行こう。

⇩226へ

176

そこから先の旅は地獄のような道のりだった。倒しても倒しても、次から次に敵が現れるのだ。ぼくたち３人はもうクタクタだった（ＨＰマイナス７）。ミューが言った。
「アイン様。もどった方がよろしいのでは？」

●もどる……………⇩281へ
●進む……………⇩230へ

177

ぼくは剣をきらめかせて、モンスターの中に突っこんだ。だが視界のよく効かない情況での、このふるまいは、少々無謀であった。わけのわからないうちに、右肩に傷を負

ってしまう!!（HPマイナス6）

「テクニックを使うんだ！」ライルが叫んだ！

⇩133へ

178

『伝説の武器』のうち、3つまでが手に入った。残るは『ミューンクロー』と『オラキオの剣』だけだ。さて、どっちを先に探すべきか。

●ミューンクロー……⇩395へ ●オラキオの剣……⇩338へ

179

注射ロボットのディバイド、クモ型ロボットの中では最強のレッドオクトレグ、そして、リン。今までに戦ったどの相手よりも手ごわい相手だ。勝てるのか!?

ディバイドが注射針をきらめかせながら向かってきた。それを、シーレンが遮り、針を叩き折る！ ランとミューが、レッドオクトレグに向かってテクニックを使う！ みんながロボットと戦っている間、ぼくはリンと相対していた。

リンのナイフが、ぼくに向かって突きだされる！ 紙一重でそれをかわし、剣の柄でリンの手を打つ。派手な音を立てて、リンの手からナイフが落ちた。

「ちっ！」リンは、もう一方の手に持っていたナイフを、すばやく右手に持ちかえた。オ

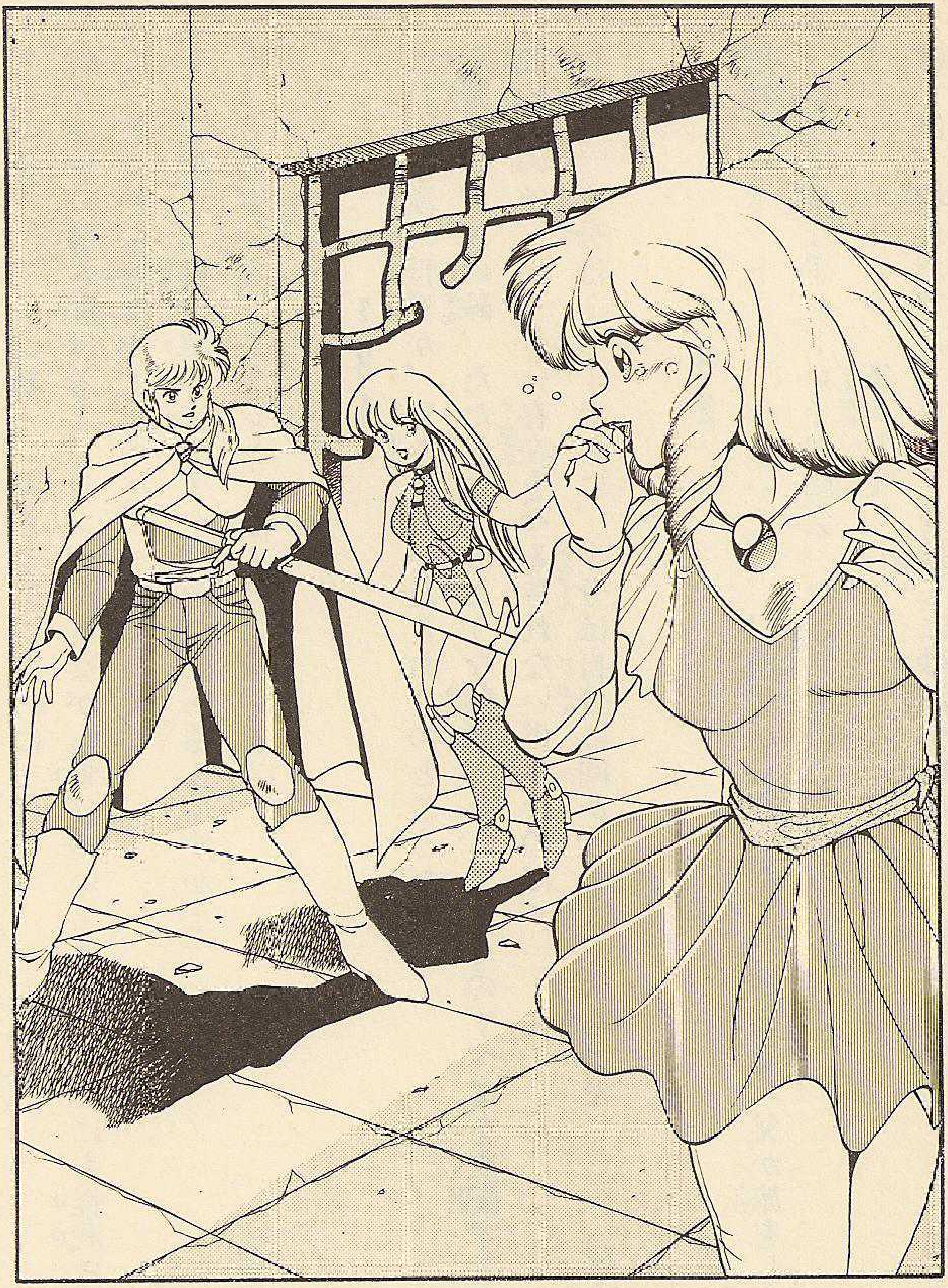
ラキオの民である彼女は、テクニックが使えない。武器さえなんとかなれば、勝てる！
しかし、ナイフが一本になっても、リンの攻撃はおとろえるどころか、激しさを増していく。素早い動きでぼくの剣をくぐり、スキを見て切りかかる！　だが、それこそぼくの待ち望んでいたことだった。ぼくは剣でナイフをはね上げ、同時にリンの足を払った。
たまらず床に倒れるリン。遠くで、はねとばされたナイフの落ちる音が聞こえた。
気がつくと残りのロボット軍団も、すでに片づいていた。
「わたしの負けだ……」唇を噛みしめて、リンが呟く。
「『力のトパーズ』は、くれてやる。だが、おまえたちのやったことの結末を、わたしも見届けさせてもらうぞ！」**（リン仲間に。ＨＰプラス10）**

⇩196へ

180

さすがに、最後の守りを任されているだけあって、ヤツらは強かった。長い戦いのすえ、ようやく全部を倒した時には、ぼくたちもかなりの傷を負っていた**（ＨＰマイナス5）**。
「アイン様！」澄んだ声が、迷宮に響いた。
通路の奥……鉄格子の向こうに、ランがいた。長い巻き毛を揺らして、宝石のような瞳には、いっぱいに涙をためて。ランには、子供のときに会ったきりだったのだが……こんなに、美しい少女だっただろうか。

180



180●「アイン様！」牢の扉を開けるとランが目に涙をいっぱいためて飛びついてきた。

「アイン様！　アイン様！　わたくしのために……」
ぼくが牢の扉を開けると、ランが泣きながら飛びついてきた。どこにも怪我はないようだし、どうやら無事でよかった。
「アイン様？　顔が真っ赤ですが、熱でもあるんですか？」
「ううるさいな、シーレン。なんでもないよっ」

⇩399へ

181

「これが砂漠の世界か。父上に聞いたとおりのところだ」
見渡すかぎりの砂、たたきつけるような熱風、そして、そのすべてを支配する太陽。その他のものは、いっさい存在をゆるされない世界なのだ。
「行くぞ」半分はミューたちに、半分は自分に向かってぼくは言った

⇩112へ

182

壊れたロボット……。そういえば、以前父から聞いたことがある。父が旅をしていたとき、砂漠で変なアンドロイドに会ったと。そのことだろうか。
「ミュー、シーレン、案内してくれ」
ぼくは、壊れたアンドロイドを捜しに砂漠へ向かった。

⇩161へ

183

まず国王からだ！　ぼくは電光石火の早業で国王に襲いかかった。剣と杖が激しくぶつかりあう!!　この国王の腕は並みではない。ぼくはたちまちのうちに攻めこまれ、体の数箇所に打僕傷を負ってしまう（HPマイナス9）。

しかし、こちらには若さがある。スタミナでは圧倒的に上だ！　案の定、しばらく切り結ぶうちに、国王の肩があがってくる。

「今だ！」ぼくは必殺の一撃を王にみまった！

ザクッ！　確かな手応えあり。国王の肩ぐちから、激しい勢いで血が吹き出る！

だが、国王は倒れはしなかった。それどころか、見る間に肩の傷がふさがっていく！

「スターフォースか！」

⇩155へ

184

「壊れたアンドロイド相手では、何の情報も得られません。疲れただけでしたね」

シーレンが、無表情に言った。ミューがキッとにらんだが、シーレンはまったく気にしない。感情を持っているミューと、持っていないシーレンの違いなのだろうか。

「ミュー、シーレン、帰ろう」

ぼくたちは、ハサタカにもどることにした（HPマイナス1）。

⇩205へ

185

ぼくらは早朝、タワーめざして出発した。場所はもうわかっているので、簡単にたどりつく。さあ、中にはいるぞ。

⇩21へ

186

まもなく十字路に出た。さて、どっちへ行こうか。

●**北へ**……⇩429へ　●**南へ**……⇩273へ
●**東へ**……⇩383へ　●**西へ**……⇩478へ

187

地下室に降りると、そこから3本の地下道が伸びていた。どの道を選ぶ？

●**右へ**……⇩250へ　●**左へ**……⇩270へ
●**真ん中へ**……⇩284へ

188

音もなく、ランキードが跳んだ！　ヤツの牙が、ぼくの喉を狙う!!
体をひねってそれをかわしざま、剣でヤツの体をなぎはらう。剣先が閃光を描く。ギ

ャウンッ、と悲鳴をあげて、ヤツは地面に落下。やったぞ！

⇩254へ

189

「ところでサテライトシステムってのは？」ぼくはリナに尋ねた？
「さあ……わたしにもよくわかってないんです」
「おれも知らない」ライルが言った。仕方がない。雲をつかむような話だが、とにかく探しに行こう。だが、世界中の誰も、サテライトシステムに関して情報を持っている者はいなかった。そんなわけで、ぼくらは未だサテライトシステムを見つけだすことができずにいる。はたして、この旅に終わりは来るのであろうか……。

END

190

「いくぞケイン！」ライルがザンのテクニックを放った！　カマイタチがまきおこり、ぼくの体をずたずたに裂いた（HPマイナス15）。

⇩232へ

191

「なるほど、これはきっと、何人もの人の手が、ここに触れたからにちがいない」
そっと親指を竜の目に押しつけた。すると、そのまま、竜の目が奥へ引っこんだ。同時に目の前の壁が、ジワジワと上へ上がっていく……。と、壁の向こうにいたのは……、
「敵だ!!」
ディバイドの毒がぼくたちを襲った（HPマイナス4）。くそっ、ワナだったのか！

☆バトル　ディバイド×3、ハンドウォーカー×3＝75　アイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩165へ　**●負けた……⇩271へ**

192

でも、今はわずかな手がかりでも欲しいときだ。もう少し頑張ってみることにしよう。
……と思ったとたんに、また敵だ！　ふいをくらって、肩に傷を負ってしまった。ここは、やはりもどるべきなのか？（HPマイナス4）。

●戦う……⇩304へ　**●ハサタカへ逃げ帰る……⇩255へ**

193

「こしゃくな小僧め！」

国王の杖がぼくを襲った！　もちろん、ぼくもむざむざやられはしない。剣と杖が激しくぶつかりあい、ぼくらは十数分にわたって、切り結んだ。だが最終的には、ぼくの剣技がまさった。国王はぼくに、杖をはねとばされ、いさぎよく降伏した。
「勝った……」そのとき……。
「ケイン様！」
奥の間から飛びだしてきた一人の女の子！　マーリナだ!!
とびついてきた彼女を、ぼくはしっかりと抱きしめた。
「マーリナ、もう放さない！」

⇩148へ

194

シーレンがザンのテクニックを放つ！　真空がまきおこり、モンスターどもをなで切りにした!!　今だ！　ぼくらはそれぞれの武器を手に、モンスター軍団におどりかかった。剣がきらめき、杖が舞い、クローが引き裂く！　ぼくたちは阿修羅のごとく戦い、モンスターどもを退けた!!
「ケイン様、大丈夫ですか！」リナがぼくのもとに駆けつける。ぼくは、戦いのさなか、ラチープコックのバータをくらい、負傷していたのだ（**HPマイナス8**）。
「さがって、新手が来た！」

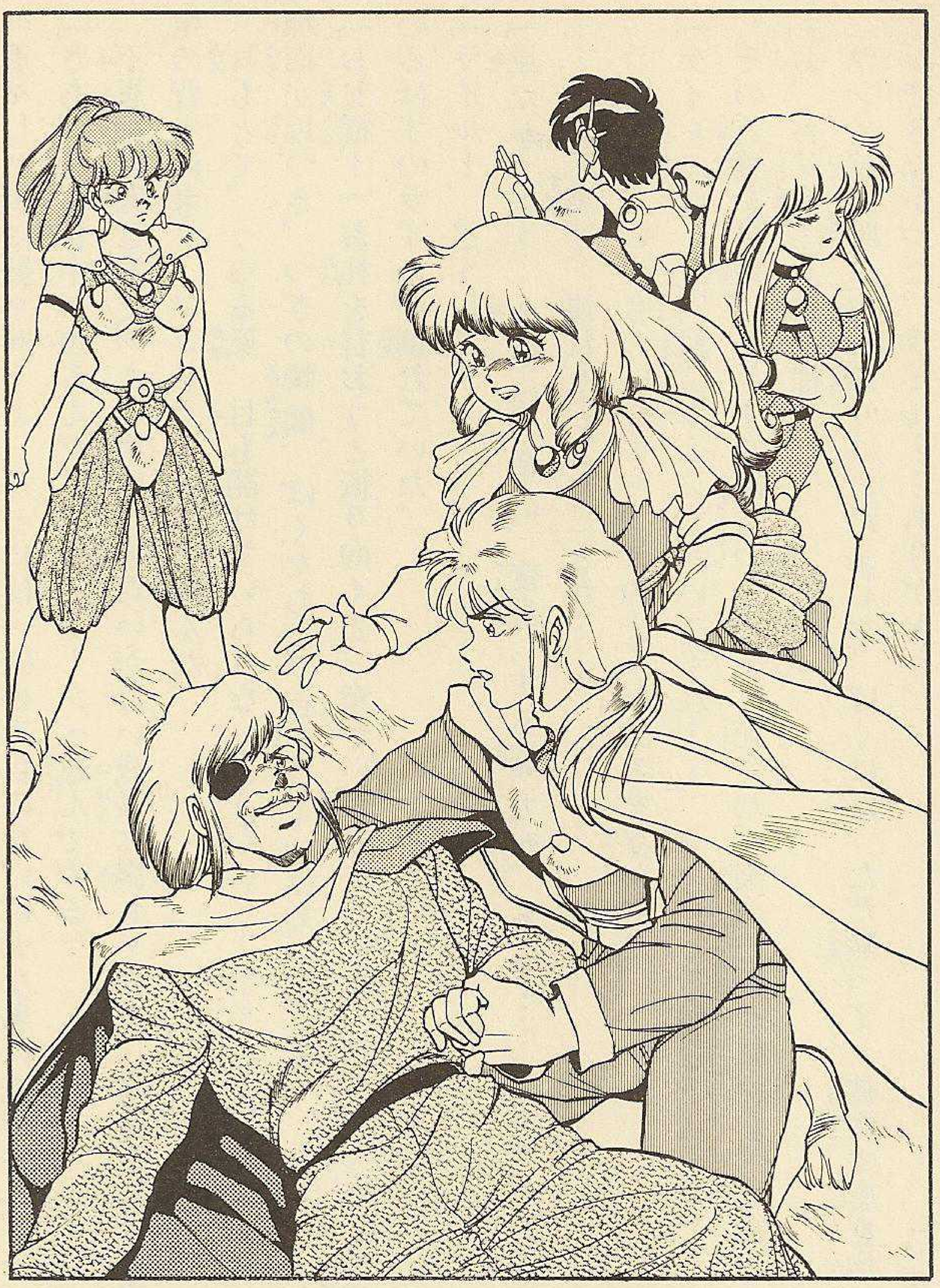
手当てをしようとするリナを押し退け、ぼくは再び剣をかまえた。
新手はモルモスにジェリーが3匹だ！
☆バトル　モルモス、ジェリー×3＝55　ケイン＝HP＋Dで戦います。
●勝った……⇩224へ　●負けた……⇩316へ

195

なんとかハサタカにたどりついた。さっそく宿屋に泊まり、休息をとる。明日はいよいよ、タワーめざして出発だ！（HPプラス10）**チェックdはあるか？**
●ある……⇩185へ　●ない……⇩144へ

196

『力のトパーズ』を手にしたぼくたちは、リンを仲間に入れ、いよいよフロトラーンへと向かうことにした。そこへいけば、サテライトへ行く方法がわかるのだ。
もう一度『竜の涙』で東の世界に渡る。だがなんと、フロトラーンは島に立つ城だった。目の前には広大な海。対岸に渡るための手段がないぼくたちは、途方にくれてしまった。
「待っていたぞ、おまえたち」



196●ぼくたちをフロトラーンへ運んでくれた黒い竜の正体は，ライルだったのだ！　そのために彼は力つきて……。

重々しい声に振り向くと、そこには一匹の片目のない巨大な黒い竜がいた。
「さあ、俺の背中に乗るんだ。フロトラーンへ運んでやる」
不思議と聞き覚えのある声は、逆らいがたい威厳に満ちていた。ぼくたちは、素直に黒竜の背中に乗り、フロトラーンへと飛んだ。
耳もとで、うなる風。目も開けていられないようなスピードで、竜が飛ぶ。グングンと地面が近づき、つぎの瞬間、ぼくたちはフロトラーンに着いていた。
「お父様！」お礼を言おうと振り向くと、竜がいたところには、何と傷ついて砂漠の国にいるはずのライルが倒れていた。
「ライル！　どうして……」
「見たか……？　俺には、竜に、変身する能力が、ある……。かつて、マーリナを……この、姿で、連れもどしたことが……」
ライルは、いつものいたずらっこのような笑みを浮かべた。
「ケインには……内緒に……してておいてくれ……。ランを……頼む………」
その言葉を最後に、ライルは力つきて……死んだ。笑みを微かに浮かべたまま……。
「お、お父様……お父様!!」
ランの泣き叫ぶ声が辺りにこだました。ぼくには、ただ黙って、彼女の肩を抱いてやるしかできなかった。ライル……ありがとう。

⇩278へ

197

どの世界へ行こうか?

●北西のリークの世界……⇩135へ

●北東のシールがあった世界…⇩206へ

●西のグランディレクタの世界……⇩384へ

198

ビットは長い腕を使って、ぼくたちを寄せつけず、すきをついてはラポラがテクニックで攻撃してくる。ぼくたちは、何とかそれを防ぐだけで精一杯。しかし、それにも限界がある。ついにラポラのフォイエを、ミューがくらってしまった(HPマイナス10)。

「だめだ! ここはいったん逃げよう!」

傷ついたミューをかばいつつ、必死に退却した。やはり適当に歩いていても、ランが見つかるわけはない。レンソルの城下町にもどって、情報収集だ。 ⇩124へ

199

通路をさらに進むと、広い空間に出た。そこには、巨大な機械が設置されている。

「これが、気象コントロールシステムなのか?」ぼくはシーレンに尋ねた。

「いいえ、これはサテライトシステムです」

「サテライトシステム？」
「はい。ふたつの月を接近させる装置です」
本当にそんなことができるなら、すごい機械だ。しかし今は別に必要とされていない。
ぼくらはさらに奥へ進んだ（**チェックe**）。

⇩171へ

200

敵を一掃して、しばらく歩くと草原の向こうに何かが見えてきた。遠くてはっきりしないけど、村のように見える。もしかして……ぼくたちは、足を早めた。

⇩410へ

201

ヤツは音もなく、飛びかかってきた！
「つっ……」舞い上がる砂塵がぼくの目に入り、一瞬視界がきかなくなる。そのスキをついて、ヤツがぼくの右足にかみつく！（**HPマイナス5**）
くそ、ランキードごときに負けられるか！
ぼくは、右足にかみついているヤツに剣を振り下ろす。確かな手ごたえがして、そいつは地面に叩きつけられ、やがて動かなくなった。

⇩254へ

202

道はここでT字路になっている。

●北へ……⇩227へ
●南へ……⇩46へ
●西へ……⇩346へ

203

「いくぞケイン！」
ライルの杖がぼくを襲う！　本気だ！　ぼくは危うくその一撃を逃れた。
「まだまだ！」息をもつかさぬライルの連続技。とうとうかわしきれずに、強烈な一撃を左肩に受けてしまう（**ＨＰマイナス８**）。

⇩232へ

204

通路を西に向かって進んでいく。やがて、先の方が段々明るくなってきた。どうやら終点らしい。ぼくたちは、明かりに向かっていっせいに駆けだした。
突然、目の前が開けた。闇に慣れた目に、まぶしいほどの光が押し寄せる。ようやく、目が開けられるようになって、辺りを見まわすと、そこには今までの石壁とはまったく様子を違えていた。壁という壁を埋めつくす、精巧な機械。足元には透明な床が伸び、その

下にもいろいろな機械があるのが見える。そう、ここは、世界と世界をつなぐ洞窟にそっくりな造りをしていた。
ただひとつ違うのは、透明な床が伸びるその先に、何か……船のようなものがある、ということだ。船の横にはとても年をとった老人が立っていた。
「こんなところにライアの民が……。だが、おまえたちでは、サテライトには行けんぞ」
老人は、ぼくたちの前に立ちふさがった。

●押しのけて進む……………⇩400へ
●様子を見る…………………⇩251へ

205

ハサタカの宿屋で体を休めた（**HPプラス10**）。さて、これからどうしよう？

●リークへ……………………⇩319へ
●西の洞窟へ…………………⇩351へ

206

父の生まれた世界にやってきた。
しかし、どこの城や町も廃墟になっていて、手がかりはなかった。ふいに、サテライトの最期が思いだされ、胸が痛くなる。
城を調べていたときに、壁が崩れ、背中に打撲をうけた（**HPマイナス10**）。たぶん、

ここにはもう何もないと思うが……。

●まだ調べる……………………⇩361へ　●やめる……………………⇩258へ

207

オラキオの民と、ライアの民はなぜこんなにも憎みあっているのだろう……。
そんなことを考えながら歩いていると、噴水のある広場に出た。
アゴエの兵士の語っていた、あの噴水か？
さっそく近づいて調べてみる。すると、水の中に秘密の抜け道があるのを発見した。
「マーリナをさらった怪物は、ここから出てきたんだ！」
もはや迷うことはない。ぼくらは、この秘密の通路に侵入した。

⇩110へ

208

もうだめだ。そう思った瞬間、目の前がまばゆい白光におおわれた。
「ギィイイイ……」びっくりするほど人間的な声を上げ、敵のロボットたちが燃え上がった。高熱が空気を焼いたイオン臭が鼻をつく。ミューとシーレンがフォイエを使ったのだ。
「アイン様、戦いは常に冷静でなければ」

「ロボットよりも冷静に、ってわけかい、ミュー？」
ぼくの負けおしみに、ミューの閉じられることのない瞳は何も答えようとしなかった。
すでに歩きはじめていたシーレンが、ぼくらを振り返っていった。
「アイン様、出口が見えます」

⇩**181へ**

209

西へ向かうと、道は南へ折れ曲がっていた。その角をまがったとたん、まっ赤な炎のかたまりがぼくに襲いかかった。
「あぶない！」
ミューの手がぼくの腕をとり、体を引きもどした。炎はぼくの顔をかすめ、後ろの壁にくだけちった。
「何者だ！」
メカヒヨコ！　ラポラだ。３体もいる。その後ろにいるのはウラル！

☆バトル　ウラル、ラポラ×3＝70　アイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩152へ　●負けた……⇩268へ

210

ぼくらは気象コントロールタワーに侵入した。一度、行ったことがある場所だけに、迷わずサテライトシステムにたどりつく。**チェックfはあるか？**

●ある……⇩279へ
●ない……⇩223へ

211

目の前にランキードが立っていた！
見るが早いか、ミューのクローがヤツの感覚センサーを狙った。
「キャア！」
ランキードの腕の一振りが、ミューをはじきとばした（HPマイナス4）。
☆バトル　ランキード＝69　アイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……⇩365へ
●負けた……⇩274へ

212

北へと進んで行くと、しばらくして通路は行き止まりに。突き当たりの壁の前には、宝箱が置いてある。開けると、中には『怒りの剣』が入っていた。
「へえ、なかなかいいものが手に入ったね」



212●剣をかざすと，ズシリとした重みを感じた。『怒りの剣』……かなりの破壊力が期待できそうだ。

ぼくの手にある剣をながめ、リンが半分独り言のように呟いた。確かに、冴えた輝きを持つ刀身といい、ずしりとくる重みといい、かなりの破壊力を期待できそうだ。ぼくは、レーザーナイフを腰からはずし、この剣を装備することにした（チェックn）。
さて、十字路にもどろう。

⇩130へ

213

しばらく進むと、通路は行き止まりになってしまった。
「しょうがない。引き返そう」
ぼくたちは入り口までもどり、右と左にわかれた道を、こんどは左の方へ進んでいった。

⇩154へ

214

「シールもシューソランも滅んでしまいました……。王様、お妃様をはじめ、国民はみんな砂漠の世界に脱出しましたが、私は、どうしても家族の墓のあるこの町を捨てることができなかったのです」
兵士は、傷にあえぎつつ、ぼくにこれだけのことを伝えると、ガクリとうなだれた。
ロボット軍団め！　よくも、よくもぼくの故郷を。

ここから一番近いライアの民の国と言えば、シューソラン王国の南にあるアゴエ国だ。

●砂漠の国へいく……⇩282へ
●アゴエのロボット軍団と戦う⇩256へ

215

バータ！　ぼくはテクニックを使った！　狙い違わず、水は剣となって、大型恐竜メタルテイルの喉と、星形ヒトデ、スターアイの中心に突き刺さった。
ライアの民をモンスターが襲うなんて……この世界で、何かが起きているに違いない。
ぼくは、足を早め、リークの城下町へと入った。

⇩375へ

216

「こしゃくな！」国王は、ザンのテクニックを放った！　まずい、避けきれない!!
真空の刃が、ぼくの体をズタズタに切り裂いた（**HPマイナス15**）。
「とどめを刺してくれる！」
杖をふりかざして、国王が迫り来る！

☆バトル　国王＝40　ケイン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩193へ
●負けた……⇩266へ

217

通路を進むと、今度はT字路に出た。さて、どこにいこうか？

●北へ……⇩397へ
●南へ……⇩368へ
●西へ……⇩32へ

218

「コントロールシステムはこっちだ！」
タワー内部に詳しいライルが先頭に立って、ぼくらを導いた。だがすんなりは行かせてもらえない。モンスターがぼくらの行く手をさえぎったのだ。
ラルモスが2匹に、モルモスが2匹。こちらも4人だ。数の上ではちょうどいい。

☆バトル　ラルモス×2、モルモス×2＝60　ケイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……⇩108へ
●負けた……⇩119へ

219

パイロッタ？　いったいどこにある町（国かもしれないけど）なんだろう。
ライアを仲間にし、砂漠の世界にもどってきたぼくたちは、老人に聞いた『パイロッタ』への手がかりをつかむため、あらゆる世界を回ることにした。

⇩197へ

220

「シーレン、ザンのテクニックだ！」

シーレンがテクニックをふるうと、カマイタチがまきおこり、モンスターどもをなぎはらった!!　この衝撃に耐えきれず、ジェリーはすべて消滅した！

今がチャンスだ！　ぼくとライルはそれぞれの武器を振りかざし、ケイブウォルフに襲いかかった。ねらいは、下半身についた、ヤツの頭だ！

だがヤツの牙による攻勢は鋭い。ぼくはかろうじて剣でかわしつつ、反撃の機会を待った（HPマイナス5）。

すでにチャムを倒したミューが、右手のクローをきらめかせて、戦いに参入する！　ケイブウォルフの注意がミューに流れた。今だ！　剣を一閃させる。必殺の一撃はねらいをたがわず、ヤツの首を両断した!!

こうして、モンスターどもを完全にたいらげたぼくたちは、再びライルを先頭に、地下道を急いだ。そして行き着いたところは……。

そこは、多数の兵士が警護する、シューソラン国王の玉座の間であった。　⇩245へ

221

「ライルはもう……。元気そうに振る舞ってはいるけど……」

母が誰にも聞かれないように、ぼくに打ち明けてくれた。まさか、ライルが……。
ぼくは、ランの救出のため、東の世界へと続く洞窟へと急いだ。東へ、東へと進んで行くと、やがて砂漠の国の果てに、洞窟の入り口が見えてきた。

⇩143へ

222

敵は手強かった。ぼくらはけんめいに戦ったが、だが、ようやく敵をたおしたときには3人とも傷だらけになっていた（**マイナス12**）。このまま進んで大丈夫かな……。

⇩176へ

223

サテライトシステムを作動させるのは、シーレンの役目だ。
「システムを作動させるキーが必要です」
コントロールパネルにむかったシーレンが報告する。
「月の石と、月の涙のことだろう」ぼくは、2つの宝石をシーレンに手渡した。
「そのくぼみにはめこむんじゃないか？　ちょうどいいぐらいの大きさだが」
コントロールパネルを指差してライルが言う。シーレンは言われたとおり、宝石をくぼみにはめこんだ。月の涙、月の石といった順番で……。

その瞬間、サテライトシステムは、狂ったようにランプが点滅し、突然不快な雑音をたてたかと思うと、また静かになった。
「操作方法を間違えたようです。システムは崩壊しました……」
シーレンがいつもの抑揚のない声で報告した。

END

224

ぼくは剣をふりあげて、モルモスに襲いかかった。わが剣の鋭さに恐れを抱いたモルモスは、苦しまぎれにフォイエを放つ！
これがぼくを直撃した。紅蓮の炎がわが身をつつむ！（HPマイナス8）
だが炎は一瞬のうちに消滅した。
「グズグズするな！　モルモスを倒せ!!」
ライルだ！　ライルがバータのテクニックの応用で、炎を水で消し飛ばしたのだ！
ぼくはライルに感謝しつつ、剣をふるって、モルモスを葬った。　⇩146へ

225

城の中を捜したが、誰もいる気配がない。やっぱり、ロボットに城を乗っ取られたとい

うのは、本当なんだな。さっきのところから、地下へ行こう。

⇩330へ

226

リークの城下町。なぜか人気がなく、とても静かだ。戦争が始まったので、みんなどこかへ行ってしまったのだろうか……。

リークの城門は固く閉ざされていて、どうやっても開きそうになかった。

困ったな……どうしよう。そのとき、ぼくは昔聞いた父の話を思いだした。そうだ。確か城下町のテクニックマスターの店から、地下道を抜けて城の中に入れたはずだ。ぼくは、人のいない静かな町を、マスターの店へと急いだ。

⇩307へ

227

「くそっ、行き止まりだ！」進んできた道は、唐突に黒大理石の壁でとぎれていた。そこに刻まれた魔物の浮き彫りが、ぼくらをにらみつけている。

「ウッ!!」突然、魔物の口から鋭いナイフが飛びだし、ミューの腕に突きたった！　白い肌に傷が痛々しい。

「だ、大丈夫か、ミュー？」ミューがゆっくりとナイフを抜いた。

「ええ、あまり勢いはありませんでしたから」（HPマイナス3）

そう言ってナイフを彫刻に投げ返す。ナイフは魔物の額に刺さった。

こんな物騒なところ、早く引き返そう。

⇩202へ

228

宇宙船を降りたぼくたちを出迎えたのは、1体の人間型ロボットだった。燃えるような赤い髪の下で、瞳が暗い光をたたえている。その姿は、驚くほどシーレンと似ていた。

「まだライアの民が生き残っていたか。私が送りこんだロボット軍団が、すべてほろぼしたと思ったが」

「な……んだって……？」

ロボットは、非人間的な冷たい微笑を浮かべた。

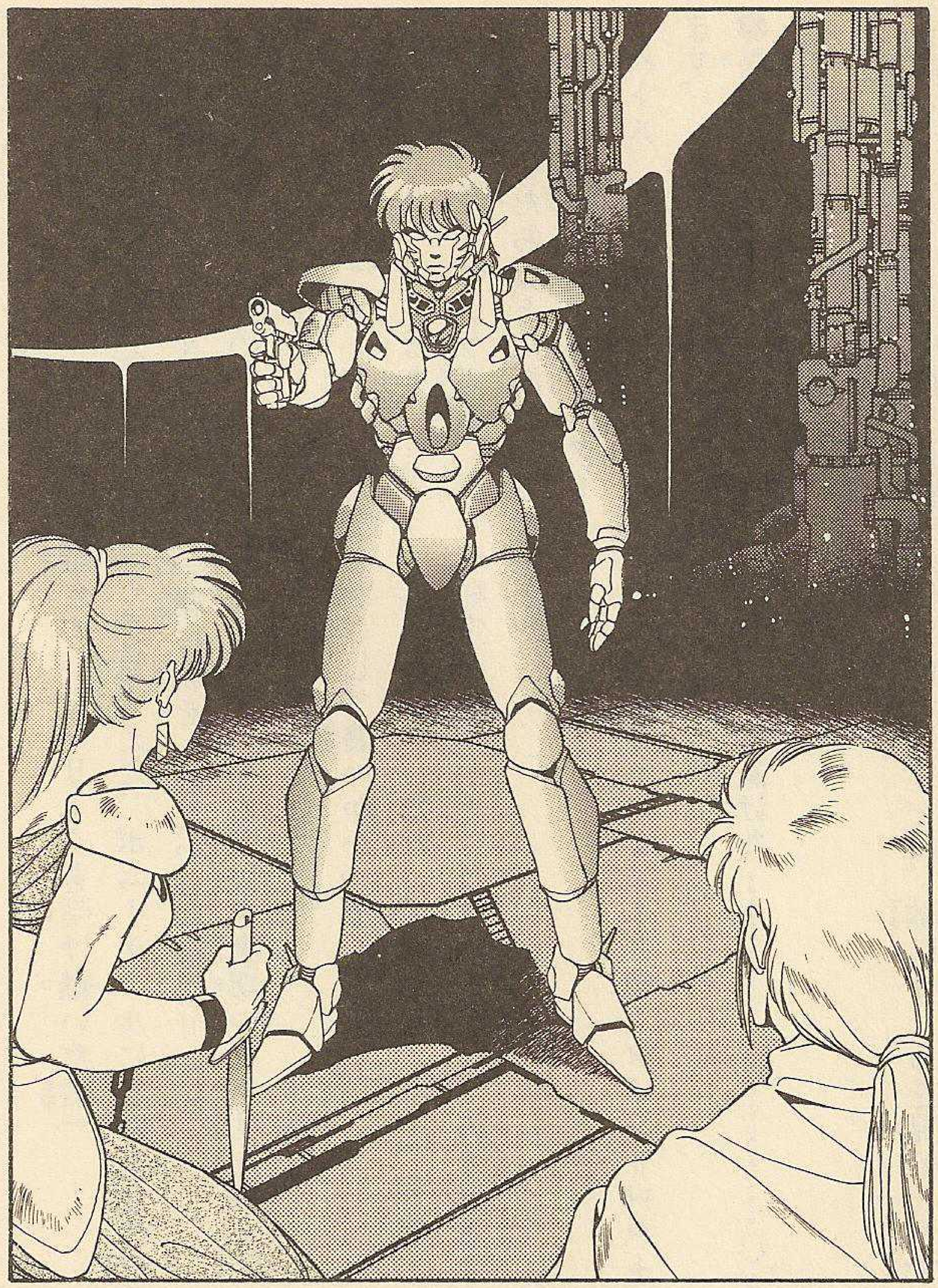
「私は、サイレンタイプのロボット、サイレンTYPE0899。そこにいるシーレンは、私をまねて作られたものだ。千年前、私はアンドロイドのミューンと共にオラキオ様に仕えた。しかし、ライアは不思議な力で、私をサテライトごと吹き飛ばしたのだ！　私は待った！　千年もの間、ライアに復讐する日が来るのを……」

こいつが……、こいつがすべての元凶だったのか！

☆バトル　サイレン、ビーロルーガ×3、ウェザール2×3＝99　アイン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩345へ　●負けた……⇩355へ

228



228●はるかな昔，オラキオとともに戦(たたか)ったロボット，サイレン。
こいつがすべての元凶(げんきょう)だったのか！

229

「わたしはリナの娘、リン！　跡継ぎのいないリークを受け継いだ者」
少女は、怒りに燃えた鋭い目でぼくを見すえた。ポニーテールにした茶色の髪が揺れる。
「リナの娘……？　きみが、父と一緒に旅をしたという、あのリナの？」
「そうだ！　おまえの父は、母を裏切り、オラキオの民を裏切った卑怯者だ!!」
「違う！　父は、母を――マーリナをただ愛しただけだ」
「同じことだ！」リンが、ナイフをかざして襲いかかってくる！
「待ってくれ、ぼくはきみと戦うつもりはない。ただ、『力のトパーズ』を」
「おのれ、我がサテラ王家に伝わる秘宝が狙いか！　これは、かつてのオラキオの要塞の鍵。おまえたちなどに渡せるものか！」
少女の背後から、モンスターどもが現れた！
☆バトル　リン、ディバイド×3、レッドオクトレグ×3＝83　アイン＝HP＋Dで戦います。
●勝った……⇩179へ　●負けた……⇩303へ

230

「ばかなこと言うな。ぼくは勇者ケインの子アインだ。敵にうしろを見せたりできるよう

なわけが……、ミュー！　どうしたんだ！」
ミューが目を閉じていた！　閉じるはずのない目を。
ミューはそのまま前のめりに倒れた。金属の焼ける臭いがした（HPマイナス20）。シーレンが、あいかわらず感情のない声で言った。
「アイン様、敵の援軍です」
気がつくと、ぼくらは敵の大軍に、何重にも取り囲まれていた

END

231

ぼくは城門に思いっきり体当たりをぶちかました！　体がバラバラになりそうなほどの衝撃を受け、その場にうずくまる。いててて……（HPマイナス12）。
しかしそれでも城門は開いたようだ。急いで城内に侵入する。

⇩66へ

232

ライルは本気だ……。このままでは殺される!!　ぼくは剣を抜いて身がまえた。

☆バトル　ライル＝49　ケイン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……………⇩264へ　●負けた……………⇩147へ

233

「しっかりアイン様！　シーレン、早く、カノンを使うのよ！」
「距離が近すぎる。危険だ」
「いいから！」シーレンがカノンをぶっぱなした。同時にミューはぼくを抱えて後方へ飛んだ。グワァ――――ン！　耳をつんざく爆音が、たて続けに起こった。やがて、たちこめた煙が消えると、がれきの中にシーレンが何事もなかったように立っていた。
「敵は片づきました。進みましょう」

⇩213へ

234

通路は途中で、L字に曲がっていた。ちょうどそこに差しかかったとき、また敵が出現した！　ムチを持ったふたりの怪人。

☆バトル　ネオマダー、デスマダー＝109　シーンC＋HPで戦います。

●勝った……⇩477へ
●負けた……⇩372へ

235

「このガラクタども！　じゃまをするな！」
怒りにまかせて剣を振りまわす。しかし、あざけるように身をかわす、身軽なロボット

たちには、一撃も与えることができない。突然、強烈な重力波がぼくをふきとばした!!

「うわぁぁぁ――――っ!!」(HPマイナス9)

グラブトを使いやがったな……。地上にたたきつけられながら、ぼくは自分の愚かさを呪った。鉄の悪鬼たちがいっせいにぼくの上に群がった……。

⇩208へ

236

この『アリサ3世』の7つの世界の現在の情勢について、少しでも情報がほしい。ハサタカへ向かおう。いったい、誰が、なぜ、急にサテライトを攻撃してきたんだろうか。砂漠をハサタカへと移動するぼくたちの前に、なんと、ロボットと、モンスターの混成軍が現れた! これは、いったいどうなっているんだ?

☆バトル　フッジーテール、キードスター、モルモス＝91　シーン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……………⇩432へ
●負けた……………⇩342へ

237

チェックcはあるか?

●ある……………⇩182へ
●ない……………⇩247へ

238

タワーを出たぼくらは、洞窟を通って、かつての雪の世界へ到着した。今やあの大吹雪はピタリとやみ、空にはあたたかな太陽が顔をのぞかせている。死にかけていた世界はよみがえり、人々は希望に顔を輝かせている。ライスルの町に到着したぼくらは、世界を救った英雄として、温かい歓待を受けた。

宿屋で一泊したのち（HPプラス10）、町の人たちが手配してくれた船にのって、東の海へ乗りだす。まずはアゴエの国に到着だ。

⇩136へ

239

おっといけない。行き止まりだ。引き返そう。

⇩172へ

240

バン!! 派手な音がして門が開いた。だが、予想に反して、中には誰もいない。ランを捜して城の中を調べまわったぼくは、地下に通じる階段を発見した。

おそらく、ランは地下に閉じこめられているんだろう。ぼくたちは、慎重に地下への階段を降りていった。薄暗い光のなかで、ぼんやりと先が見える。どうやらこの先は十字路になっているらしい。さて、どっちへいこうか。

●北へ……………………⇩169へ　●西へ……………………⇩253へ
●東へ……………………⇩272へ

241

チェックcとhは？

●両方ともある……………⇩265へ　●cだけある……………⇩373へ
●hだけある……………⇩464へ　●両方ともない…………⇩430へ

242

さいわい、シーレンの傷はたいしたことはなかった。もどろうとしたぼくは、ふと、通路の隅にひっそりと置いてある宝箱に気がついた。もしかしてさっきのワナは、これを隠すために……。開けてみると、中身は体力回復薬、トリメイトだった。さっそく服用して（**チェックg**。**HPプラス10**）。さて、T字路にもどろう。⇩457へ

243

ぼくをめがけてのばされるロボットの鉄の腕！　すばやく首に巻きつき、グイグイと喉を締めあげてくる。く、苦しい……。ぼくの意識は、しだいに暗闇へと引きこまれ――。

「やめなさい！　その方たちこそ、我らがずっと待っていたお方ではないか」

男の声がしたかと思うと、急に喉が楽になった。とはいえ、しばらくはゴホゴホと咳が止まらない。このぶんだと、喉にはくっきりとあざが残っていることだろう。

「すみませんでした……。お詫びのしるしに」そういって、男はぼくに体力回復の薬をくれた（HPプラス10）。あれから、ぼくの咳がおさまるのを待って、男は都市の中に招き入れてくれたのだ。男のうしろには、同じようなローブを着た男たちがいる。

「ここは、空中都市クランクレア。時を受け継ぎ、『邪悪なる力』に立ち向かわれる方たちを長い間お待ちしていました」静かに、男はしゃべり始めた。

「『邪悪なる力』は、千年に一度蘇る、この世界を破滅させる邪神……。そして、ちょうど今がその時に当たるのです。その兆しは、すでに世界中に現れています。――あなたがたが『邪悪な力』に打ち勝つためには、『最強の武器』が必要です。その武器には、特別な名前がついているのですが……あまりに強力なため、その名前は封印されてしまいました。特別な名前……『武器にして武器にあらず』という意味の古代アルゴル語は、あなたの祖父がマーリナと共に暮らした世界の、『賢者の島』に封印されています。特別な名前を我らが知れば、その名前の力で『伝説の武器』を『最強の武器』とすることが可能なのですが……」

「『伝説の武器』？」男は、ニッコリと微笑んだ。

「すでに、あなたがたは、ふたつ持ってらっしゃいます。『ライアの弓』と『ルーンスライサー』を……。『伝説の武器』とは、千年前の英雄たちが、思いをこめて使っていたもの。『オラキオの剣』『ミューンクロー』『サイレンショット』、そして『ライアの弓』と『ルーンスライサー』です。この5つを集め、特別な名前を手にいれたら、もう一度ここにいらして下さい。その時『伝説の武器』は『最強の武器』になるでしょう……」

真実の敵を倒すための、唯一の武器——。ならば、集めるしかない！ ⇩428へ

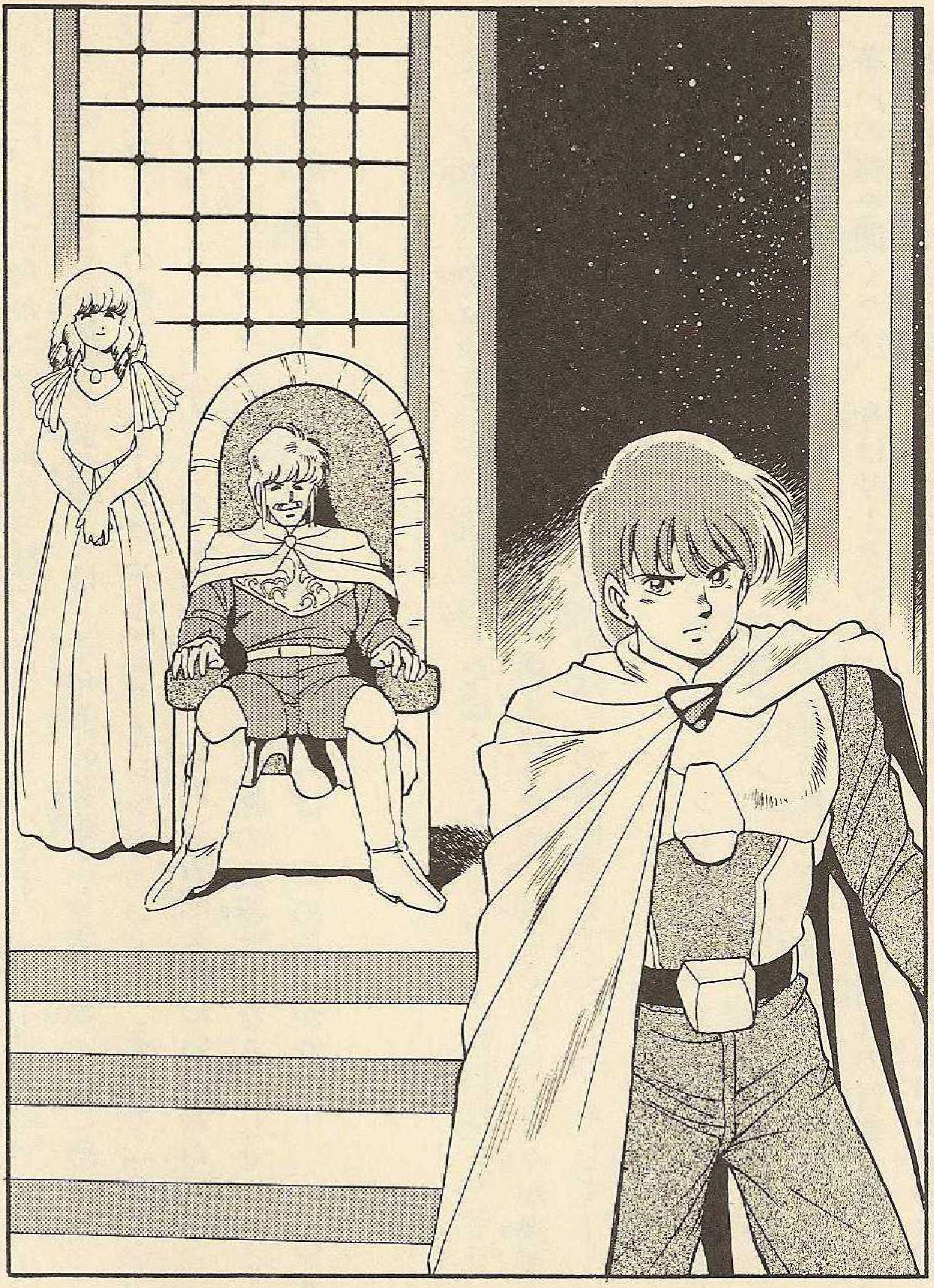
244

ぼくの旅は、終わった……。国を失ったぼくたち——ライアの民は、サテライトに移住することになった。しばらくは新しい国を造るため、目まぐるしい日々が過ぎていった。忠実な友、ミューとシーレンが、未熟なぼくの補佐をしてくれた。そして——ぼくの側には、いつもランがいてくれた。

ぼくが、新たなシール国の王となったとき、ランもまた、ラン・ル・シールと名前をかえた。一度始まってしまったロボット軍団とモンスター軍団の戦争はなかなかおさまらず、世界には争いが満ちていたが、ぼくたちは『青の月』を立派に守っていた。

争いの報を聞くたび、今はリークの女王となったリンの、別れの言葉を思いだす。

「わたしは、小さな頃から、おまえの——そして、ライアの民の悪口を聞かされて育った。



244●——月日が流れ，アインとランの間には，男の子が生まれた。名はシーン・ル・シール。これからはシーンが主役だ。

わたしの国、そしておまえの父の国では、オラキオの民を裏切り、ライアの民の国の王になどなったおまえの父は、もっともさげすまれた人間だった。しかし、母だけは、違っていた。ライアの民も、オラキオの民も、違うところなど何ひとつないのだと……ライアの民は、けして恐ろしい化物でも、憎むべき敵でもないのだと……繰り返し言っていた。その時のわたしには、わからなかったが……。今なら、少しはわかる気がする。おそらく、世界にはわたしのように、何も知らずにライアの民を――あるいはオラキオの民を――憎んでいる人間が、たくさんいるのだろうな」

そう言って、リンは寂しげな微笑みを浮かべた。ぼくは、繰り返し我が民に、子供たちに伝えよう。人の噂に惑わされず、真実を見きわめよと。ライアの民と、オラキオの民。けして、理由なく憎むことのないように――。真の敵は、その憎しみそのものなのだと。

――月日が流れ、アインとランの間には、元気な男の子が生まれた。子供は、シーン・ル・シールと名づけられ、すくすくと成長した。

これは、ふたりの息子、シーンの物語である！

⇩260へ

245

警護の兵士がぼくたちを取り囲んだ。まずい！

だが兵士たちは攻撃をしかけるでもなく、ライルにむかってうやうやしくお辞儀をした。
これはいったい……。その瞬間、ライルの表情が厳しくなった。
「ケイン、この先へ進む前に、きみの力をためしたい。きみが本当に、おれが力をかすに値する男かどうか……。こい、一対一で勝負だ！」
「ライル、あなたは何者なんだ！」
「その答えはあとだ！　武器を取れケイン。きみがどれほどの男か見てやろう！」
●ＨＰの値が偶数……………⇩190へ　●ＨＰの値が奇数……………⇩203へ

246

ひたすら砂の上をあるいて2時間半。やっと北西の洞窟にたどり着いた。
「シーン様。『双子のルビー』を」シーレンに言われ、母からもらった『双子のルビー』を取りだす。と、ルビーが輝き、洞窟の入り口が開いた。中に入ると機械でいっぱいの通路がのびている。こういうのを見ると、この世界が宇宙船なんだと、つくづく感じる。
どんどん通路を進んでいくと、やがて、階段につきあたった。リークの世界への出口だ。
階段を昇ると、砂漠の殺風景な風景とは、まったく違う世界が広がっていた。茶色の山山には緑が生い茂り、地面は適度に草が生えている。遠くにある緑のかたまりは、たぶん森だろう。これが、祖父の生まれた世界……。
⇩167へ

247

壊れたロボットか……。案外そういうのがいい情報を持っているかもしれないな。でもこの広い砂漠のいったいどこにいるんだ。まぁ、とにかく歩いてみるか。
ぼくたちはロボットを捜し、あちこち歩き回った。だが、いっこうに見つからない。いい加減疲れてきたころ、目に映る何かの影……。ロボットか？　いや、敵だ！

☆バトル　ハンドウォーカー×4＝69　アイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩269へ　**●負けた**……⇩166へ

248

いきなり、ジェリーのフォイエをくらってしまう。しかし威力が低く、致命傷にはならない（**HPマイナス10**）。
「くそう、さっきからきりがないぜ！」
ケイブウォルフをうちすえつつ、ライルがあせりの声をあげる。
「ケイン、ここはおれたちでくいとめる。おまえは、シーレンと王室に行け。そこにマーリナがいるはずだ！　あとはおまえの器量しだいだ！」
「すまん、ライル！　たのんだぞ」
ぼくはシーレンとともに、王室めがけて駆けだした。

⇩100へ

２４９

数の上では不利だが、ここは狭い地下道。だったらそれなりの戦い方ってものがある！
敵が近づく前にテクニックでひるませておいて、ぼくたちは、一気に切りこんでいった。離ればなれにならないように、４人かたまって行動する。ぼくの剣がヤツらを叩き切り、シーレンのショットガンが火を吹く。ミューのクローがヤツらを引き裂き、ランのバータが敵を突き刺す！……５分後には、ヤツらは全員、石畳の上に倒れた。
「アイン様、お怪我を」気がつくと、頬に軽い傷を負っていた（ＨＰマイナス３）。まあ、あれだけの敵を相手にしたんだ。これぐらいの怪我はしかたないだろう。

⇩３３７へ

２５０

一番右の道を進み、どんどん先に進んでいく。すると突然、足元がグラリと揺れた。
ガラガラガラ！　石の床が抜けた。落とし穴だ！
さいわい穴は深くなかったが、くずれてきた石が頭に当たってケガをしてしまう（ＨＰマイナス５）。
ぼくたちは仕方なく、もとの地下室に引き返した。さあ、つぎはどの道を選ぶ？

●左へ……………………⇩２７０へ
●真ん中へ…………………⇩２８４へ

251

老人の目が、リンの持つ『力のトパーズ』に止まった。
「おお、それは宇宙船の持ち主の証！　ならば、この宇宙船を使うがよい。そして、この世界『アリサ3世』の本当の姿を知るがよい！」
老人は、ぼくたちに道を開けてくれた。ついに、サテライトへ行く手段を手にいれた！
ぼくたちは、老人にお礼を言って、船に乗りこんだ。シーレンが操縦レバーをにぎり、サテライトへ――。宇宙船は、一回大きく振動すると、滑るように宇宙へと進んだ。
「ぼくたちが飛び立ったところを見てみろ……！」
窓の景色に、ぼくは思わず声を上げた。そこには7つの小さなドーム世界を、太いパイプでつなげた巨大な宇宙船の姿があったのだ。いにしえの文明が作り上げた宇宙船……。これが、ぼくたちの世界の本当の姿だったのだ。ぼくたちは、誰もが言葉を失っていた。
「サテライトへ乗りこみます！」
小型宇宙船は、『青の月』サテライトに到着した。

⇩228へ

252

シーレンとミューのテクニックが炸裂した！　ぼくの剣がきらめき、ライルが無情の杖をふるう!!　我ら4人の戦士は阿修羅のごとく戦い、モンスターどもを退けた！（HPマ

イナス2）だが安心するのは早い。また新手だ！

☆バトル　モンスター軍団＝64　ケイン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩174へ　●負けた……⇩224へ

253

道を進んでいくとT字路へ出た。

●東へ……⇩128へ　●南へ……⇩150へ

●北へ……⇩56へ

254

しばらく歩いて、やっと西の洞窟に着いた。この中に、みんながいるのか？
ん？　これは。ぼくは、洞窟に入ろうとして足を止めた。
これは……この赤黒いものは、血だ！
嫌な予感がして、ぼくは中へと急ぐ。何が起こったんだ！

⇩132へ

255

次から次へと出現する敵をやりすごし、何とかハサタカの町にもどってきた。とりあ

えず、宿屋で体を休めて（HPプラス10）……さて、どうしよう。
●リークへ…………⇩319へ　●西の洞窟へ…………⇩351へ

256

許さない！　ぼくは、アゴエ国のロボット軍団へ戦いを挑んだ。怒りにまかせた剣は、信じられない力を発揮し、つぎつぎと敵を倒していった。だが、それも長くは続かなかった。圧倒的な数の差に、次第にぼくたちは疲れ、追いつめられていく（HPマイナス15）。
「もうだめです！　アイン様、退却しましょう」
くっ。だが、ここは、シーレンの言うとおり引いた方がよさそうだ。悔しさに震えつつ、ぼくはひとまず退却することにした。アゴエ国を出ると、ロボットたちももう追ってはこなかった。ぼくたちは、砂漠の国へ向かった。　⇩282へ

257

「我らは、失われた歴史の語り部。時を見守るもの……」
なんだって？　老人は不思議な威厳を漂わせ、言葉を続けた。
「聞くがよい！　我らはパルマという星の末裔……。かつて、アルゴル太陽系中で、もっとも美しく、輝いていたパルマ……」

「幸福の星パルマ。そのパルマ人の末裔が、我らであり、おまえたちでもある……」
老人たちは、かわるがわる話をする。それは、話している内容とあいまって、ぼくたちを遥かかなたの時の向こうに運んでいくかのようだった。
「我らの先祖は、パルマで幸福に暮らしていた。だが、千年に一度現れるという『邪悪な力』のために、わがパルマは滅んでしまった……」
「2千年前、英雄オハリオとアイナが、パルマに現れた『邪悪な力』に戦いを挑んだ」
「だが、勝てなかった……。彼らが破れたことを知り、人々はパルマを捨てることにした。かれらは、4百隻もの宇宙船を、ひそかに作り上げた」
「そして、『邪悪な力』がパルマを滅ぼす直前に、脱出したのだ」
「しかし『邪悪な力』の一部は、すでに我らの船に入りこんでいた。そのため、一隻、また一隻と滅んでいった。そして千年。『オラキオとライアの時代』には、この『アリサ3世』と『ネオパルマ』の2隻だけになってしまっていた……」
「オラキオの民とライアの民……。もとは同じ人間たちが、長い間ふたつに別れて争うようになったのも、すべては『邪悪な力』のため。オラキオとライアは、戦いのうちに真の敵に気がつき、残る力を振り絞って、その復活をくいとめた……。だが、真実は誰も知らず、ライアの民とオラキオの民は、それからも互いを憎みあった。長い戦いは、この世界の人間たちを、いつかまっぷたつにわけてしまった……」

語り部たちの話は終わった。想像もしなかった真実に、ぼくたちは、言葉もなかった。
ライアの肩が細かく震えている。長い間求めていた姉の真実の姿を知り、彼女の瞳には涙があふれていた。ルーンが言っていた、別の力――今、世界を襲っているモンスターとロボットたちを作っている力こそ、その『邪悪な力』に連なるものに違いない！
今こそ、今こそ真の敵がわかったのだ!!

⇩466へ

258

この世界には、何の手がかりもない。別の世界へ行こう。

⇩197へ

259

カサカサと音を立て、6体のロボットがぼくらを取り囲んだ。
「じゃまだ！　どけ！」怒りにまかせて剣をふるい、次々と敵をなぎ倒す。気がつくと、目の前には、鉄クズの山があるばかり。
もうすぐ、出口らしい。足もとの床にうっすらと、砂がつもっている。

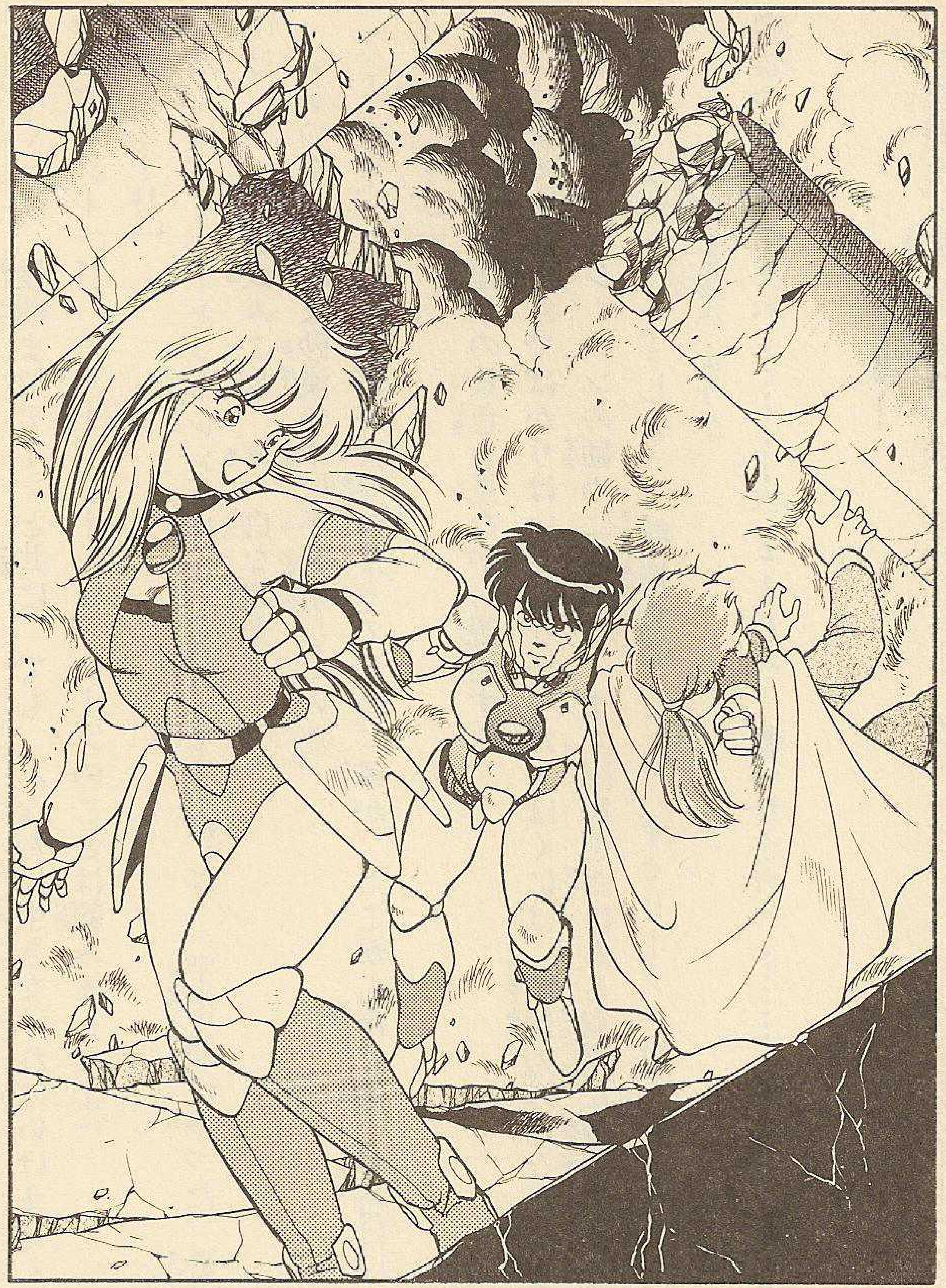
⇩181へ

260

それは、突然の出来事だった。ぼくたちの住む『青の月』サテライトに向けて、下の世

界——宇宙船『アリサ3世』から、ビーム攻撃が行われたのだ！
2度、3度と、宇宙を切り裂き、ビームがサテライトに命中する。刻一刻と破壊されていく世界を前に、ぼくたちはなすすべもない。いったいどうすればいいんだ！
「アイン王！ビームがエネルギー炉に命中しました！まもなくサテライトは、爆発します!! 脱出を！」
兵が駆けこんで、悲鳴混じりの報告をする。最初の攻撃からわずかに10分——。
ぼくたちは、現実をまだ信じられないでいた。
「シーン！我が息子よ」
父王アインが、悲痛な顔でこちらを向いた。
「長い間サテライトを守ってきたが、もはやこれまで。私は、この月と最期を共にする。しかし、おまえはまだ若い。国民を連れて宇宙船に乗り、下の世界へと脱出するのだ！」
サテライトのあちこちで、小さな爆発が始まっていた。ぼくたちの住むこの王宮も、その振動でひっきりなしに揺れている。
「まずは、リークへ、リンのもとへ身を寄せるのだ。リークは私の父、シーン、おまえの祖父の故郷だ。さあ、早くいけ！」
「父上！」
王宮の壁がバラバラと崩れだした。王座の側に立っていた母が、静かな瞳でぼくに言う。

260



260●ビーム攻撃の前にサテライトは次々に破戒されていった。
母上はミューとシーレンにたくして，ぼくを脱 出させた。

「わたくしは、最期までアインと共に。でも、あなたは生きなければいけません！　行くのです、シーン!!　ミュー、シーレン。シーンのことは頼みましたよ」
「母上……!!」
ぼくは、ミューとシーレンに押しこまれるようにして、宇宙船に乗った。最後に見たのは、すべてを飲みこむ、真っ白な閃光——。
気がつくと、船は砂漠の中に不時着していた。
「どうやら、ここは砂漠の世界のようですね。確か、ここから南に進んで行けば、ハサタカの町ですが」
シーレンが、辺りの景色を見ながら説明する。
いつまでも悲しんでばかりはいられなかった。ぼくには、国民のみんなに対する責任があるんだ……。シーレンの勧めに従って、まず国民を西にある洞窟に避難させる。
さて、これからどうしよう。救援を請いにまっすぐリークへ行くか、それとも、ハサタカで、情報を集めようか。

●まっすぐリークへ……⇩246へ
●ハサタカへ……⇩236へ

261

T字路だ。北と、南と、西。さて。

●北へ……⇩485へ　●南へ……⇩315へ
●西へ……⇩457へ

262

しばらく進むと、宝箱発見！　中身はカノン。シーレンに最適だ（チェック-i）。

⇩286へ

263

「なぜ、とどめを刺さぬ……。ライアの掟で殺せぬか？　だが、私を破壊しない限り、私はふたたびやってくる！　私に心を与えてくれた、オラキオ様のかたきをとるまでは！」
よろよろと、サイレンは逃げだしていく。
「いいのか？　あとを追わないで」
リンが言う。しかし、彼女もどうしてもとどめを刺そうという気はないらしい。ぼくがうなずくと、ニッと笑ってナイフを納めた。彼にはもう、ロボット軍団を生みだす力はない。これ以上追いつめたって意味はないだろう……。
「憎しみしか見えない、かわいそうな人……」
ミューの呟いた言葉が、いつまでも胸に残った。

⇩244へ

264

ぼくも剣をとっては、リーク一といわれた男だ。むざむざとやられはしない。
ぼくは攻めこんだ。頭をねらったがかわされた。ライルの杖が変化し、みぞおちをねらってくるのがわかる。それを受け流しておいて、今度はライルの手元をねらう。
彼の手首が切れて、血が流れた。いけるぞ！

☆バトル　ライル＝54　ケイン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……⇩84へ　**●負けた**……⇩127へ

265

砂漠には、何百年とさまよっている、壊れたアンドロイドがいる……。
父や祖父から何度も聞かされたものだ。そして、そのアンドロイドこそミューンという名の持ち主だったはずだ！　ぼくたちはさっそく砂漠の世界へと向かった。⇩301へ

266

だめだ、体が動かない……。王の放ったザンは、予想以上に強力だった。
なんとか立ち上がったものの、もはや剣をかまえる力すら残っていない。
「このうつけものめが！」

国王は渾身の力をこめて、その無情の杖をぼくめがけて振りおろした。

END

267

敵は、数にものをいわせて襲いかかってきた。いや、数だけじゃない。さすが最後の守りをまかされているだけあって、1体1体がとても強い！（HPマイナス10）

「これじゃキリがない！　シーレン、テクニックを使おう!!」

ぼくたちは、ロボットから一歩離れると、ミューはアンバランスを、シーレンはグラブトを、同時に放った。やった！　……いや、だめだ。2体、残っている。味方のロボットを盾にしたんだ。なんてヤツらだ。

☆バトル　ヘルアーマー×2＝59　アイン＝HP＋Dで戦います。

●勝った……⇩288へ　●負けた……⇩9へ

268

最初にとびだしたのはぼくだった。ラポラの1体へ切りつける。が、そのとき、ウラルの強力な腕がぼくを抱え上げ、床にたたきつけた！　右足に鋭い痛みが走った。だめだ、立ち上がることができない！（HPマイナス8）

「シーレン！　早く、アイン様をおぶって！　逃げるのよ！」
ミューが叫んだ。ぼくはシーレンの背中に担ぎ上げられ、角を南へ逃げた。

⇩253へ

269

ハンドウォーカーたちはメタリックな体を陽に輝かせながら、いっせいに攻撃してくる。
だめだ！　ヤツらの合金製のボディには、ぼくたちの剣は歯がたたない！
「シーレン！　テクニックを使え！」
シーレンの手から炎が吹きだし敵の体を包みこむ。最高温度3万度の高熱は、いかなる鋼鉄をも溶かす！　敵は完全に溶解した。フォイエ――。炎のテクニックのこの威力！
「やった……」ぼくが安心して構えを解いたその時！　わき腹に強烈な衝撃！　重力波のテクニック、グラブトだ。敵かっ!?（HPマイナス10）
砂の中から、ポインターロボットのナルーガが3匹出現！　少し離れて、クモの形をしたオクトレグが3匹出現した！　数は多いが……やるしかない！

⇩299へ

270

一番左の道を選び、どんどん先に進んでいく。

「グッ!!」突然右胸に、するどい打撃をくらった！　ふっ飛びかけたぼくを、ミューが必死にだきとめる。(HPマイナス3)
グラブトのテクニック!!　ケイブウォルフの奇襲をくらったのだ……。
地下道でぼくらを待ち受けていたモンスターは、ケイブウォルフが2匹に、チャムが1匹、そしてクラゲのモンスター、ジェリーが、1、2、3……の6匹だ！　戦うか？

●戦う……⇩14へ　●逃げる……⇩312へ

271

「しまった、目がみえない！　ミュー！　シーレン！　どこだ？」
ディバイドの毒に目をやられたぼくは、たちまちパニックにおちいってしまった。そこへハンドウォーカーのフォイエが襲いかかる！(HPマイナス10)
「うわぁーっ、だめだ！　退却しよう!!」
ぼくらは、ほうほうの態でもと来た道を引き返した。

⇩172へ



272

こっちは行き止まりだ。もどろう。

⇩128へ

273

薄暗い通路を南へ進んでいくと、突き当たりに昇り階段が。さらに行くと……なんと、地上に出てしまった。

なんだ、ここは、ダンジョンの入り口じゃないか。いろいろまわったけど、なにも発見できなかったし……いいや、このまま空中都市を出よう（チェックp）。

⇩117へ

274

剣を抜くヒマもなく、ランキードがぼくを掴み上げた。鋼鉄の腕がぼくをしめつける。

「グ……、シ、シーレン、フォイエを……フォイエを使……え……」

「しかし、それでは……」

「早く!!」

シーレンのフォイエがランキードに命中した。だが同時にぼくの服が燃え上がった。

「ミュー！　バータだ!!」

ミューの手から水流がほとばしる。通路の天井を削り、雨となってぼくにふりそそい

だ。火は消えたものの、体は傷と火傷でボロボロだった（HPマイナス8）。だが、先へ進まねば……。

⇩31へ

275

「くそう、さっきからきりがない！」

あいつぐ戦闘で、ぼくの体は傷だらけだ。こんなことで王室にたどりつけるんだろうか……（HPマイナス6）。

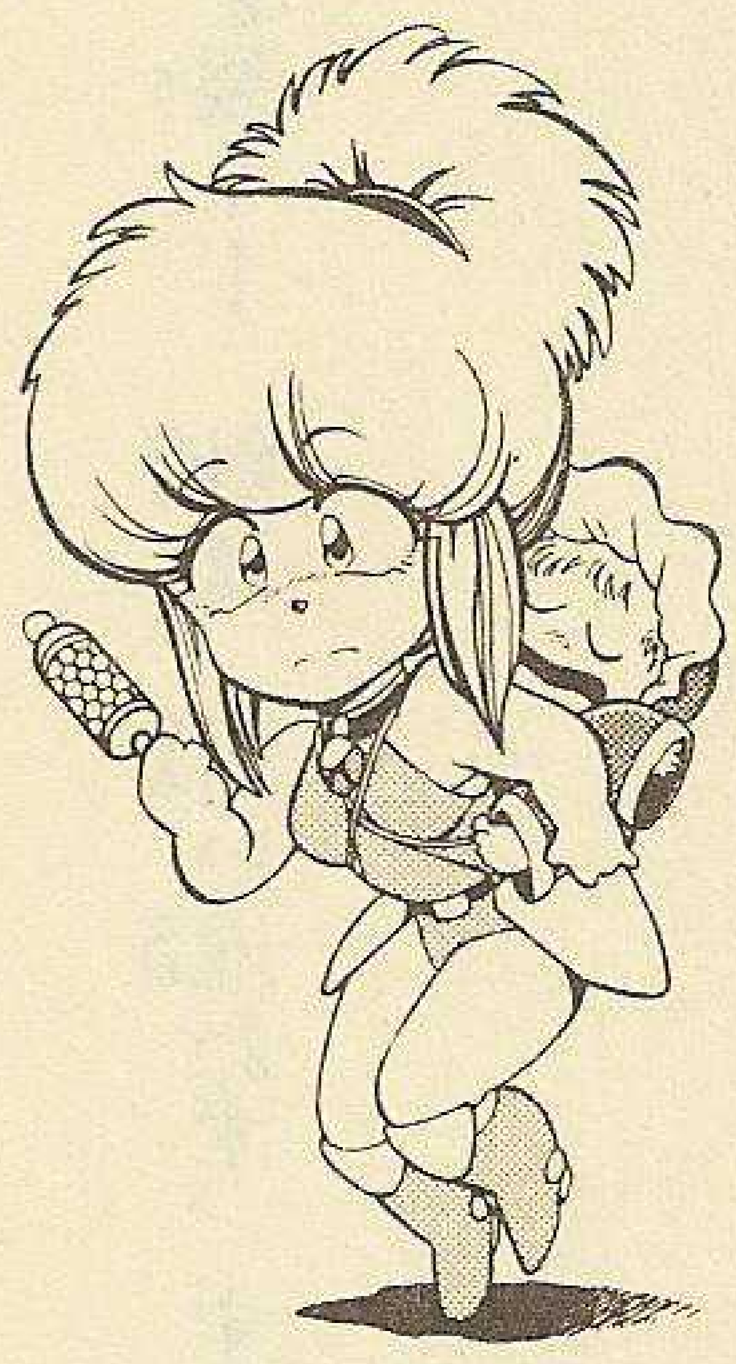
「ケイン、ここはおれたちでくいとめる。おまえは、シーレンと王室に行け。そこにマーリナがいるはずだ！　あとはおまえの器量しだいだ！」

ライルたちが、身をていして血路を開いてくれる。

「すまん、ライル！　たのんだぞ」

ぼくはシーレンとともに、王室めがけて駆けだした。

⇩100へ



ラコニアンニードルが宙を裂く！　針は、狙い違わず、すべての敵の急所を貫いていた。たいした威力だ。

⇩446へ

277

東の道を選んだ。薄暗い石畳の道を、黙々と歩く。と――前方の闇に複数の敵の気配！

「気をつけろ！」

ぼくが身構えるとほぼ同時に、闇の中から、敵が姿を現した。戦士ロボットのゲルアーマーと、カラテロボのアスチルス、それに注射ロボットのレッドディバイドが3匹だ！

☆バトル　ロボット軍団＝88　アイン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩302へ

●負けた……⇩360へ

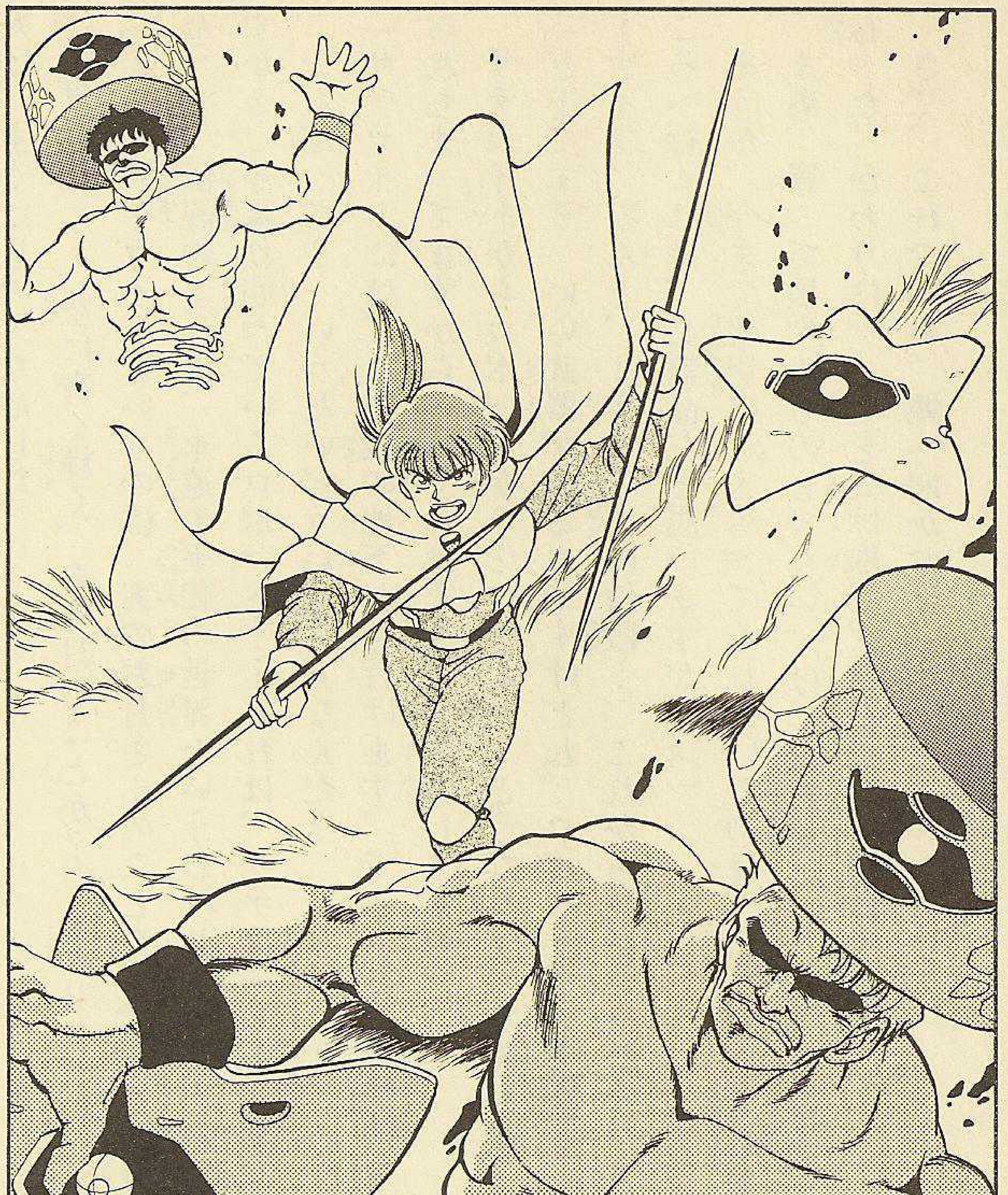
278

ライルの遺体を埋葬し、フロラトーンの城下町へと向かった。

まずは宿屋に泊まって、疲れを癒すことにする（**HPプラス10**）。

「へえ、『青の月』に行きたいんですか」

次の朝。ぼくたちが宿の主人にサテライトへの行き方を聞くと、話し好きらしい宿の主



276●ラコニアンニードルをふるい，すべて敵を倒した。急所をねらった攻撃はすさまじく，戦いは圧勝に終わった。

人は、すぐにしゃべりだした。
「『青の月』？　空に青く輝く、あの月のことか？」と、リン。
「ええ、サテライトというのは、あのお月さんのことなんです。でもねえ、サテライトったって、伝説のように、永遠の平和の世界というわけじゃないみたいですがね。知ってますか？　今暴れ回っているロボット……あれは、サテライトから来たんですぜ」
なんだって？　いったいどういうことなんだ？
「サテライトには、この城の地下から行けます。でも、お城は例のロボット軍団に乗っ取られちまってますから、いくのはそうとう苦労しますぜ」
サテライトからロボットが……いったい、どうなっているんだ？
「どーです？　いい武器があるんですけどね。ロボットどもを簡単に叩き切れる、レーザーナイフ。なんと、2本で1本の値段！　これからロボットがウジャウジャいるようなところへ行くには、必需品だと思いますがねぇ」
そうか。今まで親切にしゃべってくれていたのは、こういう下心があったのか。
まあ、買って損するものじゃない。ぼくは苦笑いをしつつ、商売上手なオヤジに金を払った。かわりにナイフを受け取り、左右の腰に装備する。
さて、これでいい。城へ向かおう。

⇩317へ

279

ぼくたちは、サテライトシステムの前にたどりついた。月の石と月の涙をとりだし、コントロールパネルにはめこむ。もちろん教わったとおりの順番でだ……。
あとはシーレンの仕事だ。パネルにむかったシーレンは、なれた手つきで、システムを作動させた。
「まもなく2つの月は接近をはじめるでしょう。これで、シューソランの北の海を渡ることができるようになります」
シーレンがいつもの抑揚のない声で報告した。
マーリナのいるシールに行ける！　そう考えただけで、ぼくの体には力がみなぎってくるようだ（**HPマイナス10**）。

⇩140へ

280

走って走って走って……クタクタになるまで走って、ようやく逃げることができた（**HPマイナス6**）。いつのまにか、洞窟のかなり奥に入りこんでしまったらしい。気がつくと、ちょっとした広間になっている場所にいる。
「シーン様、あそこに宝箱が」
ミューが薄暗い部屋の隅に、宝箱を見つけた。開けると、精巧な機械が。

「これは……サブマリンパーツです」
シーレンが中身を見るなり声を上げた。これが……古代の機械なのか。

⇩51へ

281

ハサタカにもどり、宿屋で体を休めた（HPプラス10）。さて、これからどうしよう？

●**アンドロイドを捜す**……⇩237へ　●**西の洞窟へ**……⇩351へ

282

何はともあれ、案じられるのはシールの民の身の上。そして……ああ、父上、母上はご無事でいられるのか。ぼくたちは砦をあとにし、砂漠へ通ずる洞窟に入った。
「アイン様、敵です！」
ミューの声で、ふりむいたぼくの目に、冷たい銅像の生き物たちがうつった。

☆**バトル　ハンドウォーカー×3、オクトレグ×3＝63　アイン＝HP＋Cで戦います。**

●**勝った**……⇩259へ　●**負けた**……⇩235へ

283

サイレンが、バータを使った！　押し寄せる水が、頬を、腕を、足を、切り裂いていく

（HPマイナス20）。くそ、負けるかぁ！　⇩322へ

284

真ん中の道を選び、どんどん先を進む。ところが、いきつく先はいきどまりだった。
仕方なく、もとの地下室に引き返す。さあ、つぎはどの道を選ぶ？

●右へ……⇩250へ　●左へ……⇩270へ

285

しばらく北へ進んでいくと、行く手を壁に阻まれた。しょうがないもどるか…。
「アイン様、待って。この壁、竜の彫刻がしてあるでしょう。竜の目のところだけ、何だか変に汚れて黒ずんでいますわ」
ミューが言った。そういえば……。壁を調べるか？

●YES……⇩191へ　●NO……⇩70へ

286

「うっ！」突然、肩に鋭い衝撃を受け、ぼくは地面に倒れこんだ（HPマイナス2）
うかつだった。後ろから敵襲だ!!

☆バトル　ヘルアーマー、ビット＝74　アイン＝HP＋Aで戦います。
●勝った……⇩233へ　●負けた……⇩173へ

287

通路を東に進んでいく。この辺りは妙に薄暗くて、前を歩くリンさえよく見えない。
「アイン様！」
ランの悲鳴に振り向くと、暗がりの中から、金属の腕がのびてきている！　敵か！
だが、ぼくが構えるより早く、ランの手から、水流がほとばしった！　水の流れで敵を突き刺す、バータだ！　テクニックで作られた水が去ったあとには、バラバラになった敵の死体があった。しかし、とっさのことでパワーをセーブできなかったのだろう、ランの方も、かなりの体力を消耗してしまったようだ（HPマイナス4）。
通路はすぐに行き止まりになった。もどるしかないな。

⇩397へ

288

ヘルアーマーは、金属のこすれる嫌な音をたてて、こちらに向かってきた。ミューが、クローで、ヤツを叩き落とす！　だが、そいつはすぐに立ち上がり、ミューに襲いかかっていく!!　防ぎきれずに、ミューは一撃をくらってしまった。白い腕に真っ赤なオイルが

流れる（**HPマイナス8**）。そうするうちにも、もう1体が彼女に近づいていく。
「危ない、ミュー!!」
シーレンのショットガンが火を吹いた！　銃弾がヤツらの体を射ぬき、ヘルアーマーは、穴だらけになってその動きを止める。
「アイン様！」澄んだ声に振りむくと、通路の奥、鉄の格子の向こうにランの姿があった。薄暗い迷宮の中で、そこだけ輝いているかのように、真っ白い肌。宝石のような瞳が涙でぬれている。ランとは子供のころ会ったきりだったぼくは、その美しさに息をのんだ。
「アイン様、アイン様、わたくしのために……」
それ以上は何も言えず、ランは静かに泣きじゃくっている。ぼくは牢の扉をそっと開けた。……ともあれ、どこにも怪我はないようだ。よかった。

⇩399へ

289

「ミュー、シーレン、助けてくれ！」ぼくはたまらず助けを求めた。
ミューとシーレンが、ぼくの加勢に加わる。
「みそこなったぞケイン。1対1の勝負に水をさしおって。そんな程度の男には、マーリナはわたせせんな！」
ライルはそういって、闘いを中止させた。

「ライル、あなたとマーリナはいったい……？」

だがライルはそのことについて、一言も話さず、黙って城の奥に姿を消した。

END

290

通路を進んでいくと、T字路に出た。

●北へ……………⇩408へ　●南へ……………⇩472へ

●西へ………………………………………⇩404へ

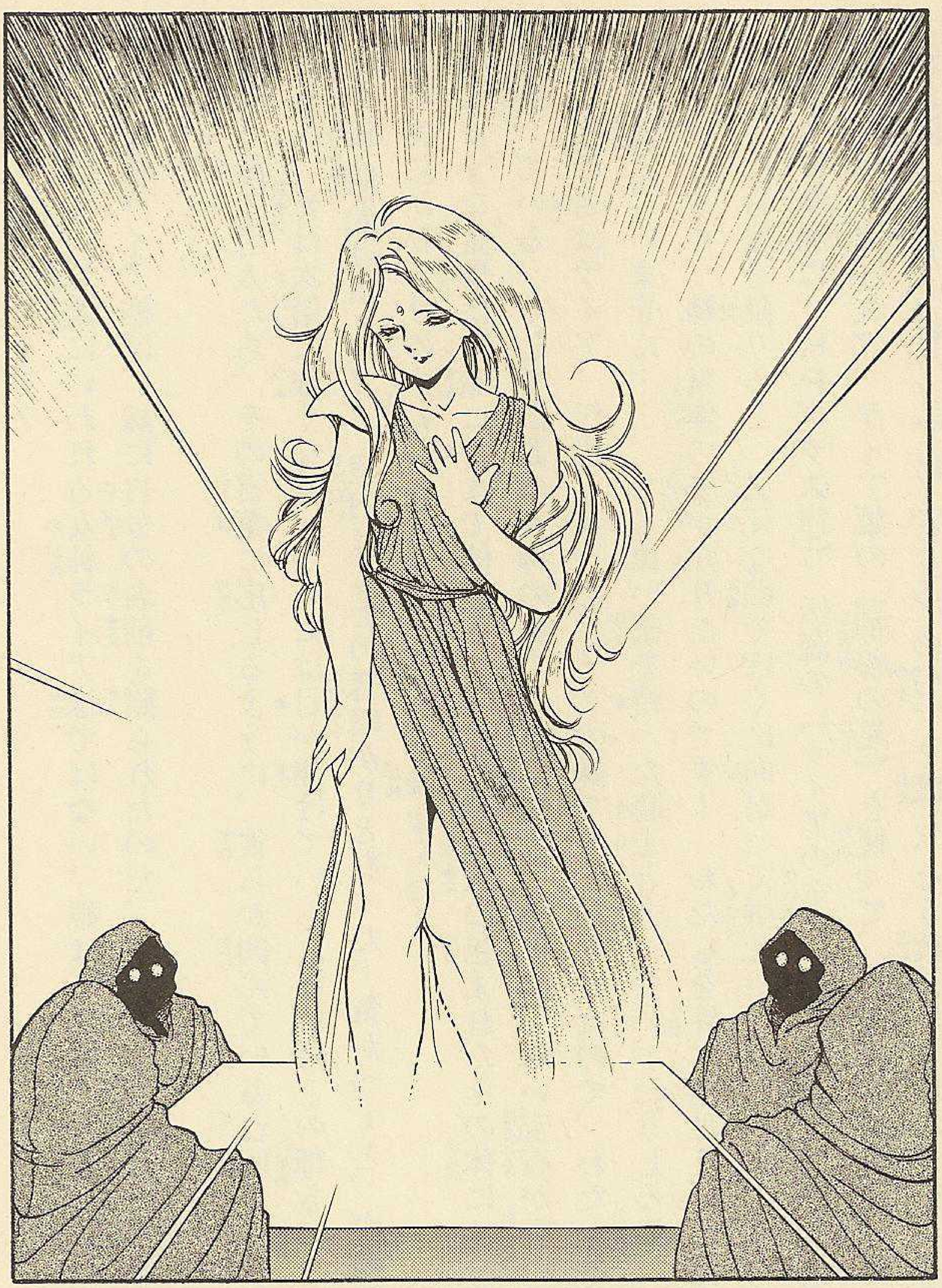
291

目的は、空中都市なんだ。よけいなところに寄ってもしようがない。西半分を全部探したが、空中都市は見つけられなかった。東側を探そう。⇩431へ

292

ぼくたちが近づくと、老人たちはこちらに体を向けて、ゆっくりとしゃべりだした。

「我々はだいだい、眠れる姫をお守りしてきた……。姫は、7年ごとに目覚め、時を過ごされる。眠れる姫の名前を、ライアという……」



292●台座の上の少女は，輝くような長い金髪，そして高貴な気品の持ち主だった。少女は「ライア」と名乗った……。

なんだって!? ライア?

「といっても、伝説にいわれる女神ライア様ではない。姫は、伝説の女神の妹だ……。伝説の女神ライア様は、妹に自分の名前を贈られたのだ。そして、千年後の未来を幼い姫に託された……」

淡々と語る老人たち。その言葉に応じるように、彼らが囲んでいる台座が、少しずつ輝きだした。光は次第に強くなり、ついには目が開けていられないほどの輝きに!

次の瞬間光は消え去り、室内はもとの薄暗がりとなった。気がつくと、台座の上にはいつのまにかひとりの少女が立っている。だ、誰なんだ?

輝くような金髪は自然に背まで伸ばされ、赤い戦闘服に包まれたその体には、高貴な気品が漂っている。そして伝説の女神の妹である証拠に、額には、赤い宝石が輝いていた。

「わたしの名はライア。伝説となったライアの妹です。幼かったので、わたしは姉のことはよく覚えていません。でも黒い剣を持った騎士と去っていったうしろ姿は、いまでも憶えています。姉の真実の姿が知りたいのです! わたしを外に連れて行って下さい」

ライアは台座を降りると、必死な顔でぼくに向かって訴えた。もちろん、ぼくは承知した**(ライア仲間に。HPプラス10)**。伝説の『ライアの宝』とは、彼女のことだったのだ。

「真実が知りたければ、ライア姫の『神秘の星』を使って、パイロッタへ行くがいい」

別れ際、老人たちはライアに『ライアの弓』を渡し、そう教えてくれた。**チェックーは?**

●ある……⇩458へ
●ない……⇩219へ

293

ルーンこそ、この争いの元凶。ひょんなことで貴重な情報を得たぼくたちは、一路パイロッタに向かった。南西に向かってドンドン進むと……。なんと、広い川があって、そこから先へは行けなくなってしまった。歩いて渡るには深すぎるし、アクアシーレンで潜水するには浅すぎる。つまり、渡れないってことか（**チェックm**）。とんだ無駄足だったな。ハサタカへ行こう。
途中、何度か敵の襲撃を受け、多少傷を負ったものの（**HPマイナス7**）、ぼくたちはその日のうちにハサタカの南の湧き水に着くことができた。

⇩41へ

294

「待ちなさい！」ぼくたちを、女が呼び止めた。今までと違う高圧的な口調だ。
振り返ったぼくが目にしたのは、徐々に変貌する女の顔だった。美しいには違いないが、一種の悪魔めいた冷たい顔だ。
「私の名は、ライトアーハ。おまえたちは、ここ邪悪な都ラシュートで永遠の眠りにつくがよい！」

⇩480へ

295

雪の世界に行くためには、パイロッタから、さらに南西にある洞窟を抜けるのだという。ルナを仲間にし、ルーンの元を去ったぼくたちは、雪の世界を目指した。
幸い、敵に遭わずに雪の世界に着いた。飛行場跡でルーンにもらったパーツを使い、シーレンがスカイシーレンに変身する。ぼくたちは、空からこの世界を探索することにした。
現在地は、この世界の最北西だが、さて。

●南を探す……………⇩313へ　●東を探す……………⇩431へ

296

岩陰から敵が出現！　第3の目を持つ巨人、ルーテラ、デスルーテラ、それに、ヒトデ類のスターアイが2匹、蝶の妖精バタフライが2匹、合計6匹のモンスター！
チェックtは？

●ある……………⇩341へ　●ない……………⇩276へ

297

先手必勝！　ぼくたちは、敵に向かって一気に切りこんでいった。たちまち、狭い地

下道は、敵味方入り乱れての大乱戦。とにかく、1匹敵を倒しても、目の前にはまた別の敵がいる。長い長い戦いのあと、やがてあたりは静かになった。立っているのはぼくたちだけ。敵は全員床の上だ。どうやら、なんとか勝ったらしい。とはいえぼくも、そのまま床に座りこみたいほど疲れていた（HPマイナス7）。

⇩337へ

298

ここを見つけたあなたはラッキー！

バトルポイントの書きかえをすることができます。もちろん、そのままでいたいなら書きかえなくてもOK。どうするかはあなたの自由です。

299

どうにか敵は倒したが、まだまだ油断はできそうにない。

強烈な陽射しは刻一刻とぼくたちの体力を奪っていく。砂地の戦いにくさは思っていた以上だし、新たな敵が出てくるまえに、もどったほうがいいかも知れない。何十年もさまよっているようなロボットじゃ、あてになるかはわからない。だいいち、おかしくなっているっていうし……。

●こりずに捜す……………⇩192へ
●ハサタカへもどる…………⇩255へ

300

砂漠の世界からリークの世界へとつながる洞窟にたどり着いた。

ランが『双子のルビー』を使うと、ルビーが輝き、中に入れるようになった。洞窟の中は、ぼくたちの国から砂漠の国に来たときに通った洞窟と同じように、機械でいっぱいだった。透ける足元の通路を通して見える下の風景も、機械だらけ。落ちないとわかっていても、下が見えるというのは落ち着かない。ぼくたちはなるべく先を急いだ。一本道で、幸いモンスターも出なかったので、あっさりとリークの世界へと着くことができた。

目の前には、青々とした草原が広がっている。これが、父の生まれた世界か……。これから、一気にリークへ行くか？　それとも、まず村や町をまわって情報を集めようか。

●一気にリークへ……⇩175へ　●まず他の町や村へ……⇩318へ

301

砂漠の世界。ハサタカの北辺りにミューンはいた。ボロボロになって……。足の肌が裂け、中の機械が見えている。すでに機能が停止しかかっているのだろう、体はぎくしゃくと変な動きをする。そしてミューとよく似た美しい顔は、半分以上が崩れていた。

彼女は、人間と変わりがないように、精巧に作られたアンドロイドだ。それなのに砂の吹き荒れる砂漠にいつづけたため、もう、完全に壊れかかっているのだ。

「オラキオ様……。わたしのオラキオ様はどこ……？」
ミューンの目が、ぼくを捕らえた。瞳が、嬉しさに輝く。
「ああ、オラキオ様！　お会いしたかった……」チェックrはあるか？
●ある……………………⇩340へ　●ない……………………⇩498へ

302

グラブド!!　前に突きだしたランの手から、重力波が敵めがけて襲いかかる！　見えない嵐はヤツらをはねとばし、壁に押しつけてペシャンコにした。しかし、ヤツらも重力波につぶされる瞬間、ザンを放ってきた（HPマイナス3）。
そのまま進むと、通路は行き止まりになった。もどろう。　⇩130へ

303

ぼくの迷いが、剣の切っ先を鈍らせた。それが、勝負の行方を決めることになった。
リンのナイフが、ぼくの胸に深々と突き刺さる――！
「ふん、しょせん裏切り者など、わたしの敵じゃない」
薄れていく意識の中、リンの嘲りの言葉が、ぼくの最後に聞いた言葉になった……。

END

304

くそっ！　反射的に放った一撃が、ヤツの体をまっぷたつに叩きわった！　ヤツは、耳障りな音をたてながら、砂の大地に沈んでいった。ふう、弱い敵で助かった。
……ん？　あそこにいるのは……人？　女の子か!?

⇩327へ

305

ルラキルの所へいこうと背を向けたとたん、猛烈な熱気がぼくたちを襲った！　あわてて飛びのいたものの、服のあちこちがブスブスと煙をあげ、体のあちこちが痛い**（HPマイナス10）**。さっきの女が、低い笑い声をあげた。
「お、おまえがやったのか！」
次の瞬間、ぼくが目にしたのは、徐々に変貌する女の顔だった。こいつも怪物か！
「私の名は、ライトアーハ。おまえたちは、ここ邪悪な都ラシュートで永遠の眠りにつくがよい！」

⇩480へ

306

細い手足でちょこまかと動き回るロボットたち。あまりにも硬い装甲に、思ったよりも苦戦をしてしまった。シーレンのグラブト、ぼくのフォイエ、ライアのバータを連続で浴

びせ、ようやく動かなくなる。
「何をしているんですか、あなたがたは！」
戦いの物音に、都市の奥からひとり男が出できた。
「ぼくたちは、あなたがたに話を聞きたくて……」
だが男は、床に倒れているロボットを見ると、怒りだしてしまった（チェック○）。
「なんてことを！　お話しすることなど何もありません、出ていってください！」
ぼくたちは都市を追いだされてしまった。何てことだ。

⇩117へ

307

マスターの店から、地下道にはいる。ひんやりとした空気がぼくたちを迎えた。思っていたよりも中は明るく、10メートルほど先までは見通すことができた。
ぼくたちが先に進もうとしたとたん！　ガシャガシャと音をたてて、向こうからロボットが現れた！　ウェザールが3匹、オクトレグ3匹に、ハンドウォーカーが3匹……暗がりから、ゾロゾロと歩いてくる。さすがに簡単に宝石を取らせてはくれないってワケか。

☆バトル　ロボット軍団＝85　アイン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……………⇩249へ　●負けた……………⇩297へ

３０８

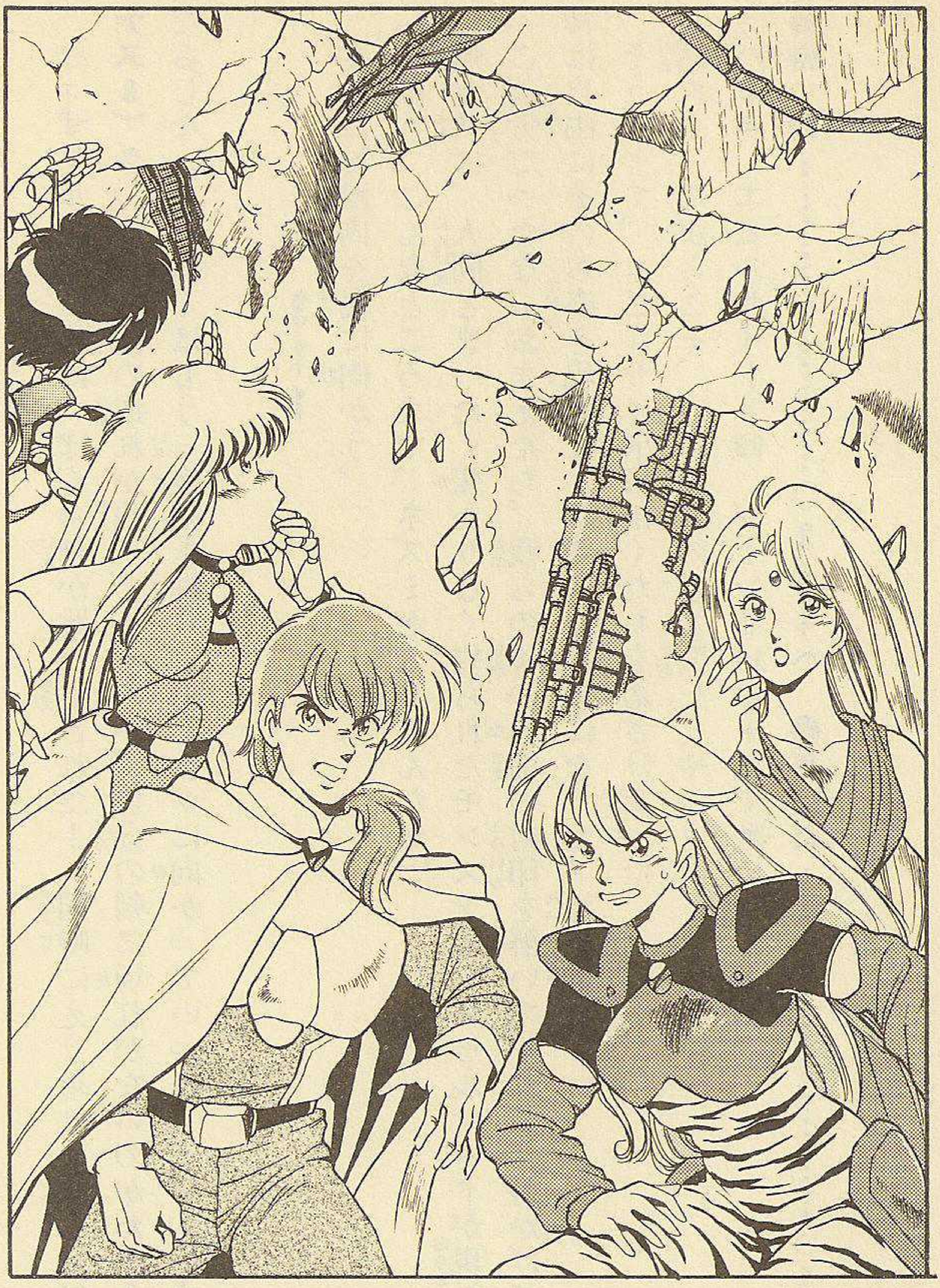
東に向かって進んだ。だが、しばらくすると、その道は行き止まりに。
「何か、音がしないか？」ルナが天井を見上げる。
そういえば、ギシギシという音が……。うわっ！
突然、ぼくたちの上に、パイプ管やら金属板やらが降ってきた！（ＨＰマイナス６）
天井が崩れてきたんだ。あっぶなー。急いでＴ字路までもどる。

⇩３３５へ

３０９

町を出て、ちょっと南に歩くと、すぐに湧き水の場所に出た。しかし、いくら見ていたって、中から何かが出て来るわけじゃなし、何の変化もない。やっぱり、サブマリンパーツとやらがないとだめなんだ。もどろうとして、うしろを振り向くと、うわ！　敵だ！
そいつは気配を絶って、すぐうしろまで忍び寄っていた。そして、長い腕を振り回し、ぼくの頭をひと打ち。ぼくは、完全に不意うちをくらってしまった（ＨＰマイナス10）。
体勢を立て直し、剣をヤツの胸に突き刺す！　まったく、オチオチしてらんないな。
今度こそまっすぐリークに行くことにした。

⇩２４６へ



308●天上がギシギシという音を立てたとたん，ぼくたちの上に，パイプ管やら金属板やらが降ってきた。あっぶなー！

310

ウェザールの硬い体に、ぼくの剣が跳ね返された！　同時にえぐられる肩！（HPマイナス9）さっきの戦闘の疲れが残っているのか、自分の剣に切れがないのがわかる。くそ、だらしないぞ。ぼくはもう一度剣を握りしめ、ヤツに向かっていった。

⇩350へ

311

さらに神殿内を奥に向かう。

「ほほう。こんなところまで、ネズミが入りこんだか」

声と共に、人間とまったく変わりなく作られたモンスター、エビルサイドが現れた。

「ご苦労だったな、おまえたち。我らの神の名前の封印を解いてくれて。おかげで、我が神は自由にそのお姿を現すことができるようになった。礼を言おう」

そう言って、エビルサイドはぼくたちをあざけ笑った。

「黙れ！　だからこそ、ぼくたちの手で倒してやる！」

☆バトル　エビルサイド＝98　シーン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……⇩354へ　**●負けた**……⇩388へ

312

ここはひとまず退却だ！　ぼくらはモンスターどもに背をむけ、スタコラと逃げだした。幸いにもヤツらは追ってこず、もとの地下室まで引き返すことができた。さて、次は？

●真ん中へ……⇩284へ　●右へ……⇩250へ

313

南に向かって飛んで行くと、下に村があるのが見えた。すぐ横に飛行場跡もあるから、降りられないこともないが……。

●降りてみる……⇩441へ　●やめる……⇩291へ

314

ぼくたちは入り口にもどろうと走りだした。だが、相手がそれを見逃してくれるはずはない。うしろからフォイエを放ってくる！（HPマイナス5）このままでは！

●戦う……⇩415へ　●逃げる……⇩280へ

315

南に通路を進む。やがて、道は西へ曲がり、次に南へ、そして西へと曲がった。

「ずいぶんいい性格の迷宮だな」ルナが、ぶぜんとボヤいた。

⇩482へ

316

気がついたときには、ぼくはライルたちから分断されていた。そばにいるのは、リナだけだ！　モルモスとジェリー3匹がいっせいに襲いかかる。ぼくも剣を奮って応戦したが、リナをかばいながらで、思うにまかせない。
モンスターどもはぼくを徐々に追いこんでいく。このままではやられる！
あせるぼくにむかって、モルモスがフォイエを放った！　だめだ、よけきれない!!
「グッ!!」フォイエがぼくを直撃した!!　紅蓮の炎がわが身をつつむ！
マーリナ、ごめん、君を助けだせなくて……。

END

317

城の門は、大きく開け放たれていた。はいるとすぐに、地下への入り口がある。

●地下へはいる……………⇩330へ
●城の中へ………………⇩225へ

318

ぼくはこの世界のことを何にもしらないんだ。まずは情報集めをしたほうがいい。そう思って近隣のヒューリやヤータの村を回ったが……甘かったようだ。ぼくたちが『力のトパーズ』を捜しているとわかると、村人たちは、ロボットをけしかけてきたのだ！　圧倒的に数が違うんじゃ、勝てるわけがない。ぼくたちはボロボロになって村をあとにした（HPマイナス16）。リークに直行するしかないようだ。

⇩226へ

319

父上たちはたぶん西の洞窟に隠れているんだろう。よし、ぼくたちはリークへ向かおう。ぼくらはシールの世界へもどり、父上にいただいた『森のサファイア』をつかって東の洞窟へ入った。ところが、リークの世界へ足を踏み入れたとたん……

「敵だ!!」

☆バトル　ウラル×2、ラポラ×3、ビット＝71　アイン＋Eで戦います。

●勝った……⇩158へ

●負けた……⇩222へ

320

キラービートの毒液の悪臭があたりにたちこめる。右に左に毒のしずくをよけながら、

ハチの化物に切りつけるが、敵はひるむ様子もなく攻めてくる。ナルーガがスターフォースのテクニックで、キラービートの力を回復させているのだ。

「シーレン！　テクニックを使え、ザンだ!!」

シーレンがザンを使うと同時に、3体のナルーガの首が、その胴から切り落とされた！

突然発生した真空へ空気がなだれこみ、まきこまれたキラービートがバランスをくずす！

いまだ!!　ぼくの剣とミューのクローが敵にとどめを刺した。だが、ぼくたちも、体のあちこちを毒液におかされていた（**HPマイナス7**）。

敵の残がいをあとにして北へ進むとT字路へ出た。

⇩**253へ**

321

T字路だ。さあ、どれを選ぶ？

●**北へ**……⇩**499へ**
●**南へ**……⇩**489へ**
●**西へ**……⇩**472へ**

322

リンのナイフが、ビーロルーガを真一文字に切る！　火花をまき散らして、ヤツの動きが止まる。その破片が、リンの腕をかすめた（**HPマイナス4**）。

よし、あとはサイレンだけだ!! **チェックnがあるか？**

●ある……⇩390へ **●ない**……⇩353へ

323

『伝説の武器』か。どこをさがせばあるんだろう。とりあえずぼくたちは、シールのあった世界に行って、賢者の島を訪ねることにした。 ⇩394へ

324

ぼくは、剣に手をかけ、一気に引き抜いた！（**チェックr**）その時！

「よくぞ、我が名を封印から解き放ってくれた！」

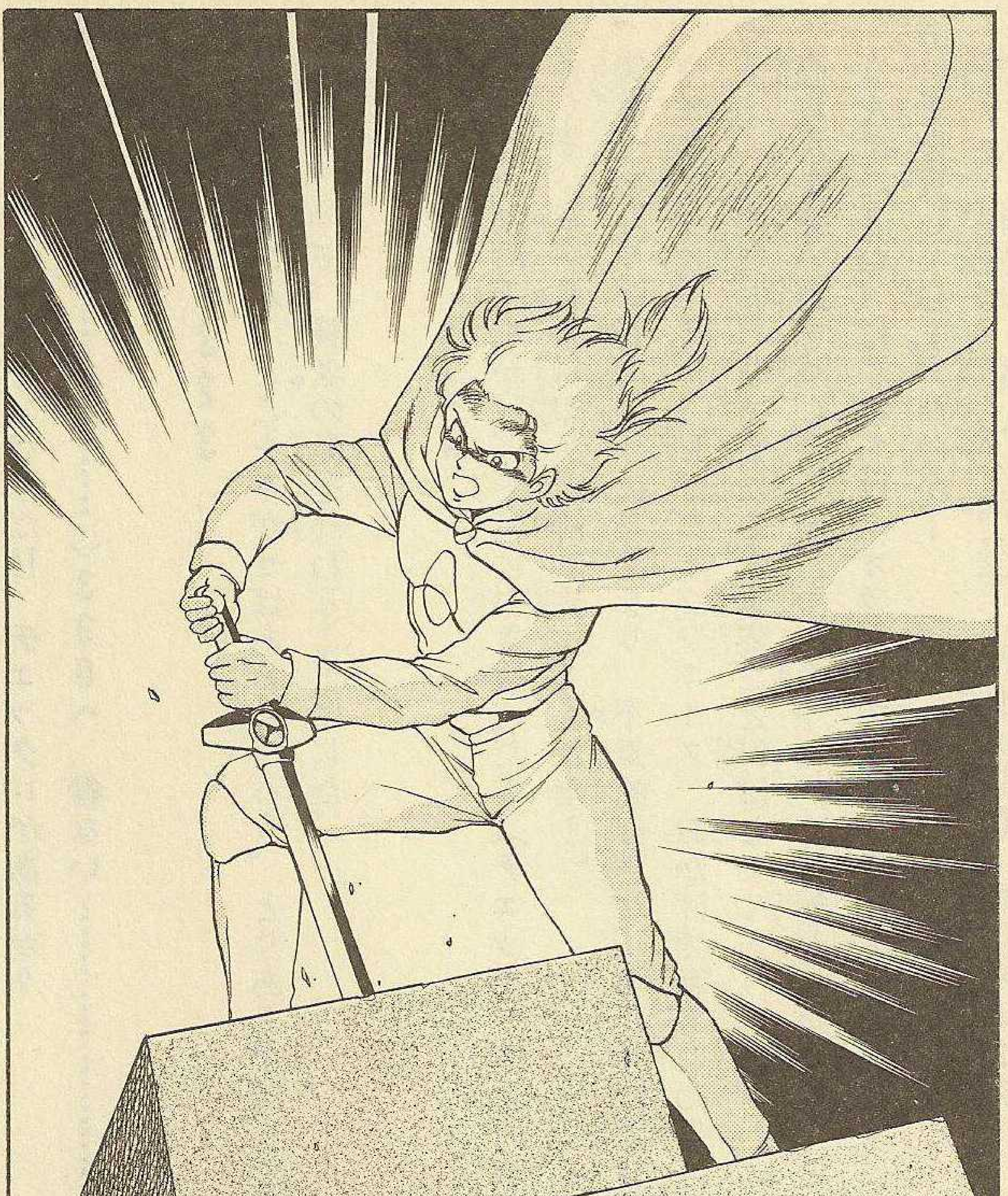
突然、あたりが夜のように暗くなり、不気味な声が、あたりに響いた。

「ウオオオオオオオオ。私はダークファルス。おかげで私もこの世に姿を現すことができる……。この礼に、おまえたちを世界ごと滅ぼしてやろう……」

高らかな笑い声を残して、そいつの去っていく気配がした。なんと強大な気だ!!

なんてことだ。ぼくたちは『オラキオの剣』を手に入れる代わりに『邪悪なる力』の復活に手を貸してしまったのか！

怒りと、絶望が、体中を満たす。感情の嵐に、頭の中が白熱し、真っ白になる——。



324●剣に手をかけ，一気に引き抜いた！　その時，あたりが夜のように暗くなり，不気味な声が響いた。

次の瞬間、ぼくは究極の破壊テクニック『メギド』を覚えていた！

「神殿が崩れます！」

ミューの声に、はっと我に返る。ぼくたちは、あわててアクアシーレンに乗りこんだ。

●HPが85以上……⇩495へ　**●84以下……⇩473へ**

325

壁の中から、妖花の精フラニーが2体と、注射ロボット、ラストディバイドが現れた！

☆バトル　フラニー×2、ラストディバイド＝80　シーン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……⇩349へ　**●負けた……⇩363へ**

326

「サイレン！　なぜあなたがここに」

ミューが目を見開いた。サイレン……？　父と戦ったという、あのサイレンか！

●戦う……⇩344へ　**●様子を見よう……⇩401へ**

327

「わたしの名はミューーン……。オラキオ様、わたしのオラキオ様はどこ？」

女の子と思ったのは、女性型アンドロイドだった。彼女は、うつろな目でしきりに何かを捜している。これが、ハサタカで聞いたロボットなんだろうか（チェックh）。
「かわいそうに……。ああやって、何十年も捜しつづけているのかしら」
ミューが目に涙を浮かべてつぶやいた。

⇩184へ

328

なおも歩いていくと、前方が明るくなってきた。出口だ！
洞窟を出ると、前方に町があるのが見えた。
「『栄光の町』グランディレクタへようこそ」
町に入ると、優しげな瞳をした女の人が、ぼくたちを歓迎してくれた。よし、まず宿屋で体力を回復してから、情報を聞こう（HPプラス10）。
「わあ、かっこいい！」宿屋を出たとたん、かわいらしい女の子に声をかけられた。
「そこにいるのは、シーレンタイプのロボットでしょ？　パーツ次第で、水に潜れたり、水上を走ったり、空を飛んだりできるっていうじゃない。ねぇね、どこで買ったの？　わたしに譲ってくんないかな。お金はもちろん出すから」
いきなり、何を言いだすんだこの子は。もちろんぼくは、キッパリと断った。
「えー、残念。あ、じゃあさ、ルラキル様の居場所を知らない？　オラキオ様の双子のお

兄様なんだけど、最近ふたたび、お姿を現されたんですって。この『アリサ3世』のどこかにいらっしゃるそうなんだけど、あなた知らない？」
「知ってるも何も……、ルラキル様のことなんて、今はじめて聞いたぐらいで」
「なぁんだ。あーあ、一度でいいから、お会いしてみたいなー」
少女は、ブツブツと呟きながら去っていった。いったい何なんだ。ミーハー娘が。
気を取り直して、町の人々に話をきく。捜し求める情報は、8人目の男が持っていた。
「砂漠の世界の宝を捜すための機械……？　ああ、水に潜るための機械か。それならルーンに反抗した人々が持っている。何でも西の洞窟に隠したって話だが」
西の洞窟か！　ぼくは、お礼を言ってその場を立ち去った。**チェックtは？**

●ある……⇩**403へ**　**●ない**……⇩**413へ**

329

さらに進んで行くと、行き止まりになってしまった。もどろう。

⇩**383へ**

330

地下にはいると、石畳の通路が北へのびていた。

⇩**32へ**

331

洞窟に入ってちょっと歩くと、すぐに宝箱が見つかった。しかし、それを取り巻くようにして守るロボットとモンスターの大群が……。HPは？

●68以上……⇩465へ
●67以下……⇩370へ

332

そんなに寄り道ばかりはしてられない。今度こそまっすぐリークに行くことにした。

⇩246へ

333

さて、古代の機械は手に入れたものの、これからどうすればいいんだろう。砂漠の世界に『ライアの宝』があるといったって……。これは、水に潜るための道具。砂漠に、潜るほどの水がある場所なんて、存在するんだろうか。サブマリンパーツをいじくりまわしていると、西の洞窟のことを教えてくれた男の人が近寄ってきた。

「それは古代の機械！　すごいな、もう手に入れてきたのか」

「ええ、でも、砂漠の世界でどうやって使ったらいいのか……」

「なんだ、知らないのか？　『忘れられた町』ハサタカのすぐ南に、水が湧いている場所

があるだろう。そこでロボットに装備させるのさ」
そうだったのか。礼を言って、ぼくがそこから立ち去ろうとすると、今度は老婆が声をかけてきた。

●**話してみる**……⇩463へ
●**無視する**……⇩374へ

334

世界と世界をつなぐ、いつもの、機械で埋めつくされた通路。それは、入ってすぐ、ふたまたに別れていた。

●**右へ**……⇩382へ
●**左へ**……⇩348へ

335

T字路に来た。さて、今度は……。

●**北へ**……⇩402へ
●**南へ**……⇩383へ
●**東へ**……⇩308へ

336

大型恐竜メタルテイルは、長い首をのばし、鋭い牙で攻撃してきた！　あやうく、地

面に転がってかわしたぼくだが、それはバータを使う厄介な敵、スターアイの前に無防備な姿をさらけ出す結果になった。
背中に、バータの水流が突き刺さる！（**HPマイナス9**）
ミューがクローで、ヤツを切りつけた！　まっぷたつに裂かれるスターアイ！　残りをシーレンのショットガンが片づけ、ぼくたちはリークの城下町へと入った。
胸の中にモヤモヤした不安がつのっていく。ライアの民をモンスターが襲うなんて、この世界で、何かが起きているに違いないんだ。

⇩375へ

337

どうにか敵を倒し（**HPマイナス2**）、ほっと一息――も束の間、10メートル歩くか歩かないかのうちに、通路の奥からまたロボットだ！　ウェザールが3匹に、オクトレグも3匹。……こいつら、3匹ずつでしか出てこられないのか？

☆バトル　ロボット軍団＝68　アイン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……⇩350へ　●負けた……⇩310へ

338

『オラキオの剣』を探そう。

ミューが、祖父と共に旅していたときに聞いたという伝説の詩を思いだした。
「リークの世界の、ヤータの村から南へ進んだ海底に、神殿が沈んでいるんです。その上を船で通ったとき、渡し守のおじいさんが詠ってくれて。たしか、オラキオが『邪悪なる力』の名を自らの『黒い剣』によって、神殿ごと海底に沈めた……という内容でした」
よーし、リークの世界だな!?

⇩377へ

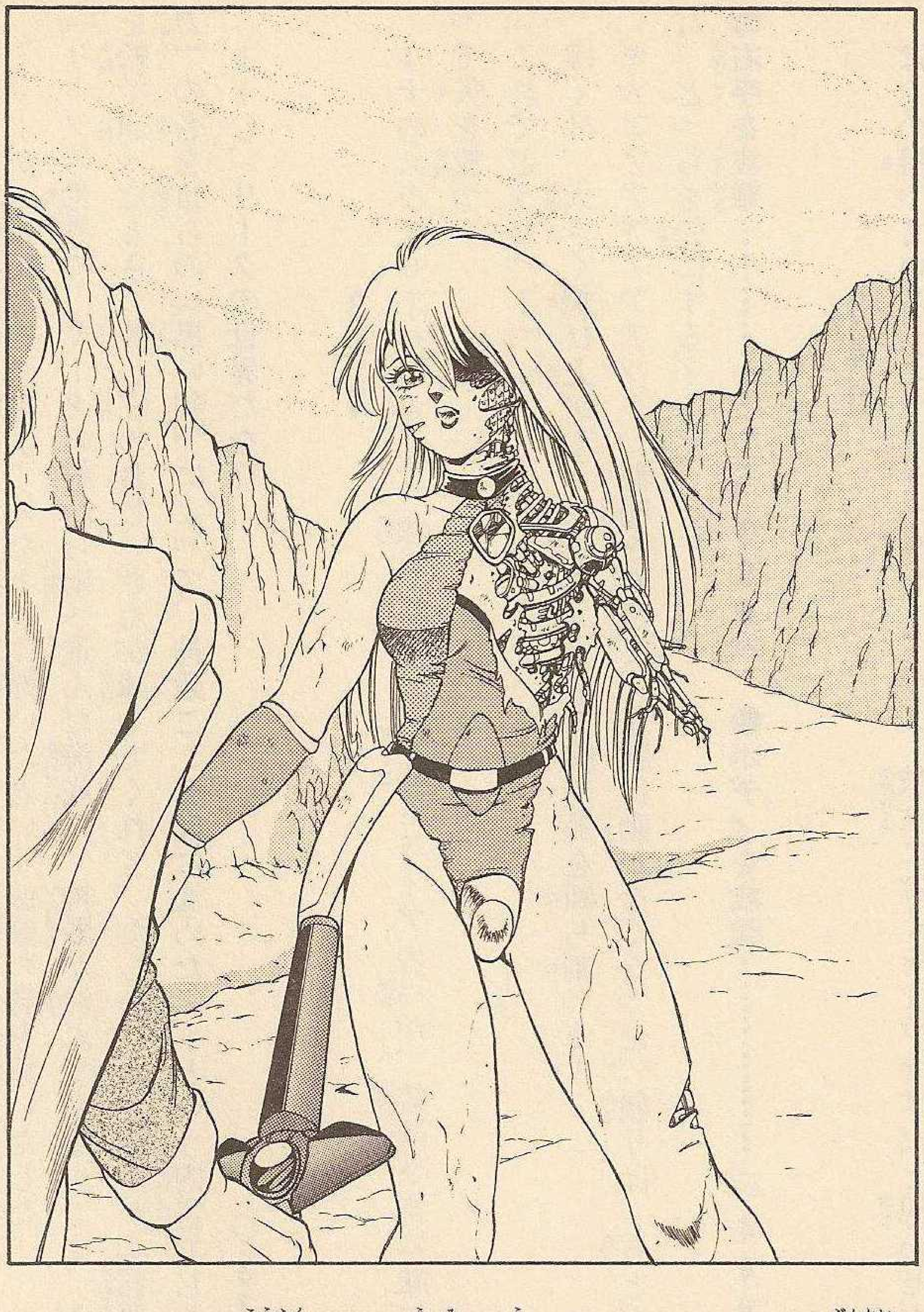
339

ルナのスライサーが、左腕の顔を裂く！　同時にライアの弓が、続けざまに顔に向かって矢を放つ！
「これでどうだっ！」
ぼくは、大きく飛び上がると、ネイソードで腕の顔を断ち割った！　ギャアアアアアアッ！　悲鳴をあげて、左腕は動かなくなった。残りは、右とボディだ。どっちを先にする？

●右手を攻撃……⇩366へ
●ボディを攻撃……⇩440へ

340

ぼくの持っている『オラキオの剣』。それが、彼女にぼくをオラキオだと思わせたのか



340●ミューンは幸福そうな微笑を浮かべて，カタカタと分解してしまった。伝説の『ミューンクロー』を残して……。

……ミューンは、いとおしそうに剣に触れ、ぼくに触れ、そして。
「ああ、やっとオラキオ様に会えた……」
幸福そうな微笑みを浮かべて、カタカタと分解してしまった。……砂の上には、陽の光をはじいて『ミューンクロー』が残されていた。
「これで、『伝説の武器』がすべてそろいましたね」
ミューンを砂漠に埋め、静かに黙禱していたミューが、涙を振りはらうように言った。
「賢者の島へ向かいましょう」

⇩468へ

341

ラコニアンソードで、スターアイを切りつける！　だが、すかさずバタフライがスターフォースを唱え、傷を治してしまう。１匹１匹はたいした敵ではないのだが、なんといっても、数が多すぎる。全部の敵が地に倒れ、動かなくなったときには、ぼくたちも疲れはてていた（**HPマイナス10**）。これからの道のりが思いやられる……。

⇩446へ

342

キードスターは、いきなりフォイエを使ってきた！　火球が、頬をかすめていく（**HPマイナス8**）。おのれ！　ぼくは、剣を構えなおした。

⇩432へ

343

体についた明かりをまたたかせながら、ウィンカーが突っこんでくる！　避けきれずに、ぼくはヤツの体当たりをくらってしまった（**HPマイナス6**）。ウィンカーはそのまま、リンの方へ！　リンの体がスッと沈んだかと思うと、彼女のナイフが、ウィンカーの頭をはねとばした！

「ふん。こんなヤツにてこずるなんて、情けない」リンが、冷たい口調で言い放つ。ムッときたけど、こんなところで仲間われをするわけにもいかない。グッと我慢だ。

通路はまもなく行き止まりになってしまった。しかたない、もどろう。

⇩**32へ**

344

「きさま、今度は何を企んでいるんだ！」

ぼくはサイレンに切りかかっていった！　不思議と、ヤツは抵抗する様子がない。十分な手ごたえがして、サイレンがグラリと揺れる。**チェックqは？**

●**ある**……⇩**416へ**　●**ない**……⇩**398へ**

345

風船のようなバルーン型ロボットのウェザール2が、ザンを唱えてきた！　ぼくたちを

切り裂く、真空の刃!!（HPマイナス7）
「お返しだ！」ぼくは時間のテクニック、フォールを使って、ヤツのテクニックを封じこめた。シーレンがヤツらにグラブトを見舞う。一瞬のうちに、押しつぶされるロボットたち。しぶとく生き残ったポインターロボットのビーロルーガが、大きく吠えながら、こちらへ躍りかかってくる！　それをあっさりとかわしておいて、リンのナイフが真一文字の軌跡を描く！　1体がまっぷたつになって床に転がった。よし、まず半分は片付けたぞ！

☆バトル　サイレン、ビーロルーガ×2＝78　アイン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……⇩322へ　●負けた……⇩283へ

346

突然、ロボットの大軍団が現れた！　二重三重に列をつくり、ぼくたちを先へ行かせまいとしているようだ。……ということは、この先にランがいるのか？

☆バトル　ロボット軍団＝79　アイン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……⇩180へ　●負けた……⇩267へ

347

マーリナはシール国の王女で、ライルの従妹であった。そして今はシールの国に連れも

どされているのだそうだ。
シール国は島の国である。しかし魔法で守られており、船で近づくことができない。シールの国に渡るためには、サテライトシステムを作動させねばならないのだ。
そして、それを動かすカギとなるのが、リナの持っている月の石と、シューソランの王家に伝わる月の涙であるという。サテライトシステムのことなら、覚えている。あの気象コントロールタワーにあった、月を動かす装置のことだ。
ぼくらはさっそく砂漠の世界へむかった！　これで2度めの砂漠世界だが……。

●タワーへ直行する……⇩210へ
●ハサタカへむかう……⇩92へ

348

慎重に通路を進んでいく。と、突然、横の壁から針が！　慌てて身を引いたが、それは胸にかすり傷をつけた（HPマイナス4）。

⇩325へ

349

宙に浮く巨大な花のうえに座った2体のフラニーは、並んで口から紫の液体を吐いた！　この液体にちょっとでも触れれば、たちまち毒に侵されてしまう！　ぼくは、右に、左に、フットワークでそれをかわしておいて、スキを見てヤツのふところに飛びこんだ！

フォイエ！　至近距離で放った火球は、たちまちフラニーの体を燃え上がらせた！　ヤツは、悲鳴を上げ、苦しがってメチャクチャに暴れる。驚いたもう1体は、あわてて避けようとしたが間に合わず、巻きこまれて一緒に燃え上がった。

ラストディバイドは、ミューがクローで片をつけた。

⇩328へ

350

剣を構え、ぼくはウェザールめがけて切りこんでいった！　こんしんの力をこめて、ヤツの頭に剣を突き刺す！　やった！　ヤツは、バチバチと火花をまき散らして、床の上に崩れ落ちた。こいつら、頭の装甲は弱いようだ。

弱点がわかってしまえば、あとは楽だった。ぼくたちは、ヤツらの頭をつぎつぎと叩きつぶし、その動きを止めていった。

さらに通路を歩いていくと階段があった。この先が城への入り口の階段に立ちふさがるように立つ人影……敵か？　いや、女の子だ。

●様子を見る……………⇩162へ　●うしろに下がる……………⇩362へ

351

とにかく、みんなの無事な顔を見たい。西の洞窟に行くことにした。

「では、私がご案内いたします」
シーレンが先頭に立った。そうか、彼は西の洞窟に住んでいたんだっけ。⇩163へ

352

「べつに、ぼくたちは、キミたちのご主人様に危害を加える気はないんだ。話を聞きたいだけなんだよ」
「ソレデモ、アナナタチガ、ゴ主人様ノ命ヲ奪ウンデス。ワタシタチニハ、ワカリマス」
言うやいなや、ロボットたちは、ぼくたちに襲いかかってきた！　長い手で、ぼくの足を殴る。いたたた。むこうずねをやられてしまった（**HPマイナス15**）。
どうやら、話してわかる相手じゃないようだな。

●**戦う**……………⇩414へ　●**でも我慢する**……………⇩243へ

353

レーザーナイフを構え、サイレンに向かった。しかし、必殺の一撃は宙を切った。右手首に痛みが走り、ナイフが叩き落とされる！　ちっ、だが、ナイフはもう1本ある！（**HPマイナス3**）。左手のナイフを持ちかえ、ヤツの喉元めがけて切りこんでいく！　レーザーナイフは銀色の軌跡を残し、サイレンの喉を横に切り裂いた！　やった!!　力を失い、

サイレンはゆっくりと倒れていった。

⇩263へ

354

「死ねっ！」エビルサイドは、そう叫ぶとグラブトのテクニックを使ってきた。
とたんに、重力波がぼくたちを押しつぶそうとする（HPマイナス1）。
ぼくはその力に逆らわず、床を転がりながらヤツに近づいた。その間、シーレンとライアが援護射撃をしてくれる。一足一刀の間合いに入りこんだ！
「ええい！　こしゃくな！」エビルサイドが、剣をふるう。
だが、こっちの方が速い。ぼくは、ヤツの胸めがけてネイソードを突き上げた！
エビルサイドは血しぶきをあげつつ、悲鳴とともに倒れた。

⇩454へ

355

猟犬のような鋭い身のこなしで、ポインターロボット、ビーロルーガが宙を跳んだ！
それをスライサーで、切り裂くラン！　しかし、同時にヤツの爪が彼女の腕をえぐる！
白い腕に、血が流れた（HPマイナス13）。
「大丈夫ですわ」無理して微笑んでいるが、顔が青い。こいつら、許さない！　ぼくは敵の物理的攻撃をストップさせる時間のテクニック、ナイトを使った。攻撃能力を失っ

たヤツらを次々と叩き切る！　ビーロルーガ2体と、バルーン型ロボットのウェザール2を3体片づけた。

☆**バトル　サイレン、ビーロルーガ＝80　アイン＝HP＋Cで戦います。**

●**勝った**……………………⇩322へ　●**負けた**……………………⇩283へ

356

この中に、ルラキルが……。ぼくたちは、互いにうなずきあい、扉に手をかけた。

ギイイイイ……。きしんだ音をたてて、扉が開いた。薄暗い広間に目が慣れてくると、奥の壁に彫りこまれている不気味な神像と、その前に立つ、ひとりの男の姿が見えてきた。

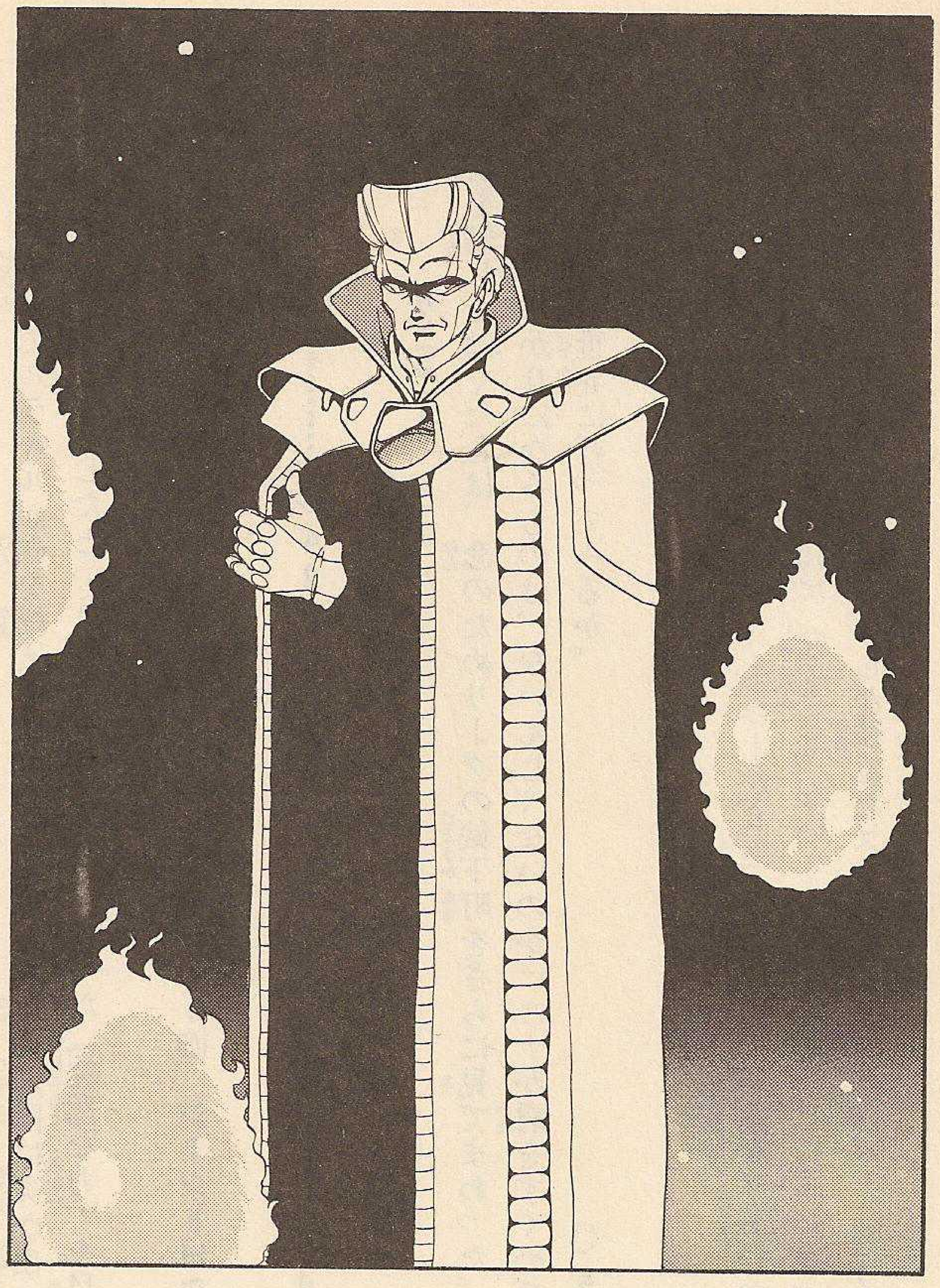
「ついにここまできたか、我が弟の血を引くものたちよ……。私はルラキル。『滅びの神』ダークファルスに魂を売った者だ」

すでに予想はついていたこととはいえ、ハッキリとルラキル自身の口から告げられると、新たなショックに体が揺れた。それはみんな同じらしく、ライアが絶叫する。

「あなたが……、英雄オラキオの双子の兄であるあなたが、なぜ！」

「おまえはライア！　……そうか、妹だな。おまえたちには、わかるまい。大切なものを失ったものの悲しみなど……。千年前、私は戦争によって妻と子を失った……。その時思ったのだ。世界などいらぬ、滅びよ！　と……」

356



356●ルラキルの周囲に炎が出現した。もう戦うしかないのか。
しかし，英雄オラキオの双子の兄である彼が何故!?

ゆっくりした動作でルラキルが剣を構えた。ポッ、ポッと、彼の周囲に炎が出現する。
「だから、だから戦争を起こしたというのか！　封印されていた『邪悪な力』を目覚めさせ、この平和な世界を争いで満たしたのか!!」

☆バトル　ルラキル、フィアルマ×3、ブルーフィアルマ×3＝105　シーン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩486へ　●負けた……⇩392へ

357

ジャマ者を倒したぼくたちは、念のためリークの城下町をさらに見てまわった。
「ふーっ、特に手がかりになるものは、ないんじゃないのか」ルナが肩をすくめていった。
いよいよ、最後の世界に行ってみるか。

⇩492へ

358

もどろうとすると、今度はエビルウォーカーが6匹も出現！　いきなり襲いかかられて、肩に傷を負う（**HPマイナス10**）。冗談じゃない！　ぼくはとっさに宝箱をつかむと、かつぎ上げてそのまま投げつけた。ヤツらが怯んだスキに逃走する！

⇩280へ

359

また矢が出てこないとも限らない。さいわい、シーレンの傷はたいしたことはなかったが……。ぼくたちは慎重に通路を逆もどり——しようとしたら、また矢だ！　かわしたつもりが、手の甲をかすった（**HPマイナス7**）。くそ。いまいましいワナめ。傷をなめつつ、T字路にもどる。

⇩452へ

360

アスチルスの手刀が、ぼくの首筋に！　決定打はかわしたものの、ダメージは大きかった（**HPマイナス10**）。思わず膝をついたぼくをかばうように、ランとリンが飛びだした。ランのスライサーが、レッドディバイドたちを横一文字に裂く！　リンが右のナイフでアスチルスの腕を切り落とし、左でゲルアーマーの胴を払う！　女性陣の活躍で、敵は一掃された。しかし、通路は行き止まり。もどろう。

⇩130へ

361

なおも調べていると、廃墟のなかから敵が現れた！　なんとか撃退したものの、フォイエをくらって、足を痛めてしまった（**HPマイナス8**）。これ以上、何も見つかりそうにないし、あきらめて別の世界へ行こう。

⇩197へ

362

ヒュン！
ぼくたちがうしろに下がったとたん。間一髪、目の前を少女のナイフがかすめていった。
「な、何をするんだ」
「ほざけ！　この裏切り者」少女は、油断なく身構えながら口を開いた。

⇩229へ

363

フラニーは、宙に浮かんで、口から毒を吐く厄介な敵だ。毒を浴びないよう必死になってかわし続ける。だが。
グサッ！　フラニーにばかり集中していたぼくは、足に鋼の注射針を刺されて膝をついた（**HPマイナス8**）。いつのまにか、ラストディバイドが足元に来ていたのだ。くそ、小型だからと、甘くみていた！　ぼくは、膝をついた姿勢のまま、両手を前にだし、バータを放つ！　水圧に怯んだ敵を、シーレンがショットガンでねらい撃ち！　ヤツらは、たちまち活動を停止した。

⇩328へ

364

賢者の島には洞窟があるだけだった。入っていくと、薄暗い洞窟の中で、4人の賢者た

ちが暮らしていた。ぼくたちが『最強の武器』の名前を教えてほしいと言うと、
「愚か者！　封印された特別な名前を知りたければ、まず『伝説の武器』を集めよ。5つの『伝説の武器』こそ、封印をとくための印。それなくしては、教えることはできん！」
と、怒鳴られてしまった。しかたない、まず『伝説の武器』探しだ。そう思って、そこを立ち去りかけると、入り口にロボットが！　なんとシーレンそっくりだ!!　⇩326へ

365

満身の力をこめ、ヤツの胴へ剣を振るう。だが硬い装甲に空しくはじき返される。シーレンが捕まった！　鋭いキバがシーレンののどに突き立てられる（HPマイナス3）。
そのとき、電光が2体のロボットを包みこみ、やがてランキードが体のあちこちから煙を立ち上がらせて倒れた。ぼくとミューは顔を見合わせた。
「シーレン、今、何をやった？」
「わかりません。恐らく、わたしの体に組みこまれた防御システムの働きでしょう」
とにかく助かった。早く通路を抜けよう。　⇩31へ

366

シーレンとライアに援護射撃を頼み、ぼくは、右腕に向かって切りかかっていった！

右腕の顔の眼球に、ネイソードが突き刺さる！　ドクドクとあふれる緑色の体液。グオオオオオオ！　右腕は、苦しがってメチャクチャにバータを放ってきた。水の剣が、ぼくたちをなぎはらう（**HPマイナス8**）。しかしそれも、最期のあがき。まもなく、右腕はぴくりとも動かなくなった。

⇩**474へ**

367

西に向かって進んでいくと……敵だ！

☆バトル　ウィンカー＝77　アイン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……⇩393へ　●負けた……⇩343へ

368

南に進んだが、通路はすぐに行き止まりになってしまった。なんだ。もどろう。

あともどりを始めたぼくたちの前に、突然敵が！　ヤツは、恐ろしいスピードでこちらに向かってきた！

「危ない、さがって！」先頭にいたリンを、突き飛ばす。同時に右肩に鋭い痛みが走った（**HPマイナス2**）。リンめがけて繰りだされたヤツの爪を、ぼくが受けてしまったのだ。

しかし、それぐらいでひるむぼくじゃない。両手にレーザーナイフを構えると、縦と、

横、十字にヤツを切り裂いた！
「こんなヤツ、わたし1人で片づけられたのに……だが、いちおう、礼は言っておく」
リンが、ムッツリとした表情でぼくに言った。頬が、微かに赤い。

⇩217へ

369

急に体の動きが鈍くなった。まるで見えない手に押さえつけられているようだ。重力波を操るグラブトのテクニックだ（HPマイナス8）。
この上さらに、デスマダーがムチをふるい、パラクラゲが『水の剣』を放ってきた。
「だめだ、このままでは分が悪い！　いったん引き返そう！」
必死の思いでそこから逃げた。敵は勝ち誇って追ってこない。

⇩261へ

370

敵は、突然攻撃をしかけてきた！（HPマイナス5）
多勢に無勢、かないっこない。逃げよう！

⇩314へ

371

「私はライアへの復讐心に燃え、ライアの民を殺し続けた。オラキオ様の掟を破って

……。だが、私はこの賢者の島で、オラキオ様の真実を知った……。私は、あの世でオラキオ様とライアに詫びがしたい……」
泣かないはずのロボットの頬に、一筋の涙が流れた。そして糸の切れた操り人形のように、床に崩れ落ちる。あとには『伝説の武器』のひとつ、『サイレンショット』が残った。
サイレン、安らかに眠ってくれ……。ミューが、声を殺して泣いていた。

⇩178へ

372

ヤツらは、ムチと火球の同時攻撃に出た。さすがよけきれない（HPマイナス15）。
「私にまかせろ！」ルナの放ったネイスライサーが、ふたりの怪人のムチをはねとばした。
ヤツらは慌てて火球を放ってくる。
ふん、今度は当たってたまるか！　ぼくはヤツらの懐に飛びこみ、ネオマダーの胸を突き刺した。そして、ライアの矢がデスマダーの喉を貫いた。
敵を倒したぼくたちは、先を急いだ。

⇩321へ

373

そういえば、祖父から聞いた覚えがある。砂漠をさまよう壊れたアンドロイドの話を。
確か、そのアンドロイドがミューンといったはず。

ぼくたちは砂漠の世界へと向かった。

⇩301へ

374

今は、『ライアの宝』を見つけることが先だ。ぼくたちは、とにかくハサタカの南の湧き水に向かうことにした。

⇩41へ

375

「ようこそ。リークは、シーン・ル・シールを歓迎する」
城下町に入ったぼくたちを迎えたのは、なんとこの城の女王、リンだった。
「サテライトのことを知って……おまえが、国民を連れて脱出したと聞いて、たぶんこちらへ向かっているだろうと思って待っていたんだ」
ぼくたちは、リンの勧めで城に招かれ、体を休めた（HPプラス10）。十分に休息をとったあと、女王の私室で、今までのことを詳しく話した。
「そうか……。アインは王として死んだか……」
豪華なソファに身を埋めるようにして、リン女王は呟いた。それから、ぼくが砂漠の西の洞窟に国民を避難させていると知ると、すぐに迎えの軍勢を出す手配をしてくれた。
「実は、今リークのあるこの世界も、大規模な争いが起こっているのだ。ライアの部下だ

ったルーンという男が、このドームの西半分を占領している……。ヤツは、千年前、もうひとつのサテライト、『紫の月』と共に、オラキオ様にはるか遠くへ飛ばされたはずだったのだが、冷凍睡眠で長い年月を生き延びたらしい。ルーンのモンスターは、我が母の故郷サテラを滅ぼし、侵略への手がかりとして、こちら側に橋をかけた」

瞬間、女王の目が怒りに燃え上がったが、すぐに目を閉じ、深いため息をついた。

「こんな戦いは、やめさせなければ……。ウワサだが、争いをやめさせる力を持つ『ライアの宝』が、砂漠の世界にあるという。ルーンもそれを狙っていたが、水に潜れずあきらめたそうだ。しかし、南西の別の世界にある古代の機械を使えば、手に入れることができるという……。シーン。行きたくても、王となってしまったこの身は、自由にはならない。だから、頼む。おまえが、行ってはくれないだろうか」

「頼むだなんて」

女王と向かい合って座っていたぼくは、ミュー、シーレンと共に立ち上がる。

「この戦いをやめさせる方法があるのなら、ぼくは、どんなことをしたって、それを見つけだします。たとえ行くなと言われたって、行きますよ」

実際、女王から聞いた情報に、ぼくはいてもたってもいられない気持ちだった。

そんなぼくを見て、女王はフッと笑みをもらした。

「さすがは、あの人の子供だな。そういうところは、そっくりだ。気をつけていけよ」

リン女王に見送られ、南西の国に向かうべく、ぼくは城下町を出発した。⇩385へ

376

「ひとつ、聞きたい。サテライト『青の月』を破壊したのは、あなたか」
「いや、それは違う」ルーンはキッパリと言いきった。
「私が、ライアの民であるあなたたちを攻撃するはずはない。信じてもらえぬかもしれんが……。サテラなどのオラキオの民の国を攻撃したのは、確かに私たちだ。しかし真実に気がついてから、私はオラキオの民を攻撃するのもやめた……。いま暴れているモンスターを作ったのは、何か別の力なのだ！」
真実の敵は別にいるということか……！　ぼくは、武器をおさめた。
「あなたの言うことを信じよう。……やったことをすべて許せるとは言えないけれど……」
その時だった。今まで、ずっとルーンの横で黙っていた少女が、口を開いたのだ。
「父上。父上のルーンスライサーをお借りしたい。私も代々が戦士であるエシル家の娘。父上のあやまちは、私があがないたいのだ」
少女は、ルーンからスライサーを受け取ると、ぼくたちをまっすぐに見た。
「私は、ルーンの娘、ルナ。あなたたちの戦いに、私も加えてほしい。世を戦乱におとしいれたものの娘として、つぐないをしたい」

揺るがない、強い意志を持った瞳。彼女は、どことなくリン女王にていた。気高く、激しい、火のような女性——。ぼくたちは、彼女の願いを聞き入れることにした**（ルナ仲間に。ＨＰプラス10）**。

「せめてものお詫びにこれを受け取ってほしい。シーレンタイプのロボットに装備させる、スカイパーツだ。各世界にある飛行場跡でシーレンが使えば、空を自由に飛べるようになるだろう。これを使って、雪の世界にある空中都市を訪ねるがいい……」 ⇩295へ

377

リークの世界へ行くまでに、何度か敵と遭遇した**（ＨＰマイナス7）**が、どれもあっという間に倒せた。マリンシーレンで海を渡り、海底に沈んだ神殿の上でそのままアクアシーレンに。神殿の内部へ侵入した。 ⇩419へ

378

村の中心は広場になっていた。そこには、なにか大きな機械がおいてある。道を行く人に聞くと、なんと、それこそ『紫の月』へ行くための、ロケット打ち上げ場だという。なんか、ずいぶん簡単にルーンのもとへ行く手段が見つかったなぁ。さて。

●まずは体を休める……⇩82へ
●すぐに月へ……⇩96へ

379

鋭い爪と、信じがたいスピードで、ヤツらは次々と攻撃してきた。ちっ、猫人間ダスウェルズに、スピードの点で勝つのは無理。ならば！
ぼくたちは、全員でテクニックを使った。さしもの怪物も、床に崩れ落ちる。
さて、T字路にもどることにしよう。

⇩478へ

380

ロボットたちの町、『忘れられた町』ハサタカについた。まずは宿屋で体力を回復して（**HPプラス10**）、道を行くロボットたちから情報収集だ。何かわかればいいけど……。
「コノ町ノ南デハ、ドコカラトモナク水ガワキダシテイルノダ。さぶまりんぱー一つガアレバ、ワキミズガドコカラクルノカ、シラベラレルノダガ」（**チェックk**）
？？？？　あの、ぼくは、なぜロボットとモンスターが組んで、人間を襲っているのか聞いたんだけど……。
「砂漠ニハ、壊レタあんどろいどガサマヨッテイル……」
だめだ。ロボットたちは、自分の話したい話題にしか興味がないらしい。時間を無駄にしちゃったな。でも、南の湖か……。何か、秘密がありそうだけど。

●リークへ行く……⇩332へ
●湖に行ってみる……⇩309へ

381

進んでいくと、またしても敵が現れた。魔術師リル・ハ・マ、女魔術師のトライハイトアーハ、それに空中に浮かんだ透明な怪物メタクラゲだ。

☆**バトル　敵混成軍＝110　シーンA＋HPで戦います。**

●**勝った**……⇩455へ　●**負けた**……⇩444へ

382

通路を右に向かって進んでいく。と、向こうから敵が出現！

☆**バトル　ロボットとモンスターの混成軍＝90　シーン＝HP＋Bで戦います。**

●**勝った**……⇩439へ　●**負けた**……⇩411へ

383

通路を進んで行くと、T字路が見えてきた。

●**北へ**……⇩335へ　●**東へ**……⇩329へ

●**西へ**……⇩186へ

384

洞窟を通って、グランディレクタのある世界へ移動する。途中、敵の奇襲を受け、傷を負った（HPマイナス9）。……町について情報を集めていると、老婆が話しかけてきた。
「パイロッタのことを知りたいんだね？　この世界の南西にある村だよ。そこに行けば、『紫の月』に行く手段が見つかるだろう……。月に行けば、ルーンに会えよう」
何？　ルーンは、もうひとつのサテライト『紫の月』にいるのか！
老婆は、気をつけて行くんだよ、と最後につけ足した。南西か、よーし。宿屋に泊まって、体力を回復させ（HPプラス10）、さあ、出発だ！

⇩443へ

385

この世界の西半分を占領しているという男、ルーン。そいつが、『青の月』を攻撃し、爆破した犯人なんだろうか。でも、ライアの右腕とまで呼ばれた男が、ライアの民を滅ぼすようなことをするとは思えない。とすると、他に誰か……ライアの民を恨んでいるようなヤツ……。そんなことをぼんやり考えていたら、また敵だ！　そいつらは、やっぱりモンスターとロボットの混成軍団だった。

☆バトル　デスアーマー、パープルラッピー×3＝86　シーン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……………⇩425へ　●負けた………………⇩448へ

386

イマジオメイジたちは、ザンのテクニックを使ってきた。小型の真空竜巻がぼくたちを襲う。かわしたつもりだが、体のあちこちから血がにじみだす（HPマイナス4）。

おのれ！　ぼくはネイソードをふるって、イマジオメイジを叩き切った。もうひとりのヤツも、シーレンの銃が倒している。

⇩311へ

387

「このままじゃ、らちがあかない！　全員で、いっせい攻撃だ!!」

ぼくたちは、一丸となってヤツに向かっていった。しかし、それこそが、ヤツの思うつぼだったのだ。

「ばかめ！」嘲りの笑みを浮かべて、ヤツが巨大な炎をぶつけてきた！　密集隊形をとっていたぼくたちは、まともにその炎をくらってしまった！

地獄の業火に焼かれながら、ぼくは、父と母の顔を思いだしていた……。

END

388

ぼくがジャンプしたとたん、エビルサイドはグラブトを使ってきた。強くなった重力

波のため、ぼくは床にたたきつけられる。背中に走る激痛！（HPマイナス12）
こうなれば……。ぼくは戦法を変えた。重力波に逆らわず、床を転がりながらヤツに近づいた。その間、シーレンとライアが援護射撃をしてくれる。
「こしゃくな！」エビルサイドが、剣をふるった。
だが、こっちの方が速い。ぼくは、ヤツの胸めがけてネイソードを突き上げた！
エビルサイドは、悲鳴をあげて倒れた。

⇩454へ

389

ラストディバイドが、銀色の注射針を振り回して攻撃してきた！　同時に、ダイマフラニーが、紫の毒液を吐き散らす！　針に注意すれば毒液が、毒液に注意すれば針が、ぼくたちに少しずつ傷を負わせていく。このままじゃ、なぶり殺しだ！（HPマイナス15）
ライアがすっとうしろに下がり、巨大な弓に5本の矢をつがえ、次々と放つ！　弓矢は、敵の急所を確実に貫き片づけた。さすがは、女神の妹。けた違いに強い。

⇩200へ

390

ぼくは、剣を構えサイレンに突っこんでいった！　だが、サイレンはその一撃をかわし、

ぼくの剣を叩き落とした!! くそ、手がしびれる（HPマイナス10）。
おっと！ ぼくは、自ら床に身を投げだし転がった。ヤツの一撃が、紙一重で空を切る。
剣を拾いなおし、ぼくは膝をついた姿勢のまま、下から上へ、切り上げる!!
やった！ 確かな手ごたえがして、サイレンはゆっくりと倒れていった。 ⇩263へ

391

だめだ。逃げよう！
腕に剣を受け、肩を爪でえぐられ、わき腹にフォイエをくらって、あきらめた（HPマイナス12）。こんな大群を相手にするなんて、最初から無理だったんだ。 ⇩314へ

392

ぼくの剣を飛び退けてかわすと、ルラキルは右手を突きだした。そこに赤い火球が出現した。フォイエのテクニックか！
「くらえ、小僧ども！」ルラキルが火球を飛ばし、炎の怪物——フィアルマとブルーフィアルどもも、ぼくたちを取り巻いた。さすがにこれでは逃げようがなかった。
ぼくたちは、悪の業火に焼かれ全滅した……。無念。

END

393

チカチカと、体についた明かりをまたたかせながら、ウィンカーが突っこんできた！　それを横っとびにかわしておいて、すかさず、レーザーナイフで、一刀両断！　ヤツは、まっぷたつになって転がった。
しかし通路はすぐに行き止まりになってしまった。しかたない、もどろう。　⇩**32へ**

394

シールのあった世界についた。ライスルで体力回復のあと**（HPプラス10）**、スカイシーレンで賢者の島へ向かった。ところが、賢者の島には、飛行場跡が見あたらない。しまった！　ここへは、船でなければこれないのか!?　**チェックpはあるか？**

●ある……………⇩**426へ**　**●ない**……………⇩**459へ**

395

まず、ミュークローを探すことにした。　⇩**241へ**

396

円筒の上にドーム型の頭を乗せ、細い手足でちょこまかとユーモラスな動きをするロボ

ットたち。ところが、ヤツらはメチャクチャ強かった。あっという間に、ぼくたちは空中都市から放りだされていた――。

END

397

T字路だ。東と西と南に向かって通路がのびている。どれにしようか。

●南へ……⇩217へ
●東へ……⇩287へ
●西へ……⇩17へ

398

ぼくの一撃を受け、サイレンは動かなくなった。やったぞ！

「愚か者！」賢者が怒鳴った。

「サイレンは、おのれの罪を認め、ここで静かに暮らしていたものを……。見よ。おまえの早合点のために、彼の持つ『サイレンショット』も壊れてしまったぞ」

しまった……。『伝説の武器』がひとつでも欠けてしまえば、『最強の武器』は手に入らない。後悔しても、もう遅い。ぼくたちの旅もここまで……。

END

399

「わたくしの『双子のルビー』の使い方を、ロボットたちは知りたがっていました……。父のライルから託されたものですが、きっとお役に立つと思います」
ランは、隠し持っていた『双子のルビー』をぼくに渡した。
「そういえば、父は……、父はどうしましたか？」
ぼくは、悲しい事実を彼女に伝えなければならなかった。ランの顔がみるみる曇っていく。ぼくたちは、いそいでライルのもとに帰ることにした。
砂漠の西の洞窟に着くと、驚いたことに、ライルが出迎えてくれた。
「お父様！」ランが、心配そうに駆けよっていく。大切そうに、ランを抱きしめながら、ライルはぼくに顔を向けた。
「ありがとう、アイン。……リークへ行くなら、ランの『双子のルビー』を使え。昔おれは、そのルビーで、この砂漠の世界から、リークの世界に忍びこんだんだ……」
思いがけないライルの言葉に、ぼくは言葉もでなかった。
「本当なら、おれが案内してやれるといいんだがな。かわりに、ランを連れていけ」
「でも……」
「いいから連れていけ。少なくとも、足手まといにはならんさ」
ライルは、ぼくに向かってランを押しだした。なおも断ろうとしたぼくは、ライルのう

しろで母が静かに首を振っているのに気がついた。そうか……。元気そうにみえても、やっぱりライルは……。
「わかりました。お言葉に甘えます」**（ラン仲間に。HPプラス10）**
ぼくたちは、みんなに別れを告げ、ハサタカで体力を回復してから**（HPプラス10）**、リークの世界へと向かった。

⇩300へ

400

こんな老人なんかにかまっていられるか！　ぼくたちは、一刻も早くサテライトに行かなきゃいけないんだ。少々、乱暴だが、ぼくたちは老人を押しのけて行こうとした。だが。
「ばかもの！　ライアの民などに、あの宇宙船が操縦できるものか」
老人の体が輝いたかと思うと、ぼくたちは一瞬にして弾き飛ばされていた。
つ、強い……。ここまで来ていながら、ぼくたちは、あきらめるしかなかった。

END

401

サイレンは、ぼくたちに敵意を持っている様子はない。**チェックqは？**

●ある……⇩416へ　●ない……⇩371へ

402

北へ進むぼくたちの前に、敵が立ちふさがった。鼻が妙に高いロボットが2体。ザンウエイターというタイプだ。

☆バトル　ザンウェイター×2＝93　シーンD＋HPで戦います。

●勝った……⇩470へ　●負けた……⇩449へ

403

ぼくは、一路、西の洞窟へと向かった。　⇩296へ

404

通路を進むぼくたちの前に、またしても敵が現れた。上級の魔術師ギガ・ラ・ルグ、ネオマダー、それにパラクラゲが1匹だ。

☆バトル　敵混成軍＝111　シーンA＋HPで戦います。

●勝った……⇩483へ　●負けた……⇩469へ

405

ウォールカードがカードの体を震動させ、真空波を放ってきた。ザンのテクニックだ！

（HPマイナス18）

「ちっ！　これでも食らえ！」　ぼくは痛みをこらえて、思いきり剣を振り下ろす。ウォールカードは、アッという間にまっぷたつになった。さすが『ネイソード』、すさまじいまでの切れ味！　仲間のほうもそれぞれの武器で、ほかの敵を倒していた。

⇩357へ

406

リークの城下町からすぐ南にある橋を渡って、西側へ。そのまま西へと進んでいくと、洞窟があった。ここがリン女王に教えてもらった、南西の世界へ行くための洞窟だ。

ぼくは、洞窟の中へと、一歩踏みだした。

⇩334へ

407

荒れ果てたサテラの城。爆発する『青の月』。脳裏に、あの時の閃光がまざまざとよみがえる。こいつが、こいつが争いを始めなければ――！

「今さら後悔したところで、死んだ人たちがもどってくるものか！」

ぼくは、ルーンに向かって飛びかかった。だが……。

「ルナ！」ルーンが驚愕の叫び声を上げる。ルーンの横に立っていた少女が、ヤツをかばって自分の身を投げだしたのだ！ 彼女の胸に、深々と刺さるぼくの――！

殺してしまった……。ライアの民の掟を破って……。

床に流れる血を見ながら、ぼくは、ただ呆然と立ちつくしていた。

END

408

北へ向かった。しかし、すぐに行き止まりに。T字路にもどろう。

⇩290へ

409

ブルーフィアルが、青い火花を散らして襲いかかってくる。ぼくは多少のヤケドもものとせず、そいつを無視してメギドサイドに切りかかった！（**HPマイナス3**）

肩口から一気に、ネイソードを振り下ろす。メギドサイドは、信じられないという顔をして崩れおちた！ 見たか！ ネイソードの威力!!

ブルーフィアルのほうは、仲間が片づけていた。速攻がうまくいった。メギドサイドにテクニックを使わせていれば、こんな簡単には勝てなかったろう。しかし幸運とはいえ、勝ったことには違いはない。ぼくたちは、奥へ進んだ。

⇩471へ

410

すぐにパイロッタの村の前までたどり着いた。しかし、足元には、広い長い川。あそこへ行くためには、前に立ちふさがるこの川を何とかしなきゃならない。
「ライア。『神秘の石』を」
ライアは、にっこりと笑うと川の前に立ち、透明で、美しい宝石を高く掲げた。
パァ……と、虹色の光が辺りを輝かせる。それは、川面を虹色に染め、次の瞬間！
なんと、川がまっぷたつにわかれ、パイロッタへの道が現れたのだ！
「さあ、今のうちに」すばらしい宝石の力に、言葉もないぼくたちを、ライアが促す。
ぼくたちはいよいよパイロッタへと乗りこんだ。

⇩378へ

411

敵は、小型ロボットウェザール2と、鳥の化物ラチープコック、それにハーピー類のナルヒ、ナルヒム！　ヤツらはいっせいに躍りかかってきた!!
ハーピー類のナルヒムの爪が、ぼくの肩をえぐる！（HPマイナス10）体勢が崩れたところを、すかさずウェザール2がザンを放ってきた。かろうじて、それはかわしたものの、ぼくたちは敵のチームワークの前に、手も足も出なかった。
「だめだ。後退する！」ぼくたちは、あきらめて左の道をいくことにした。

⇩348へ

４１２

フィアルマとブルーフィアルは全滅。だが、ザコ敵を倒しただけで油断したのはまずかった。一瞬のうちに、鋭い水の剣が突き刺さっていた。
バータのテクニック。ルラキルは、そんなものまで使えたのか!!
「ふははは、ダークファルス様に逆らうものは、皆こうなるのだ！　ふはははは」
ルラキルの狂ったような笑い声を聞きながら、ぼくは意識を失った。

END

４１３

ルーンの軍団は、思っていたより強い。武器に不安を感じていたぼくは、武器屋によって、ラコニアンニードルを手にいれた。これは針状の武器で、敵に向かって投げつけて使う。しかも、同時に何本も投げることができ、複数の敵に大きなダメージを与えることができる強力な武器だ。よし、これで戦闘力は大きくアップしたぞ！

⇩４０３へ

４１４

☆バトル　ロボット×２＝99　シーン＝ＨＰ＋Ｂで戦います。

●勝った……⇩３０６へ　●負けた……⇩３９６へ

☆バトル　ロボットとモンスターの混成軍＝85　シーン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩434へ　●負けた……⇩391へ

416

その時だった。シーレンの様子が、とつぜんおかしくなったのだ。

「いけない！　先ほどの怪我で、体内のエネルギーが暴走を……」

苦しげに、胸を押さえてうずくまる。

「爆発します……。は、ハヤク、タイヒ、タイヒ……」

声が機械的に変化したかと思うと、ぼくたちが逃げる間もなく、彼は大爆発を起こした。

END

417

ネオマダーが飛びかかってきた！　長いムチを自在に振り回し、ぼくの動きを封じこめる。とうとうぼくは、壁際まで追いつめられてしまった。このままでは、なぶり殺しだ！

「ちっ、それなら！」ぼくは、体を切り裂くムチにはいっさい構わず（HPマイナス9）、相手のふところに飛びこんでいく。これだけ近づけばこっちのものだ！

「これで、ご自慢の武器は使えまい！」ネイソードで下から上へ、切りあげた！
ほぼ同時に、ブラックマダーもシーレンの銃の前に倒れていた。

⇩356へ

418

ラッキー！　この項目を見つけたあなたはHPが10プラスされます。ただし、1回目の人のみ。2回目からはナシです。

HPは高い方が有利です。こまめに宿屋に泊まるようにしましょう。それと、なるべく戦いはさけて、話し合う努力をした方がいいでしょう。

419

神殿の一番奥の部屋に、台座に突き刺るようにして、抜き身の黒い剣があった。これが『オラキオの剣』なんだろうか。台座には、何か彫ってあるのが見えた。

『世界を滅びに導かん。我が名はダークファルス！』

●引き抜く……………⇩324へ
●引き抜かない……………⇩461へ

420

通路を北に向かって進んでいく。しかし、すぐに行き止まり。もどろう。

⇩457へ

421

ガッ！　ダイマフラニーが毒液を吐く！　跳びのいて避けたものの、飛沫が足にかかった。みるみるブーツが変色していく（**HPマイナス8**）。ぼくは痛みをこらえ、フォイエを放った。たちまち燃え上がるフラニー！　ディバイドは、ミューのクローと、ライアのバータであっという間に引き裂かれた。

⇩**200へ**

422

シーレンのネイショットが右腕に穴を開け、ルナのネイスライサーが腕を切り裂く！　しかし、どんなに大きなダメージを与えても、左腕がすぐに回復のテクニックを使ってしまい、まったく効果がない。このままでは、ラチがあかない。

そうこうするうちに、ダークファルスのボディが、バータを唱えてきた！　超高圧の水の剣が、ルナの肩口に突き刺さった！（**HPマイナス8**）

「おのれ！」お返しとばかりに、ルナはスライサーを投げる。

「シーン、こいつは先に左手を攻撃したほうがいい！」

⇩**339へ**

423

通路はまもなく行き止まりに。しかし運の悪いことに、そこには敵が立っていた！

☆バトル　ダスウェルズ×4＝91　シーン＝HP＋Eで戦います。

●勝った……………⇩379へ　●負けた……………………⇩445へ

424

さらに北に向かって進んでいくと、ようやく通路は行き止まりに。そして突き当たりには、宝箱がおいてある。開けてみると、やはり中身はマリンパーツだった！　これさえ手にはいれば、今のところこの都市ですることはない。外に出ることにしよう。

⇩117へ

425

ラッピーが飛び上がって羽ばたく。同時に肩に衝撃！　ぼくの体は地面へ投げ飛ばされた（HPマイナス2）。ちっ、重力波のテクニック、グラブトだ。

倒れたぼくに、ヘルアーマーの剣が！　間一髪、ぼくは剣でそれを受け止めた。そのまま剣をはね上げ、一気に振りおろす！　ヘルアーマーは、まっぷたつになって転がった。

ミューがクローでラッピーを片づけ、敵は全部片づいた。

ふう。サテライトの城で、ひととおりのモンスターたちを相手に、訓練は積んでいたつもりだったけど……ルーンの軍団は、さらにパワーアップされて強かった。⇩406へ

426

えーい、突撃！　ぼくたちは、無理やり胴体着陸を強行した。
なんとか、地上には降りられたものの、シーレンがかなり大きな怪我をしてしまった。
「大丈夫です」と笑っているけど……（チェック9）。

⇩364へ

427

ブラックマダーのムチがうなりをあげて襲いかかってきた！　鋭い風が、ぼくのマントを切り裂いていく（HPマイナス3）。だが、ふところに飛びこんでしまえば——！
ぼくは、間合いを計って、一気にヤツの元へつめ寄った。
「これだけ近づけば、ご自慢の武器は使えまい！」
ネイソードで下から上へ、切り上げる！　左右に分かれたブラックマダーが倒れた！
ほぼ同時に、ネオマダーもシーレンの銃の前に倒れていた。

⇩356へ

428

「賢者の島へ行かれるなら、この都市の下にいいものが隠されていますよ」
男の言葉に従って、まずは、この都市の地下を探検することにした。階段を下りて、薄暗い通路をのぞく。どうやらちょっとしたダンジョンになっているらしい。機械が壁い

っぱいに埋めこまれた通路を、北に向かって進んだ。

⇩186へ

429

なんだ。行き止まりじゃないか。
北へ行くと、道はすぐに突き当たった。しょうがない。帰ろう……と、思ったら！
突然、足元の床が抜けた。落とし穴か！（HPマイナス3）古風な罠に引っかかってしまったな。まったく恥ずかしい。と、とにかく十字路までもどろう。

⇩186へ

430

世界中を巡ったが、『ミュークロー』の手がかりさえもつかむことはできなかった。

END

431

東側の世界を探す。……あった！　巨大な都市が、空を漂っている。あれだな。
空中都市の入り口には、2体のロボットが立ちふさがっていた。ドーム型の頭にあるランプを点滅させながら、ぼくたちに訴えかける。
「オ願イデス！　ワタシタチカラ、ゴ主人サマヲ奪ワナイデ」

何なんだ？　どうやら、この2体をどうにかしないと先には進めないようだが……。

●**話し合う**……………⇩**352**へ　●**戦って先に進む**……………⇩**414**へ

432

砂地を蹴って、大きく飛び上がる！　キードスターの頭めがけて、思いきり剣を振り下ろした。

ガッ！　鈍い音がして、長方形の箱のようなヤツの体は、まっぷたつになって地面に転がった。残りの敵も、ほぼ同時に、ミューとシーレンが片づけた。

モンスターが、ロボットと一緒になってライアの民を襲うなんて。いったい、この世界はどうなってしまったんだ？　ぼくは何か悪い予感がしてたまらなかった。⇩**380**へ

433

両腕など、本体を倒してしまえば、ただのぬけがらだ！　ぼくたちは、ボディに攻撃を集中した。ところが、いくらダメージを与えても、左腕がすぐに回復呪文を唱えてしまう。

しまった、まず左腕を攻撃しなければ！

突然、ボディの顔が、火の玉を吐きだした！　こいつ、テクニックまで使うのか！

ライアが、避けきれずに一発くらってしまった（HPマイナス20）。

⇩339へ

434

狭い洞窟に戦いの音が響く。激しく長い戦いの末、ついにぼくたちは、全部の敵を倒すことができた。気がつくと、腕や足に、軽い傷を負っている（HPマイナス4）。でも、古代の機械を手に入れるためには、こんな傷ぐらい……。

しかし、宝箱のなかに入っていたのは、レーザーソードだった。そ、そんなぁ。おまけにこの剣は、今装備している武器より弱いのだ。まったく、骨折り損のくたびれ儲けとはこのことだ。

⇩358へ

435

通路をどんどん進んでいくと、北と西への分岐点だ。南にも道はのびているが、あっちは入り口なので、関係ない。さて、どっちへいこうか。

●北へ……⇩482へ　●西へ……⇩234へ

436

ブルーフィアルがせわしなく周囲を飛び回る。ぼくは、そのうるさいハエのようなヤツ

を一気に切り落とした。ここでぼくは、自分のミスに気づいた。真に恐ろしい敵は、メギドサイドの方だったのだ。ぼくは、ヤツにテクニックを使う時間を与えてしまったのだ！

たちまち、自分の体が重くなる。骨がきしむ音が聞こえてきそうだ（**HPマイナス10**）。

「ふふふ、どうだ、私のグラブトは」

「く、くそ！」ぼくは、ヤツのさっきのセリフを思いだした。こんなヤツに負けるわけにはいかないんだ！　満身の力を振りしぼり、ジャンプ！　ヤツの肩口から一気に、ネイソードを振り下ろす。メギドサイドは、信じられないという顔をして崩れおちた。

ぼくたちは、さらに奥へ進んだ。

⇩471へ

437

T字路だ。今度は、どっちだ。

●北へ……⇩404へ　●東へ……⇩472へ
●西へ……⇩481へ

438

ぼくは、いつでも戦いに移れるように構えながら、ヤツがしゃべるのを聞いていた。

「私は千年前、ライア様の片腕としてオラキオと争った……。しかし力及ばず、オラキ

オにサテライトごと追放されてしまった。だが、私は冷凍睡眠によって時を越えた」
ルーンは、ぼくに穏やかな瞳を向けた。穏やか──いや、力がないんだ。まるで殉教者のような、あきらめきった静かな瞳。この世のすべての苦しみを知りつくしたような……。
敵と思いこんでいたルーンの意外な反応に、ぼくはとまどいを覚えた。
「目覚めたとき、私は復讐心に燃えて、オラキオの民を苦しめ続けた……。妹が、オラキオの民に捕らえられたのも、私の復讐心をあおった。だが……、だが私は間違っていた！　取り返しのつかないことをしてしまったのだ……」
ルーンの瞳から、ひとすじの涙がこぼれる。後悔しているというのか？

●許す……………⇩376へ
●許さない……………⇩407へ

439

敵は、小型ロボットウェザール２と、鳥の化物ラチープコック、それにハーピー類のナルヒ、ナルヒム！　ぼくたちはヤツらに向かって突っこむ!!
ミューのクローがヤツらを引き裂き、シーレンのショットガンが穴を開ける！　敵が弱ったところへ、ぼくのバータが一閃　あっという間に、敵は動かなくなった。
気がつくと、ミューの腕から血が流れていた（**HPマイナス７**）。ハーピーの爪でやられ

たらしい。だが、たいした怪我ではないようで、すぐに出血は止まった。

⇩460へ

440

ぼくたちは、ボディに向かっていっせいに攻撃をしかけた。
だが、そうはさせじと、右腕が、フォイエの連続攻撃をしかけてくる！　しかも、同時にボディがバータを唱えてきた！　このダブル攻撃に、さしものぼくたちもかなりのダメージを受けた（**HPマイナス25**）。さすが、同時にふたつのテクニックを操るとは！
「見てらっしゃい！」ミューのネイクローで引き裂かれる右腕の顔！　やったぞ！　フォイエを放つ瞬間を狙ったんだ！　シーレンも、ネイショットを撃ち続ける。ついに、悲鳴をあげて右腕が動かなくなった。さすがに強靱な生命力だった。

⇩474へ

441

「ずいぶん活気のない村だなあ……」
地上に降りてみたものの、村にはほとんど人気がなかった。こりゃ、無駄足だったかな。
「シーン、あそこに老人たちが！」
噴水の近くに、５人の老人たちが立っていた。何か、不気味な感じがするけど……。

●**話を聞く**……………⇩257へ
●**やめる**……………⇩466へ

442

さすが苦労して手に入れただけのことはある。『最強の武器』ネイソードはあっさりとウォールカードをまっぷたつに切り裂いた。仲間のほうもそれぞれの武器で、ほかの敵を倒していた。楽勝といいたいけど何人かが傷をうけた（**HPマイナス5**）。**⇩357へ**

443

ひたすら南東へと向かう。黙々と歩くぼくたちの耳に、ブーンという機械音が聞こえてきた。身構えるぼくたち。案の定、岩陰から、妖花の精ダイマフラニーと、注射ロボットのラストディバイド4匹が出現だ。

☆バトル　ダイマフラニー、ラストディバイド×4＝88　シーン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩421へ　●負けた……⇩389へ

444

シーレンが銃を発射！　一瞬で粉々になるかと思われたメタクラゲだが、なんとそれをかわし、触手を伸ばしてきた。その先から、剣のように鋭い高圧の水流がほとばしる。

ぼくたちは、それに体を刺された。

バータだ！　あんなザコ敵がバータのテクニックを使えるとは！

たかがメタクラゲに気をとられたのが、命取りになった。次の瞬間、リル・ハ・マとトライハイトアーハが放った火の球が、ぼくたちをこの世から消し去ったのだ。

END

445

猫人間ダスウェルズは、鋭い爪を使って攻撃してくる。そのスピードは非常に速く、普通の人間には、その姿を見ることも不可能だ。こいつ相手では、傷のひとつやふたつしかたない。ぼくは、怪我を覚悟でヤツの懐まで飛びこんだ！　肉を切らせて骨を断つ!!

ザクッ！　音をたてて、胸が布地と共に切り裂かれる！（**HPマイナス5**）同時にぼくもフォイエを放つ！　至近距離からの攻撃に、さしもの化物も床に倒れた。

残りのヤツらも、全員のテクニック攻撃で倒し、さて、もどろう。

⇩**478**へ

446

しばらく歩くと、右手の方に岩場が見えてきた。あれか……？　近寄ってみると、案の定、岩壁に大きな穴が開いている。穴は、ずっと奥の方に続いているようだ。ここに、古代の機械があるんだな。

⇩**331**へ

447

ダークファルスが、ぼくたちに向かって高熱の火の玉を吐く！　ぼくたちの周りで、次次と炸裂する炎のかたまり！　フォイエのテクニックを口から放射するなんて。そのフォイエ攻撃に阻まれて、ぼくたちはまったくヤツに手出しができない。

「ハハハハ！　どうした、さっきまでの勢いは！」

☆バトル　ダークファルス＝78　シーン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……………………⇩500へ　●負けた……………………⇩387へ

448

デスアーマーの硬い装甲に、なかなか致命傷を与えられない。そうこうしているうちに、逆にヤツの剣がぼくのわき腹をかすめていった（**HPマイナス7**）。　⇩425へ

449

先制攻撃をかけようと、ぼくは突進した。

だが、敵はすかさずザンのテクニックを使ってきた。狭い廊下いっぱいに真空波の竜巻が発生し、ぼくたちの体を切り裂く！　これじゃ逃げ場がない！（**HPマイナス10**）

「ここじゃ避けようがない。一時、撤退だ！」

ぼくたちは後退した。さいわい、ザンウェイターどもは追ってこない。⇩335へ

450

ルラキルが手のひらを前に差しだした。大気がその手に集中していく！　水素と酸素が融合し、空中に水滴が形作られていく。これは……!?　バータを使う気か！
時間にしたら、ほんのゼロコンマ以下の出来事だったろう。ぼくは、ヤツの指先にフォイエを叩きこむと、ネイソードを頭上に振りあげ、一直線に切りおろした！
ヤツは、2、3歩ヨロヨロと前に歩いて、それからドサッと前に倒れた。
やった……。ぼくは、剣をおさめ、緊張を解いた。みんなが嬉しそうに駆けよって来る。
「おまえたちは……」ルラキルは、傷ついた体を、苦しげに壁にもたせかけて呟いた。
「それほど……までに、幸福の……存在を信じているのか」
「幸福は、自ら進んでつかみ取るもの。少なくとも、ぼくは、そう信じています」
ルラキルは、微かに笑ったようだった。
「いい目をしている……。ならば……この先にいき……、邪悪の神を……ほろぼすがいい」
ルラキルの血にまみれた手が、壁の隠しスイッチを押した。ゴゴゴ……と音をたてて、壁に彫りこまれていた邪神像がふたつにわかれていく。
「私は……妻と子の待つ……世界へと、行くことにしよう……。フフ……弟に、さぞや

怒られるのだろうな……」

止める間もなかった。ルラキルは、自らの身を、自らの剣の上に投げだした！

……息途絶えた彼の体をマントで包み、広間のすみにそっと横たえた。

「さあ、ダークファルスを倒しに行こう！」

ぼくたちは、邪神像の扉から、地下へと入っていった。中は、巨大なダンジョンになっている。これが最後だ！

⇩435へ

451

ライトアーハは、フォイエのテクニックを使って火の玉を飛ばしてきた。そのすばやい攻撃に、ぼくたちはダメージを受けた（ＨＰマイナス１）。

こいつに勝つには……。

⇩467へ

452

通路を進んでいるうち、何か、妙な威圧感を感じ始めた。……いる。近くにヤツはいる。全員、同じように感じていたらしい。みんなの顔が、緊張に引きしまる。

なおも歩いていると、どこからともなく、血のように真っ赤な霧が流れてきた。不気味な霧はしだいに濃さを増し、ついに、床が完全に見えなくなってしまった。



452●霧の中から，ゆっくりとメタリックブルーの生物が姿を現した。奇怪な怪物――こいつがダークファルスか!!

次の瞬間。ドーンと突き上げるような衝撃がきて、霧の中から、ゆっくりとメタリックブルーの生物が姿を現した！　信じられないほどの巨大さだ!!　周囲に異臭が漂い、また邪悪な気が満ちる。その不気味な巨体！　重々しい声！　奇怪な顔！　強靱そうな四肢！　こいつが、こいつがダークファルス!!

「ウオオオオオオ！　私はダークファルス！　滅びのためにもたらされた者。人々の怒り、苦しみ、悲しみが私の喜び。私がいる限り、人間に幸福など手に入れさせぬ！　おまえたちも、私の腕の中で死ぬがよい!!　かつて私が滅ぼした数千億の人間同様に！」

ヤツは、上半身を赤い霧の中から出し、ぼくたちに覆いかぶさるように両腕を頭上にあげた。驚くべき大きさ！　まるで生きた山だ！　よくみると、なんと、その上腕にも不気味な顔がついており、独立した意志を持って攻撃してくる。右手、左手、そして体と、一度に3回も攻撃してくるとは！

なんて生物だ！　さすがすべての悪の源！　よーし、それなら……。

●左手を攻撃……⇩491へ　●右手を攻撃……⇩422へ
●ボディを攻撃……⇩433へ

453

デスマダーがムチをふるい、ぼくたちを攻撃した（ＨＰマイナス２）。

「負けて、負けてたまるかよ！」
ぼくは思いきって踏みこむと、デスマダーのムチを奪いとった。
「きさまぁ！　グラブトで潰してくれる！」
ところが、ヤツはミスを犯した。グラブトのテクニックは、近すぎる敵には効かないのだ。強力になった重力波に巻きこまれ、味方のはずのパラクラゲが無残に潰れた。あわてるデスマダー。今だ！　ぼくはネイソードをヤツの胸に突き刺した。
通路をどんどん進んでいく。——うーん何かこの辺、見おぼえがあるよーな。

⇩261へ

454

エビルサイドを倒し、さらに奥へ。すると、突き当たりに大きな扉が見えてきた。
その前に立っていた守備兵が、こちらを向いた！　ネオマダーとブラックマダーだ！
「ふ。道化がよくもノコノコと……。我々に踊らされているとも知らず、実に計画通りに動いてくれたものよ！」
☆バトル　ネオマダー、ブラックマダー＝99　シーン＝HP＋Cで戦います。
●勝った……………⇩427へ　●負けた……………⇩417へ

455

メタクラゲが、触手の先から鋭い高圧の水流を噴きだした。その『水の剣』が、ルナの肩口をかすめた（**HPマイナス3**）。
ルナは舌打ちして、スライサーを投げた。メタクラゲをまっぷたつにし、さらにリル・ハ・マの左腕を切り落とす！
「ヤツらにテクニックを使わせるな！」
ぼくが言うより早く、ライアの矢がリル・ハ・マの眉間を貫いていた。うろたえるトライハイトアーハは、シーレンのネイショットにとどめを刺された。
「大丈夫か、ルナ？」
「こんなもの、かすり傷だ。……それより、この先は行き止まりみたいだが」
本当だった。ぼくたちは、通路を引き返した。

⇩482へ

456

なんだ。行き止まりだ。引き返そう。

⇩478へ

457

T字路だ。こんどはどこを選ぼうか。

●北へ……⇩420へ
●東へ……⇩497へ
●西へ……⇩475へ

458

パイロッタは、確かグランディレクタの南西にあると聞いた。ライアを仲間にしたぼくたちは、地上へもどり、グランディレクタのある西の世界へもどった。**チェックmは?**

●ある……⇩410へ
●ない……⇩443へ

459

ぼくたちは、いったん近くの飛行場に着陸した。マリンパーツをシーレンに装着し、マリンシーレンに変身して島へ向かう。
⇩364へ

460

奥へと進んでいくと、宝箱があった。中には、切れ味の鋭さでは、クロー系にも劣らないと言われる、ラコニアソードが入っていた**(チェックt)**。
さらに進むと、行き止まりになってしまった。しかたないので、もどって左の道を行くことにした。
⇩348へ

461

待てよ。オラキオは『邪悪なる力』の名を海底に沈めたと伝説にあったな。ということは、これを抜いてしまったら『邪悪なる力』の復活に、手を貸してしまうんじゃないか？でも『オラキオの剣』がないと『邪悪なる力』は倒せないし……。うーん、困った。
ぼくたちは、神殿の中で、いつまでも悩んでいた。

END

462

さて、これから、どこに行けばいいのか……。手がかりを失ったぼくたちは、寂しい草原の中で立ちすくんだ。そのとき。カシャン、カシャン、カシャン……。ものがこすれ合う乾いた音が、聞こえてきた。草むらの間から、ヌッとガイコツの不気味な顔をのぞく。
スケルトナイト！
さらに猛々しい鳴き声が耳を打った。すぐ近くにべつの怪物が潜んでいるのか……？

●戦う……………⇩476へ　●逃げる……………⇩488へ

463

「おまえさんがた、ルーンに会いたいなら、南西にあるパイロッタへ行ってみるといい。

そして、そこで手段を見つけ、『紫の月』へ行くんだよ！」（チェックー）

『紫の月』？　残ったもうひとつのサテライトに、ルーンがいるというのか？

●パイロッタに行く……⇩293へ　●行かない……⇩374へ

464

そういえば、父から聞いた覚えがある。砂漠にさまよっていた狂えるアンドロイドの話を。確か、そのアンドロイドがミューンといったはず。

ぼくたちは砂漠の世界へと向かった。　⇩301へ

465

敵は、突然攻撃をしかけてきた！（HPマイナス4）

●戦う……⇩415へ　●逃げる……⇩314へ

466

ぼくたちは村を出た。シーレンがもう一度変身し、また空中都市探しを開始する。

だが、この世界の西半分にはもう何もなかった。よし、東を探そう。　⇩431へ

467

ライトアーハは腕から火の玉を飛ばしてきた。同時にブルーフィアルも突っこんでくる。
「散るんだ！」あやういところで、その攻撃をかわす。うまいことに、逆に敵を囲むような形になった。火を消すには水だ！　ぼくはバータのテクニックを使った。剣のように鋭い水流を、ヤツらに向かって噴きだす。シーレン、ライア、ルナもそれに続く。
四方からその攻撃を受けたブルーフィアルは消滅し、ライトアーハも大きく体勢をくずした。今だ！　必殺のネイソードが大きく弧を描き、邪神の使いライトアーハを切り裂いた！　砕け散れ！　邪神の使いよ!!

⇩496へ

468

賢者の島につき、4人に『伝説の武器』を示した。
「はじめて、すべての『伝説の武器』がそろったか……。封印を解く時がきたようだ」
賢者は、ぼくたちのひとりひとりの顔を見つめた。
「よく聞け！　いま、封印を解く！　『武器にして武器にあらず』……一瞬の輝きのために、この世界にもたらされたもの……その名を、ネイという！」
古代の言葉がよみがえり、美しい旋律となってぼくたちの耳を打った。その時、ミューは光のテクニック、『グランツ』を覚えていた。

ぼくたちが島を出ようとすると、なんと、空中都市クランクレアが頭上に！　スカイシーレンで上に昇ると、例の男たちが出迎えてくれた。
「よくぞ失われた名前を手に入れた。いよいよ、我らの役目も終わるようだ」
男はぼくたちから『伝説の武器』を受け取ると、それを囲むようにして立った。
「我らの命と引き換えに唱える祈り……それによって『最強の武器』が生まれる」
彼らの口から、奇妙な音律の呪文が流れる。それとともに、『伝説の武器』は、しだいに輝き、真っ白な光を放っていく！　呪文が最高潮に達したとき！　すべての武器は、美しく輝く、黄金色の武器に変わっていた。こ、これは？
「今……『伝説の武器』は……ネイの名を持つネイソード、ネイクロー、ネイショット、ネイボウ、ネイスライサーに変わったぞ……」
男たちは、青ざめた顔でこちらを向いた。
「ネイシリーズウェポンを装備するのだ！　最後の世界に渡り、『邪悪なる力』を……」
力つきて、男たちはつぎつぎと息絶えた。ぼくたちは静かに黙禱し、その場を離れた。都市の入り口には彼らの忠実なロボットたちがあとを追うように、動かなくなっていた……。
ぼくたちはすべての人々の思いのこもった武器をそれぞれに装備し、最後の戦いへの決意を固めた。でも最後の世界に渡る前に、もう一度他の世界を見ておきたい気もするが。

●最後の世界へ……………⇩492へ　●他の世界へ……………⇩479へ

469

ギガ・ラ・ルグが、指からすさまじい電光を発した！　ぼくたち全員が、それで床にたたきつけられる。さらにネオマダーがムチをふるい、パラクラゲが『水の剣』を放ってくる。反撃しようにも、体がしびれて思うように動かない。
次に放ってきたギガ・ラ・ルグの電撃は、さっきの数倍の威力があり、ぼくたちの息の根をとめた……。

END

470

2体のロボットは両腕を振りあげた。ザン・テクニックのかまえか？
しかし、遅い！　真空波が発生するより早くシーレンの銃が、ザンウェイターどもを撃ち抜いた！　ぼくはすばやくヤツらの上に飛び乗り、とどめを刺した。ジャマ者を片づけると、さらに北に向かって進んでいった。まっすぐの通路がかなり続く。

⇩490へ

471

神殿の通路を歩いていると、気味の悪い歌のようなものがきこえてきた。同時に、まるで闇の化身のような魔術師、イマジオメイジがふたり現れた！

「愚かなり……。戦いがすべての世界に広がることを恐れたライアは、世界をつなぐ通路を閉ざした……」
「愚かなり……。それをアイン・ル・シールは、次々と開いてくれた……」
「愚かなり……、愚かなり……」
ちくしょう、こいつら、からかっているのか！

☆バトル　イマジオメイジ×2＝98　シーン＝HP＋Fで戦います。

●勝った……⇩386へ　**●負けた**……⇩493へ

472

十字路に出た。さて、どっちへ行こうか。

●北へ……⇩290へ　**●南へ**……⇩487へ

●東へ……⇩321へ　**●西へ**……⇩437へ

473

次々と崩れていく神殿の壁。必死になって瓦礫を避けながら、シーレンは、フルスピードで脱出を図った。しかし、ついに……。
倒れた柱が進路をふさぎ、ぼくたちは、あっという間に瓦礫の下敷になった。

END

474

残るは、ボディのみ！　これで最後だ、ダークファルス!!

「オオオオオオッ！　おまえたちなどに……愚かな人間などに、負けはせん！」

「それは、こっちのセリフだ！」

☆バトル　ダークファルス＝88　シーン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩447へ　●負けた……⇩387へ

475

なんだ行き止まりだ。西に進んだら、通路はすぐに突き当たりに。もどろうとしたら、壁から矢が！　シーレンがぼくをかばい、ボディに傷をつけてしまった（HPマイナス4）。

チェックgはあるか？

●ある……⇩359へ　●ない……⇩242へ

476

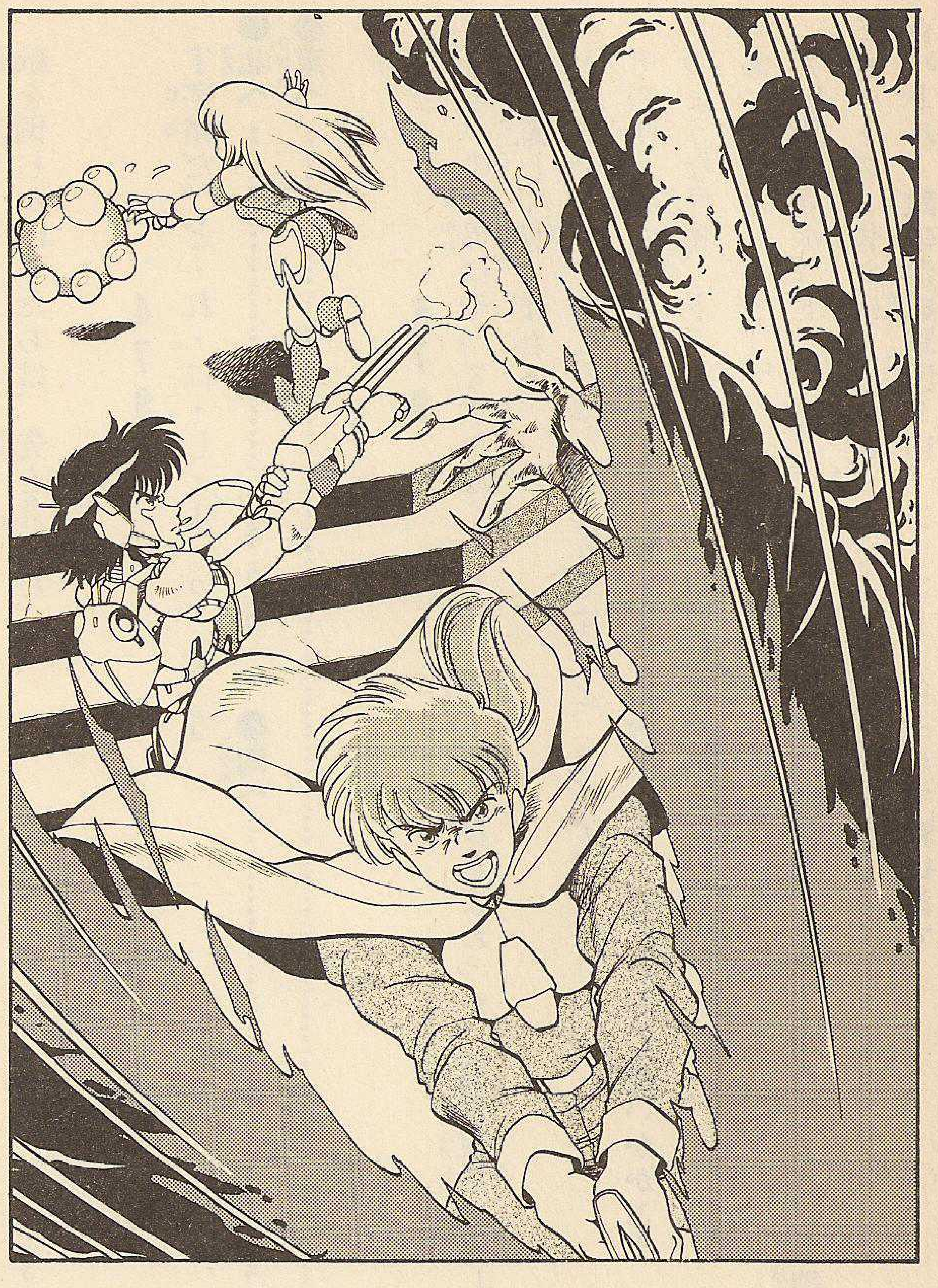
先手必勝！　ぼくは、ザンのテクニックを使った。真空の竜巻がスケルトナイトを巻

きこみ、さらに周囲の草むらをなぎ払った。
ギェエエーッ！　叫び声をあげながら、巨大な竜の首が草むらから飛びだしてきた。
セキリュウオウ！　こんな大物が潜んでいたのか。
すかさずライアの矢とシーレンの銃弾が、セキリュウオウの巨体に命中した。セキリュウオウは、一度だけ炎を噴き上げるともんどり打って倒れた。
振り返れば、ルナがスライサーでスケルトナイトにとどめを刺したところだった。
……戦いには勝ったものの、心は晴れなかった。空中都市クランクレアまではなんとか辿り着けたものの、それから先の手がかりは何もないのだ。あのロボットを壊してしまったために……。いったい、邪神はいつ復活するのか？　ぼくたちは不安を胸に、あてどもなくさまようしかなかった。

END

477

ルナのネイスライサーが一閃し、ふたりの怪人のムチをはねとばした。
ヤツらは慌てて火球を放ってくる。
そんなものに当たってたまるか！　ぼくはヤツらの懐に飛びこみ、ネオマダーの胸を突き刺した。そして、ライアの矢がデスマダーの喉を貫いた。



477●そんなものに当(あ)たってたまるか！　ぼくはヤツらの懐(ふところ)に飛(と)びこみ，切(き)りつけた。仲間(なかま)もぼくに続(つづ)いて攻撃(こうげき)した。

敵を倒したぼくたちは、先を急いだ。　⇩321へ

478

T字路だ。ど・れ・に・し・よ・う・か・な。

●北へ……………⇩456へ　**●南へ**……………⇩423へ

●東へ…………………………………⇩186へ

479

リークの世界にやってきたぼくたちは、城下町を歩きまわった。邪神復活の兆しがないか、注意して見てまわる。

「とくに変わったところはないようです」と、ライア。

その時だった。塀の陰から黒いかたまりが飛びだし、ぼくたちに襲いかかる！　コウモリのような怪物、ドラキュルだ！**（HPマイナス6）**

「あっちにもいるぞ！」

2種類のロボット――カードが何枚もつながったようなウォールカードと、人型のゴートナイトの2体がぼくたちの前に立ちふさがった。

☆バトル　敵の混成軍団＝117　シーン＝HP＋Cで戦います。

●勝った……⇩442へ　●負けた……⇩405へ

480

「なんだって!?」
「ほほほ……。覚悟するがよい」
今や完全に正体を現したライトアーハ。彼女が指をパチンと鳴らすと、青い火の玉がボウッと周囲に浮かび上がった。こいつも怪物の一種、ブルーフィアルだ。
☆バトル　敵の混成軍団＝100　シーン＝HP＋Dで戦います。
●勝った……⇩467へ　●負けた……⇩451へ

481

西に向かって歩く。と、まもなく通路は行き止まりに。もどるしかない。……⇩437へ

482

T字路に出た。どこへ行こうか。
●北へ……⇩381へ　●南へ……⇩435へ
●東へ……⇩494へ

483

ギガ・ラ・ルグが、細長い指を前に突きだした。そこからほとばしる電光！
かわしそこねたシーレンが、うしろの壁まで吹っ飛んでいった（ＨＰマイナス３）。
魔術師は、今度はぼくを狙った。妖しげな気が放たれようとする。
だが、その前にぼくは跳び上がっていた。ヤツの真上から、ネイソードを振り下ろす！
ギガ・ラ・ルグはまっぷたつになって倒れた。残りの敵も、ライアとルナが片づけていた。
シーレンが、ミューに助け起こされた。深刻なダメージは受けていないようだ。
通路の先は、Ｔ字路になっていた。どこへいこうか。

●南へ……⇩437へ　●東へ……⇩290へ
●西へ……⇩452へ

484

神殿内をゆっくりと進む。邪悪な気配があちこちからしてくる。ここは神殿は神殿でも、邪神をあがめる神殿に違いない。だが、なぜ、ルラキルが？
「おまえの疑問に答えてやろう」
豪華な彫刻がほどこされた柱から、青い炎と共に、メギドサイドが現れた！
「かつて、マーリナの記憶を奪い、リークの国に送り届けたのは、私たち！　おまえの祖

父は、マーリナを求め、まんまとサテライトを呼びもどしてくれた。おかげで、サイレンとルーンは目覚め、大戦争をおこしてくれた……」

なんだって？　ちくしょう、そんな企みで祖父を！　許さん!!

☆バトル　メギドサイド、ブルーフィアル＝97　シーン＝HP＋Aで戦います。

●勝った……⇩409へ　●負けた……⇩436へ

485

北へと進んだが、道はすぐに行き止まりに。しかたない。まわれ右！　**⇩261へ**

486

「ぼくの父母は、おまえのビーム攻撃によって爆発した『青の月』と運命を共にした！　故郷を追われ、流浪の民と化した人々もいる！　故国を廃墟にされたものもいる！　それでも、懸命に生きている人々を……！　戦いで、おまえひとりが大切なものを失ったとでも思っているのか！」ネイソードを、思いきり横になぎはらう。

しかし、紙一重でかわされた。横から、ブルーフィアルがフォイエを使う。くそっ！　腕に軽い火傷が（**HPマイナス7**）。

「邪魔だ！」ぼくは、水流の剣、バータでフィアルマたちを攻撃。シーレン、ルナ、ラ

イアがそれに続き、ヤツらはあっという間に消滅した。
さあ、邪魔者は片づけた。ルラキル、覚悟！

☆バトル　ルラキル＝108　シーン＝HP＋Bで戦います。

●勝った……⇩450へ　**●負けた……⇩412へ**

487

南の通路は、すぐに行き止まりに。もどるしかないな。

⇩472へ

488

「逃げるんだ！」スケルトナイトの振り下ろす剣をかわすと、ぼくはそう叫んだ。
仲間たちは、すばやく草むらの中に散った。だが——その直後、悪夢のような出来事が起こった。走りだしたミュー、シーレン、ライアが炎に包まれたのだ。
草むらをかき分け、巨大な竜の首が現われた。セキリュウオウ！　こいつのしわざか！
セキリュウオウは、さらに真っ赤な炎を噴きだして、ルナも火だるまにした。
ぼくは絶叫し、ヤツに切りかかった。
手ごたえはあったが、さすがに一撃で死ぬようなヤツではない。２撃目を加えようと後ろにまわったとたん、セキリュウオウのムチのような尻尾がぼくを打ちつけた。草むらに

倒れたぼくの上にスケルトナイトの鋭い剣が……。こんなところでやられるとは！

END

489

南へと進むと、やがて東に曲がった。そのままどんどん進んでいく。

⇩435へ

490

「ねえ、妙な気配がしませんか？」

さらに北へ進んでしばらくたった頃、ライアが不安そうな表情で言いだした。

「確かに……何やら殺気が感じられる……そこだっ！」

ルナが、天井に向かってスライサーを投げる！　スライサーは、天井の機械類の中に潜んでいた敵を狙い違わず切り裂いた！

途端に、ブシュウウウウと、空気の漏れるような音がして、何かがものすごいスピードで飛んできた。それは、ぼくたちの間を目まぐるしく駆け回る。

「きゃあ！」ミューがまともにそいつにぶつかってしまった！（HPマイナス2）だが、それがそいつの最後の力だったらしく、ヤツも、力なく地面に落ちていった。おそるおそるのぞきこんで、納得。こいつは風船の化物、オーラバルーンだったのだ。

⇩424へ

491

ぼくたちは、左手に攻撃を集中した！
それぞれの『最強の武器』が、つぎつぎと左手に襲いかかる。
「シーン、危ない！」ミューの声に、身を伏せる。右手が、ぼくに向かってフォイエを使ってきたのだ。直撃はくらわなかったが、背中を炎の塊がかすった（HPマイナス12）。
さすがに強力なテクニックを使ってくる！
「くらえぇぇぇぇぇっ!!」ぼくは、ネイソードをヤツの左腕にある顔に叩きこんだ！　すさまじい悲鳴をあげて、左腕がぷつりと動かなくなる。よーし、次は？

●右手を攻撃……………⇩366へ
●ボディを攻撃……………⇩440へ

492

7つあるこの宇宙船の世界の、最後に残ったひとつに向かった。
そこは、一面の草原の他には何もない世界だった。一面の草原の中、空中にぽっかり浮かぶようにして、巨大な空中都市がある。おそらく、ヤツはここに——！　ぼくたちは、スカイシーレンでその都市に乗りこんだ。
「ラシュートにようこそ」
予想に反して、ぼくたちを迎えたのは、穏やかな微笑みを浮かべた美しい女性だった。

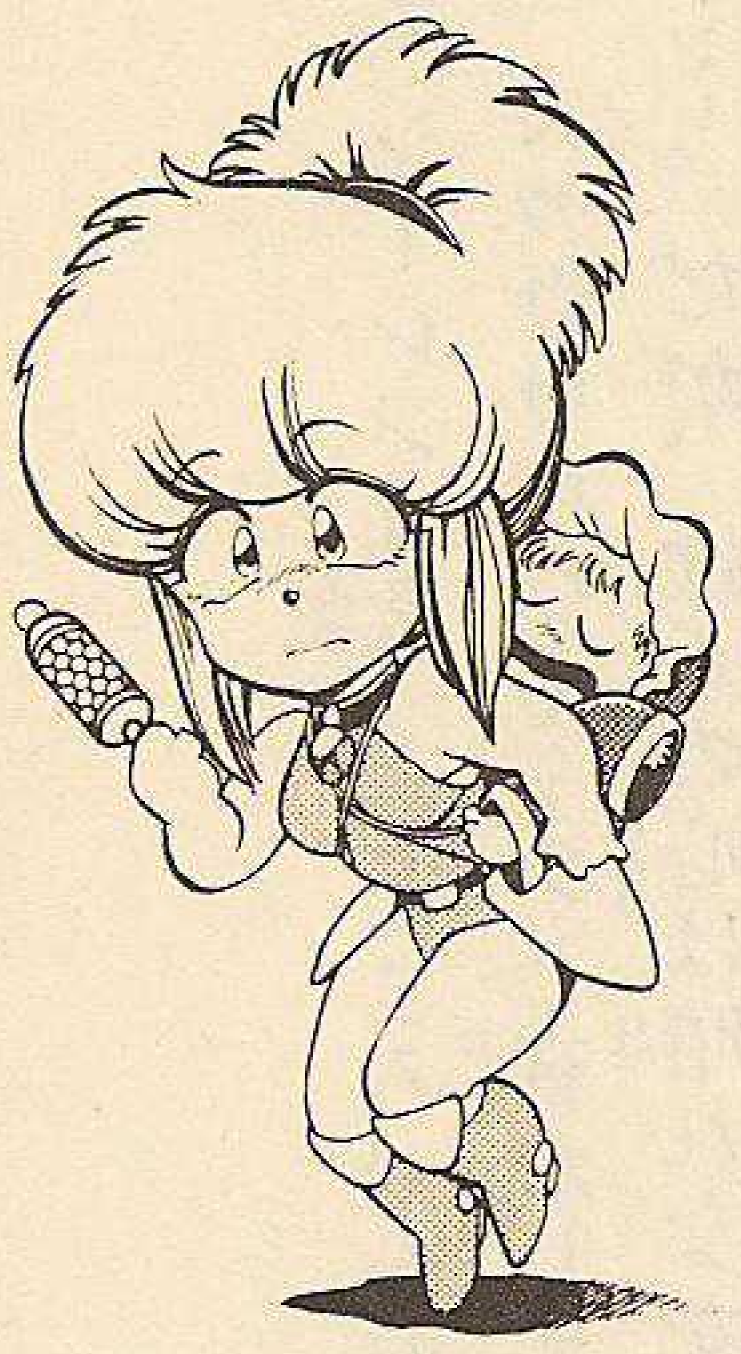
「ここは、オラキオ様の双子の兄上、ルラキル様の都です」
何だって!?
●ルラキルに会ってみよう…⇩305へ
●他の世界へ……⇩294へ

493

イマジオメイジは、ふたりいっぺんにザンのテクニックを使ってきた。何十倍にも増幅された真空竜巻が、体を切り裂く！（**HPマイナス10**）おのれ！　ぼくは怒りに身をまかせてネイソードをふるった！　返す刀でふたりともやっつける。
⇩311へ

494

東へ進んでいくと、やがて、通路は北へ曲がった。さらに進むと、今度はまた東に。そして、最後に北へ曲がった。
「この迷宮を作った人の性格がわかるわね」ライアがそう感想をもらす。
⇩261へ



495

次々と崩れていく神殿の壁を、シーレンは危ういところでかわし、フルスピードで入り口から飛びだした！　次の瞬間、ズゥウウウ……ンと音がして、神殿は、完全に崩れた。

なんとか間に合ったようだ……。だが、ぼくの心は晴れなかった。手の中の、黒い『オラキオの剣』が重い。なんという皮肉だろうか。『邪悪なる力』――ダークファルスを倒そうと剣を手に入れて、ダークファルスを完全に復活させてしまうとは。

「あの――ダークファルスの言っていたことを考えているんでしょう」

ライアが、黙りこんでいるぼくに微笑みかけた。

「気にすることはないわ。どちらにしろ、近いうちに復活すると言われていたでしょう？」

「そうだ。それに、二度と復活できないように、今度こそ倒してしまえばよい」

ルナが不敵にニヤリと笑う。かたわらでミューもうなずいている。

「……そうだね。そのためにも、最後の武器『ミューンクロー』を手に入れなければ」

ぼくも、やっと笑顔を見せることができた。**チェックSは？**

●ある……⇩301へ　**●ない……⇩241へ**

496

ライトアーハを倒したのも束の間、神殿の出入り口のほうからすさまじい音が聞こえて

きた。巨大な石の壁が落下し、出入り口を完全に塞いでしまう。しまった！
「大変だ！　もう出られない」ルナが叫んだ。
「あきらめてはだめ！」ライアの言う通りだ。とりあえずぼくたちは、出口探しの前にルラキルに会うことにした。この神殿のどこにいるかが問題だが……。

⇩484へ

497

薄暗い通路の前方に、大きな人影が浮かび上がった。ムチを持った大男――デスマダーだ。それに、メスクラゲの一種、パラクラゲが1匹。

☆バトル　敵混成軍＝106　シーンE＋HPで戦います。

●勝った……**⇩435へ**
●負けた……**⇩369へ**

498

しかし、ぼくの腰にある剣を見た途端、彼女は飛びのいた。
「違う！『黒い剣』を持っていない！　ああ、オラキオ様はどこ？」
哀しみに満ちたその声は、いつまでもぼくの耳に残った**（チェックS）**。どうやら『オラキオの剣』を先に探したほうがいいようだ。ぼくたちは砂漠の世界を出た。途中、敵の奇襲にあってしまったが**（HPマイナス10）**、なんとか倒せた。

⇩338へ

499

ありゃ。行き止まりになってしまった。引き返そう。

⇩321へ

500

ヤツのフォイエが、ぼくたちのまん中で炸裂！　たまらず全員が吹きとばされる！
「シーレン！」シーレンが、ミューをかばったらしい。ふたりぶんの衝撃に、さしもの強靭なロボットも、ボディがひしゃげている。
「大……丈夫。私は、こんなことでは……」
ぼくたちが、気をとられているスキに、第2弾が飛んできた！
すさまじい爆発の風圧と熱風!!　またも、全員壁にたたきつけられた。だめだ……！
ダークファルスの圧倒的な力の前に、ぼくたちは次第に追いつめられていく。
「どうした、少しは楽しませてくれると思ったが……」
ぼくは剣を杖にして、ヨロヨロと立ち上がった。ライア、ルナは気を失ってしまったようだ。意識のあるミュー、シーレンも、とうてい戦える状態ではない。一方、ぼくもただ戦う意志が、かろうじて体を支えているにすぎない。
しかしそれも限界だ。あいつとは、あまりに強さのケタが違いすぎる……。
「これまでだな」ダークファルスが、にやりと笑った。だめだ！　こんどフォイエをくら

ったら……！　その瞬間、ぼくの頭の中は、真っ白な閃光で満たされた。

爆発するサテライト……。父上、母上……。廃墟となった、サテラ国、シール国……。壊れてしまったミューン、サイレン……ぼくに、すべてを託した優しい人々……！。

「おまえの、おまえみたいな化物に、この世界を好きにされてたまるか！」

ぼくは、体に高まるすべての力を集中させ、エネルギーとして放出させる。究極の破壊テクニック『メギド』！　神が世界を滅ぼす時に使ったとされる、メギドの火だ!!

「ダークファルス!!　ぼくと、人間の願いをこめた、この炎に灼かれるがいい!!」

すさまじい光がヤツめがけてほとばしる！　つぎの瞬間、それは、何もかも破壊しつくす、強烈な輝きとなった！

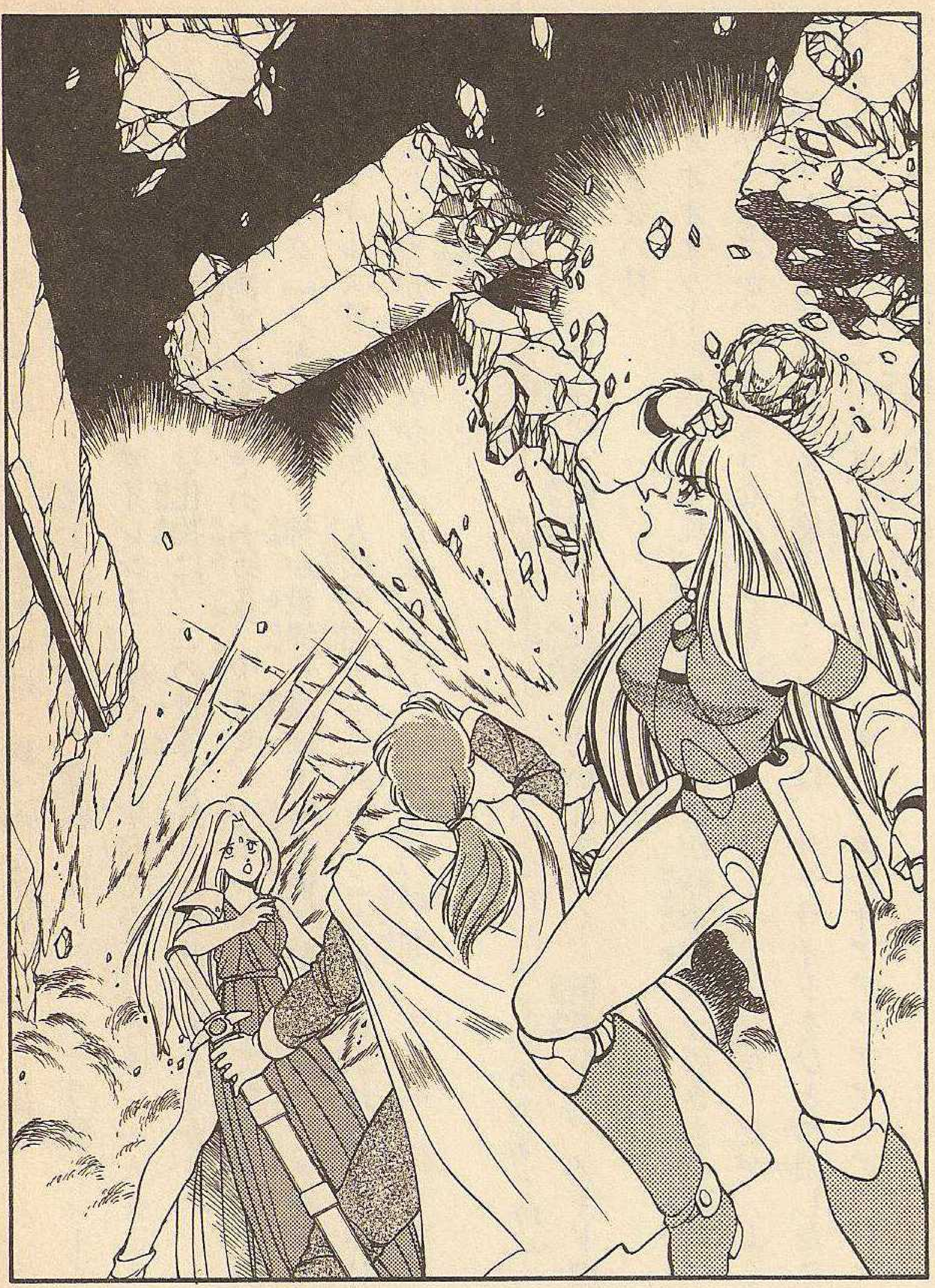
「オオオオオ！　この火！『メギド』！　なぜ、これがぁぁぁぁぁっ!?」

ダークファルスの巨体が、数億度の炎熱に灼かれていく。何者をも、メギドの火を防ぐことはできない!!

グオオオオオッ！　炎に包まれ、ダークファルスが断末魔のうめきをあげる。

「まさか、まさか、このような小僧どもに破れるとは……！　だが、だが、よく聞くがいい。私は千年ごとによみがえる魔王……。今回は、サテライトをひとつ消したことで満足しよう。この次は、この次は、必ず……！　オ、ウオオオアアアアアアッ!!」

ダークファルスは、業火の中に崩れさった。



500●『メギド』の膨大なエネルギーは，空中都市そのものを爆発させようとしていた。もはや逃げ延びる時間はなかった。

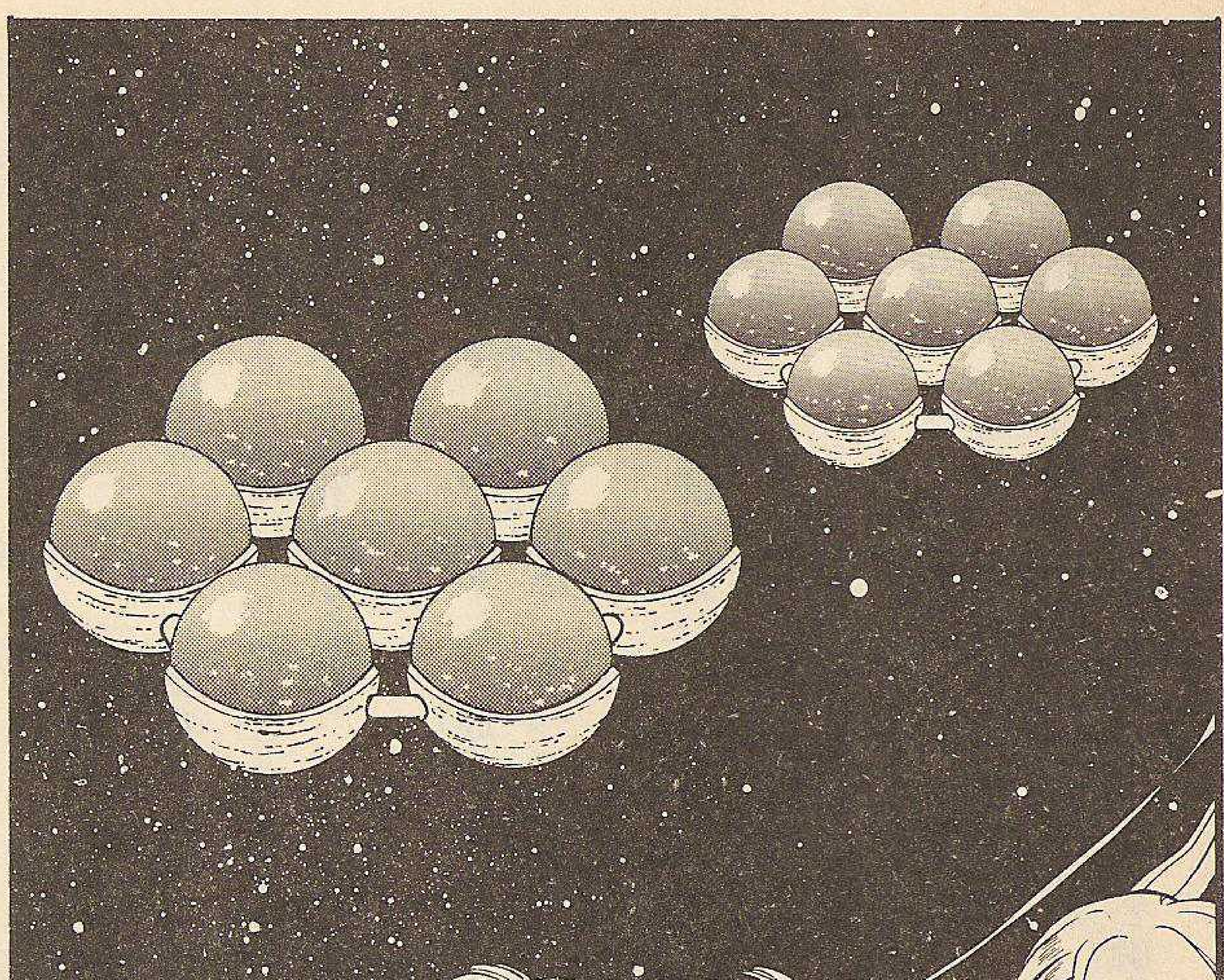
ぼくは、放心したように、その場に立ちつくしていた。
勝った。ダークファルスに……勝った！
だが、いつまでもそうしているわけにはいかなかった。放たれた『メギド』の膨大なエネルギーが、空中都市そのものを爆発させようとしていたのだ。
強大な力を持つテクニック『メギド』。邪神を滅ぼす神の火は、ぼくたちも襲う、両刃の剣だった。まさに、破壊と滅亡――そのための力なのだ！
ぼくたちは、懸命に脱出への道をたどった。しかし、空中都市は、あちこちで爆発をおこし、もはや逃げ延びる時間はなかった。
支えあいながら、出口にむかったぼくたちに、迷宮の壁が落ちかかる――！
これが世界の意思なのか!? ダークファルスでなく、もしかしたら、あの火こそ……。
「いやぁぁぁぁぁぁぁっ!! もうこれ以上、わたしの愛する人たちを苦しめないで！」
もはや絶体絶命と覚悟を決めたとき、ミューの悲痛な叫びが響いた。
何かがあたりに満ちていく。白い……光？ しかし、逃げるだけの力は残っていなかった。ああ、もうすべてが終わるのだ。そう思うと、不思議に静かな気持ちになった。
そしてぼくたちは、白い闇の中に引きこまれていった。

⇩エピローグへ

エピローグ

「……様、シーン様！」
気がつくと、ミューの心配そうな顔が目の前にあった。
「ミュー？　こ、ここは」
驚いて起き上がろうとすると、激しい頭痛がぼくを襲った。思わず、頭を抱えてうずくまってしまう。
「急に起き上がってはだめ。『メギド』の使用で、体力を消耗しているんです」
ミューの手が、そっと背中にそえられる。そうか、思いだしたぞ。ぼくたちは、空中都市でダークファルスと……。そして都市が崩れて……そうだ、みんなは？
「ここにいるぞ」
ぼくが顔をあげるのを待っていたように、ルナが言った。隣ではライアが笑っている。
大地の上に座るふたりのうしろには、シーレンがゆったりと立っている。
ぼくたちは、見渡す限り一面の草原の上にいた。
ここは最後の世界。しかし、空を見あげても空中には、もう邪悪の都市は浮かんでない。
あとかたもなく崩壊し、湖の底に沈んでしまったのだ。
都市が崩れ落ちるその最後の瞬間、ぼくたちは、この地表までテレポートした。ぼく

エピローグ



たちを包んでくれたあの白い光——ミューの心からの願いが発動させた、もうひとつの究極の力、光のテクニック『グランツ』によって。

そう、この世界はふたつの究極の力を持っているんだ。『メギド』がすべてを破壊しつくす恐怖の力なら、『グランツ』はすべてを包み守る、愛の力。人類がそれを忘れない限り、いつかヤツ——『邪悪なる力』がよみがえったとしても、絶対に負けたりはしないだろう。

「シーン様！ 空——宇宙から、通信が入っています」

ぼくが全員の無事を確かめ、すべての事情を飲みこんだ頃、シーレンが宇宙からの通信をキャッチした。

シーレンは、耳につけたレシーバーから聞こえてくる声にしばらく耳を澄ませていたが、

「『ネオパルマ』です！ パルマ人のもうひとつの生き残り、宇宙船『ネオパルマ』からの通信です！」

感情などないといっていたシーレンの、初めての興奮した声だった。彼はすぐに落ち着きを取りもどし、通信文を読みあげ始めた。

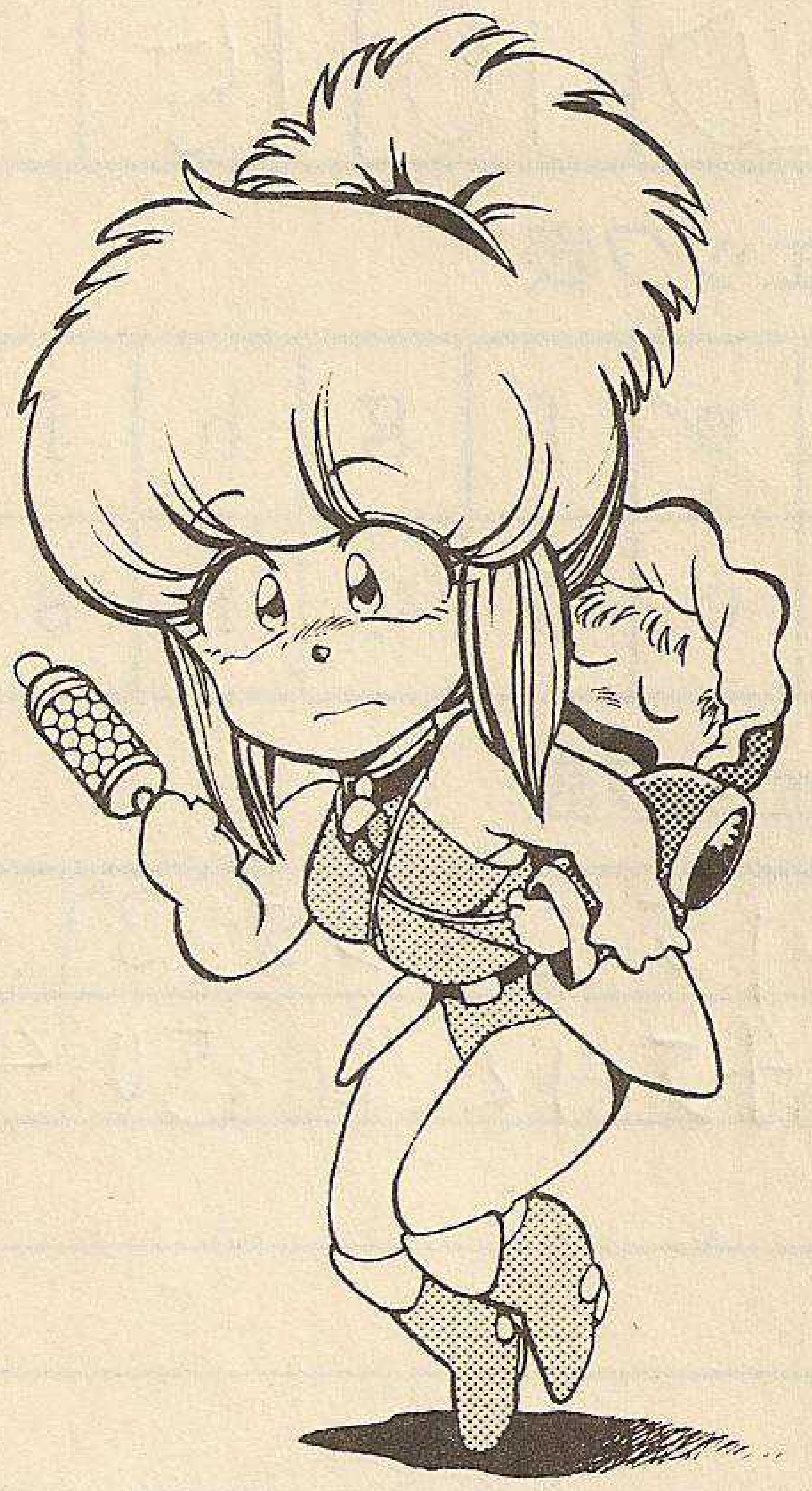
「千年の間離ればなれだった『アリサ3世』へ……。こちらは宇宙船『ネオパルマ』のパイロットルーム。宇宙に輝く爆発の光源を調査したら、このような嬉しい発見があろうとは……。サテライトがひとつ消えているが、あれは、その爆発だったのか。ともかく、

エピローグ

広い宇宙でふたたび友を得たことを喜んでいる……」

淡々としたシーレンの声を聞きながら、ぼくたちは立ちあがって空を見あげた。この青い空の向こうに広がる暗黒の宇宙で、今、ふたつきりの兄弟船がめぐりあおうとしている。

ぼくには、徐々に近づきつつある2隻の宇宙船が見えるような気がした。



行動記録紙

バトルポイント表

A	B	C	D	E	F

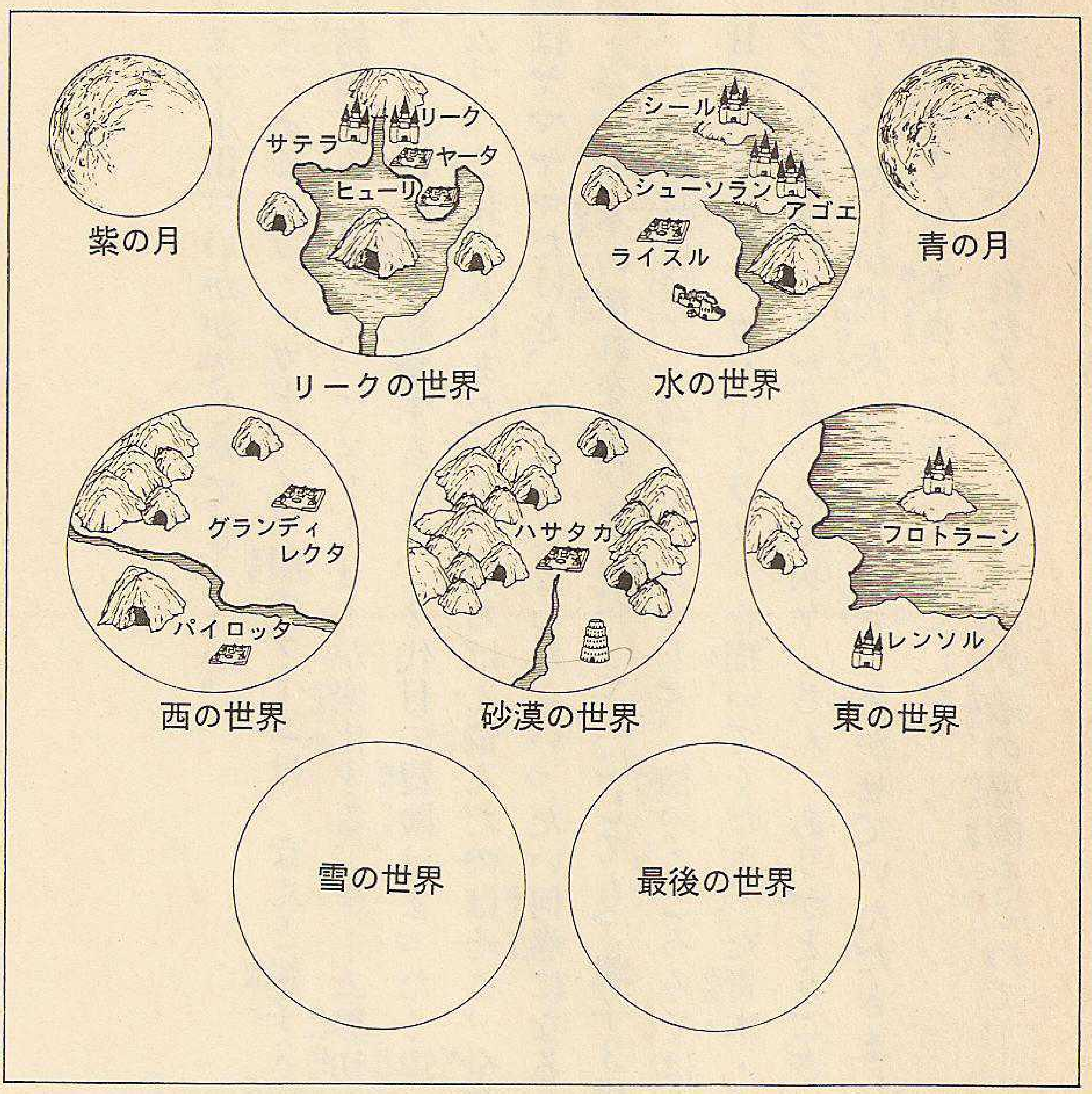
アルファベットチェック表

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
k	l	m	n	o	p	q	r	s	t

ヒットポイントチェック表

10→

PSⅢ世界地図



これがファンタシースターⅢの世界である。このように小さな世界が7つ、それぞれ洞窟でつながって1つの世界を作っている。ただし下の2つの世界はいまだ謎のままである。これは、あなたたちの手で解明してほしい。

あとがき

『ファンタシースターIII』いかがでしたでしょうか。

この本のベースであるセガ・メガドライブ用のゲームは、なんと親子3代の物語で、さらに、主人公の結婚する相手によってストーリーが変化する、ゲーム界初のマルチ・エンディングでした。1代目が誰と結婚するかで、2代目の冒険はまったく違ってきてしまうわけです。ゲームブック化するにあたって、いちばん悩んだのはそこ。全部のストーリーを本にしたいのはヤマヤマだけど、そんなことしたらいったい何巻になることやら……。

結局、涙をのんで、1本の流れを選びました。それにしても、親子3代にわたるゲームブックなんて、双葉文庫冒険ゲームブックシリーズ、初のこころみではないでしょうか。

最後に。I、IIに引き続き、カバーイラストを描いてくださった青木・クニヌーヌ・邦夫さん、本文イラストを描いてくださった影次ケイさん、ありがとうございました。それと、ずうずうしくもわたしが代表してあとがきを書かせていただきましたが、共筆の安藤夏さん、前田炬燵さん、本当にお疲れさまでした。

そして。最後まで読んでくれたみなさんに、最大級の感謝をこめて――。

山崎和緒

編集部から

はるか3代に渡る冒険はいかがでしたか？

あなたは真の敵を見つけだし、見事倒すことができたでしょうか？

当編集部では、今後ともゲームを素材にしたゲームブックを、次々と発表していく予定です。

つきましては、すでに発表しております「冒険ゲームブックシリーズ」を含め当シリーズに対する御意見、御感想をお寄せいただければ幸いです。また、これからゲームブックにして欲しいゲームの希望などもお待ちしております。

〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号㈱双葉社「冒険ゲームブック」編集部　ファンタシースターIII**係**まで、あなたの御氏名、御住所、御年齢、御感想を書いていただいた本のタイトルを忘れずに明記の上、お寄せ下さい。

お寄せいただいた方の中から抽選でゲームブックの最新刊をプレゼントいたします。

企画・構成／スタジオ・ハード　内藤旗彦
制作／山口宏　梅沢鈴代
文／山崎和緒　安藤夏　前田炬燵
作画／影次ケイ
©セガ・エンタープライゼス

ファンタシースターIII
時の継承者

双葉文庫　メガドライブ冒険ゲームブックシリーズ　す02-70

著者　山崎和緒
　　　安藤夏
制作　スタジオ・ハード
発行者　清水文人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL　東京(5261)4818(営業)
(5261)4837(編集)
振替　東京8-117299
印刷　慶昌堂印刷株式会社
製本　㈱若林製本工場

ISBN4-575-76159-1　C0193（落丁・乱丁はお取りかえいたします）
定価・発行日はカバーに表示してあります。

双葉文庫

ISBN4-575-76159-1 C0193 P430E

双葉文庫　定価430円(本体417円)



FUTABASHA ADVENTURE GAME BOOK SERIES

ファンタシースターIII
時の継承者

はるか昔、人々は自在に空を飛び、水に潜り、地を駆けていたという。しかし『ライアとオラキオの戦い』と呼ばれる戦乱が起こり、長く激しい戦いの後に、超科学文明の記録も技術も、失われてしまったのだという――。

それから千年。以前のような科学に守られた暮らしではないにしろ、人々は、平和で、安定した生活を送っていた。だが世界をふたたび暗黒におとしいれようと、秘かに動き始めた邪悪なる影があった！

はたして、伝説の戦いの真実とは!?　真の敵の正体は!?　失われた時を追って、親子3代にわたる長い旅が今、始まる!!